紺碧の窓

井浦美朗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
紺碧の窓

【Ｎコード】
Ｎ０７３９Ｂ

【作者名】
井浦美朗

【あらすじ】
弁護士の橋田愛姫は、検事である父が２０年前に引き取った殺人犯の娘、可八と同居を続けている。平穏な家庭を壊された怨みと、長年寝食を共にすることで芽生えた情の狭間で悩み続ける愛姫。そんなある日、可八に結婚話が持ち上がる。その相手は、愛姫が密かに恋焦がれていた明羅だった・・・。明羅の弟、瑞希を交えて、４人の関係は複雑に絡み合っていく。

第1話（前書き）

この物語はフィクションです。

第1話

電車の窓から見下ろす街は、蒼から漆黒に変わりつつあった。無数に散らばる温かな家明かりは、毎晩違う表情を見せてくれる。

冷たいガラスに額を近づけ、橋田愛姫（はしだいつき）は久々の早い帰宅に安堵していた。ここ暫らく夜中の帰宅が続き、同居人に迷惑をかけていたからだ。待っていなくてもいいと言っても、絶対に起きている。その性格は、誰に似たのだろうか。二十年寝食を共にしていても、もとが赤の他人では、わかる由もない。

「ただいま、可八（かや）。」

都心から電車で四十分ほどの郊外にある中層マンションの一室が、二人の住まいだ。ピアノを持ち込むためにやっと見つけた場所。愛姫は、母の唯一の形見でもあるピアノと一緒でなければ生きていけない。人生の一部と言ってもいい。

「おかえりなさい。」

同居人の可八は、もう十年も同じ向日葵柄のエプロンをしている。高校生になった可八が、「家事一切をまかせてくれ」と言ったとき、愛姫が贈ったものだ。以来、色褪せてもまだ使っている。

「今日は早かったんですね。お仕事、区切りがついたんですか。」

「ええ。一つ裁判が終わったの。」

「すぐ、食事になさいます？」

「そうする。久々にたっぷり寝たいし。」

「じゃあ、すぐよそいますね。」

こういう会話をしていると、可八は自分の妻みたいな存在だとつくづく思う。朝早く夜遅い愛姫の仕事生活は、可八の支えで成り立っている。もし一人だったら、もっと荒んだ私生活をしているか、仕事に全力で打ち込まず適当なラインを引いてしまうかの、どちらかだったろう。もう、二人は二人の家庭を築きあげてしまった。しかし、それはここ五年くらいの新しい安定であり、以前はほとんど

口をきかず、気を許さず、寒々しい関係を続けていた。敬語をつかう可八。横柄な愛姫。それが真の二人の関係を示している。
「今日、おじさまから電話がありましたよ。」
可八の言葉に、愛姫は思わず箸を止めた。「おじさま」とは、愛姫の父親のことだ。
「なんて言ってた？」
「明日、お客様がお見えになるから、と。」
「うちに？」
「ええ。午前中に。」
「せっかくの休日よ？誰が来るというの。」
「さあ・・・。それは何も。」
「あのねえ、あんな男の言うこと、いちいち聞く必要はないのよ？断ってくれたらよかったのに。」
「・・・それは、できません。」
「恩人だから、とでも言うの。」
「そうです。」
「あの男は、偽善者よ。可八が恩を感じる必要なんて全然ないのよ？」
「でも、やっぱり私にとっては恩人です。おじさまが引き取ってくれなかったら、私は今頃死んでいたかもしれません。」
「それは・・・。」
「何より、愛姫さんに会えたんですから。恩人ですよ。」
可八ははにかんだ様に笑って、照れ隠しに用もないのに席を立ち、何かを探す仕草をした。愛姫はそんな可八を救うように、冷蔵庫からフルーツを取ってくれるよう、頼んだ。
こんな平穏な日常は、時々愛姫の過去を強烈に呼び戻す。可八の笑顔を見てホッとする、その次の瞬間に、すべての元凶が笑っているのだということに気付き、冷たい感情が瞳をよぎるのだ。
二十年前、父が可八を引き取ったあの日から、愛姫の人生は変わった。これが運命で、はじめからこうなると決まっていたのだとし

ても、やはり、あるべき道から外れたと思う。そんな人生を見つめなおす機会が、まもなく愛姫に訪れようとしていた。

土曜の午前十時ちょうどに、玄関のチャイムが鳴り響いた。愛姫は自分への客が誰であるか一晩思案した結果、可八を外出させることにした。父がよこす客は、強制見合いの相手か、あるいは・・・。

扉の向こうに現れたのは、百六十センチの愛姫が見上げる高さの三十歳前後の男性だった。紺のスーツと銀の時計が似合う肌の色。黒髪を短めに切りそろえ、品のいい顔立ちをしている。普段、脂ぎった、あるいは干からびた中高年に囲まれて仕事をしている愛姫は、思わず目を奪われてしまった。男は冷静な目で頭を下げ、名刺を差し出した。

「週刊トピックスの、望月明羅と申します。」

その肩書きに、愛姫は緩んだ唇を引き締めた。

週刊トピックスは、大手新聞社が発行している、ゴシップなどは一切載せない硬派な雑誌として有名だ。愛姫も、よく目を通している。

「記者の・・・方ですか。」

「橋田検事よりご紹介頂きまして、お忙しいところ恐縮ですが、ぜひ取材をお願いしたく参りました。」

物怖じしないはっきりした口調。それでいて、媚びていない。営業マンのようなしつこいニュアンスもない。だが、愛姫にとって記者は天敵だ。

「父が何を申し上げたかは存じませんが、私はマスコミを信じておりませんから。」

明羅は軽く頷いた。

「伺っています。ですから、まず取材の趣旨をお話させていただけませんか。」

今までに何十という記者を見てきた。それなりに目を養ってきたつもりだ。この男は信用できるかもしれない。しかし、それは外見に

騙されているだけかもしれない。警戒心を解くことはできない。
「・・・どうぞお入りください。近所に聴かれたくはないので・・・。」
可八を外出させたのは正解だった。記者は可八の秘密を暴きたがる。好奇の目で可八を怯えさせ、事実と推測を織り交ぜて勝手な情報を流す。それが真実でないといくら叫んでも、一度マスコミに取り上げられた内容は、マスコミの力を使っても取り消せはしない。そんなことを、十代の頃に身をもって学んだ。
十六畳のＬＤＫは賃貸暮らしとしては贅沢だが、ピアノを置くためには必要だった。家賃は安くないが、弁護士の愛姫には大変な額ではない。
柔らかなピンク色のソファで向かい合い、可八が用意しておいてくれた茶器で紅茶を入れた。客用のダージリンは、父の好物と知った可八が、いつも買ってくる。
「いただきます。」
カップを持つ長い指に指輪ははまっていない。適齢期の男性を見るたびについ観察してしまう悪い習慣は、二十代後半から始まった。つまりは、それが適齢期の始まりだったのだろう。
「父とは、どういうお知り合いですか。」
自分のカップには手をつけず、愛姫は聞いた。
「私は法曹界の取材が専門です。橋田検事は名検事と有名で、インタビューをお願いしたのが最初です。ですが、二十年前のことは、その前から存じ上げていました。当時中学生だった私にも衝撃的なニュースでしたから。」
愛姫は、思わず眉をひそめた。
「あの報道を、信じたのですか。」
「中学生でしたから、何も疑わずに。」
「殺人犯の娘である可八を引き取った父は、出世と名声のためなら何でもやる薄汚い欲望の塊です。なのに、マスコミはそんな父を褒め称えて！」

思わず口調の強くなった愛姫と反対に、明羅は冷静に言葉をつないだ。
「橋田検事から、娘であるあなたがそう言うだろうということも、お聞きしています。」
愛姫はカッとして拳を握り締めた。
「そう言われたら、私の立場がありません。私の言うことの方が虚言の様ではありませんか。」
「いえ、私はそうは思いません。確かに、藤木可八を引き取ってから何があったかは、聞いています。ただ、事実だけを。ですから、その裏の事情はわからないのです。ですから、取材をお願いしたいのです。今、『事件のその後』というシリーズを連載しています。事件に関わった人々がその後どうなったか、一つの犯罪がどれほどの余罪を残すのか、凶悪犯罪が横行する今こそ、警鐘の意味もこめて、記事にしたいと考えているんです。」
明羅の言葉に、愛姫は再び首を振った。
「十年前、同じような言葉をききました。信じて、また裏切られました。」
「決して興味本位や野次馬的な記事にはしません。今日は、私の記事をいくつか持参しました。それをお読みいただいた上で、お返事をください。今日、即答していただけるとは、毛頭考えておりません。」
明羅のような端正な容姿の男が真剣な表情で訴えれば、大抵の、いや、すべてが意のままになるだろう。しかし、会ったばかりの人間を信じられるほど、愛姫の傷は浅くはない。
取材とは名ばかりの私生活の暴露。
ますます誇張される父の偽善。
「週間トピックスがまともな雑誌であることは知っています。・・・望月さんの記事は拝見させていただきます。可八とも話し合わなければなりませんし、お返事は後日にさせてください。」
明羅は少し安心した面持ちで頭を下げ、早々に引き上げていった。

愛姫は明羅の後姿を見送りながら、この二十年をどう語ることができるのかと、漠然と考えた。
十二歳の夏。突然父が連れてきた青いワンピースの幼女。はじめ、父の隠し子かと本気で疑った。
（いっそその方が楽だったのかもしれない。）
可八との関係を尋ねられるたび、答えられなかった。家族でなく、友人でなく、ただの同居人。まだ年端のいかない少女が二人きりで生活をしていることに、周囲は好奇の視線を送らずにはいられず、橋田家の秘密がマスコミにとりあげられれば、格好の噂の種になった。記事に少女A少女Bなどと書いたって、可八が殺人犯の娘だということなど、すぐにばれてしまう。
（何もかもあの男のせいだ。父親・・・？可八をひきとってからまともに家に居ついたことなんかなかったくせに！）
愛姫は明羅の置いていった記事を見る気にもなれず、ただ思うままにピアノに指をすべらせた。母の形見のピアノ。優しくて繊細な母が自殺したのは、父と可八のせいなのだ。

可八は愛姫より六つ若い。高校を卒業すると、父の紹介で小さな会計事務所に就職した。つまり、会社の連中は可八が殺人犯の娘であることを知っていることになる。愛姫がそう抗議すると、「どうせいつか知られるのだから、その後いろいろあるより、はじめから知られている所の方がいい」と父は言い切った。会社で何があったのか、いじめられたりしてないか、可八は一切口にしない。聞いても、適当な相槌を打つだけで本当のところは何もわからない。
可八は愛姫に遠慮している。始終顔色を見ている。それは、愛姫のせいだ。
殺人犯の娘と同居することに極度のストレスを感じた上、マスコミの好奇の目にさらされた母はノイローゼになり、ある日自分の首を絞めて死んでいた。医者に注意され、ひも状のものや刃物は厳重に閉まっていたが、母はお気に入りだった赤いスカーフを巻きつけ

て死んでいた。
父はマスコミに注目され始めてからその目を避けるためだと言って、家に帰らず、都心のマンションに住み着くようになっていた。父は、精神を病んだ母を疎い、殺人犯の娘を疎い、その狭間でぐれだした娘を疎んだ。挙句には秘書の女性と同棲まで始めた。ひとりで悩み苦しんだ母を、父は捨てたのだ。
愛姫は、父を憎んだ。
愛姫は、「母の自殺はあんたのせいだ」と、可八をずっと罵り続けた。
母が死んでも父は家に戻らず、愛姫は可八と二人きりの生活を余儀なくされた。
（私の二十年も、可八の二十年も、あの男にはわかるわけがない。）
マンションから見下ろす景色の中には、家の明かりと街灯だけがひっそりと揺れている。広い庭で、赤レンガの瀟洒な邸宅で花の咲く木々に囲まれていた生活は、遠い昔のことだ。そして、もう二度と戻らない。
可八を連れて父の元から出たこの十年間は必死で、瞬く間に過ぎていった。俗に言う青春など謳歌する間はなかった。
可八の影を感じながら、このまま一生を終えるしかないのだろうか。
そんなことを夜毎考えながら、愛姫は瞳を閉じる。
決して拭いきることのできない、涙を溜めたまま。

第2話

愛姫の勤める法律事務所は新橋の雑居ビル内にある。愛姫は弁護士だ。父をあれほどに嫌いながら、結局同じような道を辿っている。違うのは、愛姫はエリートではないということだ。大学を一浪し、司法試験は5回目でやっと合格した。その間、愛姫は生活のためにアルバイトし、可八は家の中のことを仕切った。学業と、両立しながら。

望月明羅の名刺の輪郭を指先でなぞりながら、愛姫はどうしたものかと考え込んでいた。

記者が来るたびに過去を辿る。そして、それを公表することにどんな価値があるのかと悩む。分別がつき、大人に対して自己主張できる様になってからは、取材をすべて断っている。　父の差し向けた記者など、また父を褒め称えるのではと、疑わずにはいられない。本来ならすぐにでも断っているところだが、愛姫の判断を鈍らせているのは明羅自身のことが気になっているからだ。これが縁でどうにかなるかも・・・そう考えたところで、愛姫は自嘲した。可能性のほとんどない、馬鹿げた幻想だ。いい年をして、まだ夢物語から抜け出せない。

愛姫はその夜、明羅に会うことにした。やはり、取材は断ろうと思う。こういう嫌なことは、早く済ませたほうが良い。

明羅の新聞社は有楽町にあり、二人は新橋駅前の喫茶店で待ち合わせをした。レンガの壁、オークの深い色合いのテーブルにのせられた銀の食器が高級感を醸し出している。出されたコーヒーに口をつける間もなく、愛姫は話をきりだした。

「記事は、拝見しました。良い視点で、中立な立場を守っていらっしゃることがわかりました。・・・ですが、取材はお受けできません。」

記事の入った袋を受け取り、明羅は表情を曇らせた。

「私生活に土足で踏み入るようなことはしません。」
「そうかもしれません。でも、」
「必ず、原稿はお見せしますし、それと違うものを出したりはしません。正式な契約書も作ります。」
愛姫はゆっくりとうなずいた。
「それも、わかっています。一応調べておりますから。ですが、私も可八も事件とは無関係のところで散々な目に逢いました。それは、父の身勝手さと、マスコミの扇動的な報道によるものです。怖いのです。もう、二度とあんな目に遭いたくないんです。」
明羅は、伏せ目がちに視線を宙に浮かせた。
「よほどの思いを、されたのですね。」
「私たちの二十年は、今までの記事のような美しいものでもなければ、自虐的なものでもありません。本当の真実は、言葉で表現できないんです。言葉にすれば、別のできごとになってしまう。」
「私が世間に伝えたいのは、事実の裏にある素の感情です。悲劇的に脚色するつもりもありません。橋田さんと藤木さんが歩んできた軌跡を、そのまま伝えたいのです。興味本位で探るようなことはしません。マスコミに翻弄されたという過去自体、警鐘として、ありのまま伝えたいと考えています。それに、取材させていただくからには、それなりの覚悟を持っています。」
「覚悟？」
「はい。」
愛姫は初めて明羅の目を正視した。切れ長の黒い瞳は、あまりにも誠実そうで、負けそうになる。思わず、横を向いてしまった。
「いい年をして、と笑わないで下さい。人を見る目を養っても、わからないんです。信じてもいい決定的なラインがわからないんです。」
「それは、少なくともあなただけではないと思いますよ。私だって、わからない。」
愛姫の直感は、相手の容姿に左右される。それを弱点と知っている

から、判断しかねている。
「橋田さん、もしお許しいただけるなら、藤木さんに会わせていただけないでしょうか。」
「・・・可八に？」
「その上で、お二人の目で判断していただけませんか。」
愛姫は躊躇した。可八は世間知らずな上、記者には拒否反応さえ示す。人馴れしていない分、口下手でもある。そんな可八を記者と会わせるのは不安だ。しかし、そんな可八だからこそ判断基準になるとも考えられる。
「可八の方が私より警戒心が強いと思います。どうか、くれぐれもご配慮ください。」
「もちろんです。藤木さんが不審を抱くようなら、私は潔く身を引きます。」
よほど自信があるのか。明羅は女性から邪険にされたことなどないだろうから、それが自信に繋がっているのかもしれない。
（多分、可八も・・・・。）
愛姫は、可八がたやすく墜ちるとすでに確信していた。
おそらく、自分と同じように。

明羅の取材は、連載の間六ヵ月も続く。想像以上に丁寧な取材をするようだ。しかし、それは想像以上に過去を掘り下げられるということに比例する。たとえ明羅がどんなに気を配って質問をしたとしても、引き出すものは同じだ。
「明日、お墓参りに？」
ある晩、愛姫は可八の言葉を聞き返さないではいられなかった。
明羅が、可八の両親の墓参りに行くというのだ。
「それも、記事の材料になるの？」
「そのようです。私の母は父に殺された。その二人が結局同じお墓に眠っていることに興味を持ったようです。」
可八の父は獄中で自殺した。可八の母が浮気をして借金まで作っ

たことを許せず、殺意を抱いたと聞いている。事件を担当した検事が愛姫の父だった。正義感の強い父は、両親を失い親戚からも見放された可八を不憫に思って引き取ったと伝えられている。
「かまわないでしょうか。」
「えっ？」
「望月さんをお墓へ連れて行っても。」
愛姫は、可八の洗った皿をナプキンで拭きながら何気ない顔つきで頷いた。
「別に、私に聞く必要はないわ。可八はもう大人だし、自分の判断で決めればいいでしょう。」
「でも、望月さんが愛姫さんに聞いてからと。」
愛姫は思わず可八を睨みつけた。
「なぜ、私に？私が可八の行動を制限しているみたいじゃない？」
思いがけない愛姫の強い口調に、可八は口を噤んだ。そんな可八に、愛姫は腹立たしさを覚え、ナプキンを置いてキッチンを離れた。
望月の配慮が、まるで恋人をデートに誘うのに母親の許しを得てから、というニュアンスに聞こえたからだ。
（私は、可八の保護者じゃない。）
だが、無意識のうちにでも可八の行動を規制し、監視していたのかもしれない。望月にも、そうとられていても不思議ではない。
しかし。
愛姫は、なぜこんな居た堪れない気持ちになっているか、わかっていた。可八に嫉妬している。自分より明羅に近い位置にいこうとしている可八に、嫉妬している。自分でもばかばかしいと感じながら、心はもう、明羅のほうへ動き出している。
（いいえ、まだそんなんじゃない。第一、望月さんだって取材対象を恋愛の候補としてなんて見ていないだろうし。）
そんな言い訳をする自分ほど情けないものはない。
初めから惹かれてた。
だから、取材を断れなかった。

もし可八が拒んでも、何らかの形で明羅との接触を試みただろう。それがわかっているから、腹立たしい。
次の日、可八を迎えに来た明羅に、愛姫は言った。
「可八への取材に、私の許可は必要ありませんから。可八は大人です。干渉するつもりはありません。」
すると、明羅はゆっくりと頷いた。
「そう、取られましたか。私としては、橋田さんが心配なさると思ったので、一応お知らせすべきだと。」
「心配はします。でも、私は可八の保護者ではありません。」
「確かに。でも、藤木さんは橋田さんを本当に信頼していて、依存していますね。」
「依存？いいえ、可八は自立していますわ。」
「悪い意味ではありません。藤木さんにとって頼れるのは橋田さんしかいないのだとわかったんです。心から、慕っていますよ。」
愛姫は苦笑した。
「望月さん。可八は多分私に不利なことはお話しないでしょうが、それは私が恐ろしいからです。・・・いずれ、お話します。可八の話だけを記事にしたら、それこそ父も私も賛美すべき存在になってしまいますから。」
明羅はその射るような鋭い目で愛姫を一瞥し、支度を終えた可八と墓参りに出かけていった。
愛姫は、明羅にはすべてを話さねばならないのだろうと思っていた。可八が話す限り、そのすべての裏を明るみにせねばならない。それが可八と取材を受けた自分の責務だからだ。嫌なら可八への取材を阻止すればよかっただけの話だ。そして、自分の都合の良いように話をすればいい。だが、それをしなかった。
もしかしたら、このけじめのない可八との関係を第三者に判断してもらいたかったのかもしれない。何かしらの句読点を打ちたかったのかもしれない。

新緑がまぶしい日比谷公園は、噴水の水飛沫が涼しげで、格好のオアシスだ。この時期の昼ともなれば、多くの人たちであふれる。
愛姫はこのコンクリートジャングルに囲まれた緑が好きで、少しの時間でもあれば、ランチにやってくる。一人で冷たいアイスティーを飲みながらぼんやりと景色を眺めるのが、一番の癒しなのだ。
「やはり、ここでしたか。」
突然の親しげな言葉に、愛姫は驚いて目を見開いた。気づかぬ間に、明羅が立っている。白いシャツの袖をまくり紺の上着を肩に背負った長身の男は、周りのＯＬたちの視線を集めていた。途端に高鳴る鼓動が、愛姫の唇を振るわせる。
「藤木さんに聞いたんです。ここがお気に入りだと。」
「そうですか・・。」
「お寛ぎのところ申し訳ないとは思ったのですが、少しでもお話を進めたいと思ったので。お時間、いただけますか。」
どうして、駄目だと言えるだろう。クライアントとの面談がない限り、頷く以外ありえない。やはり顔のいい男は得だ。そして、女も。
「先日は、可八がお世話になりました。お墓参り、いかがでしたか。」
明羅は、愛姫のとなりのベンチに腰掛けた。
「藤木さんの中ではご両親の記憶がほとんどないようですね。」
「ええ。六歳のころのことでしたし、事件の記憶は特に閉じ込めてしまっているのではないでしょうか。父の話では、可八の父親が母親を殺す現場を見ていたようですから。」
明羅は身を乗り出した。
「それは、本当ですか。」
「ええ。でも、それ自体可八の記憶からは抹消されてるんです。ただ、時々夢でうなされているときもあって・・・。それは、事件の記憶が時々浮かび上がってくるからだと思っています。」
「それは・・・初耳です。」

「可八に直接言ったことはないんです。」
「では、記事にはしません。・・・そうですか、藤木さんの知らない事実は二十年経っても尚存在するんですね。」
愛姫は風に揺れる木の葉を眺めた。
「言えないことは沢山あります。事件後の可八は暫らく精神を患ったこともありますが、本人は何も覚えてないんです。」
「それは、あなただけが知っていることですか。」
愛姫は少し口を噤み、そして開いた、
「そうです。父にも言えなくて。」
「橋田さんだって、まだ子供だったでしょう？」
「だから、言えなかったんです。・・・怖くて。」
愛姫はスッと立ち上がり、明羅を肩越しに見下ろした。その瞳が悲しげで、明羅は言葉を失った。
「望月さん。あなたは、取材をするからには覚悟をしているとおっしゃいましたね。でも、これ以上のお話をしたら、私たちの人生に深く立ち入ることになりますよ。どんなに取材と割り切っていても。」
「わかっています。」
続けて立ち上がった明羅を、愛姫はまぶしく見上げた。つらい過去を、今まで自分の中だけに押し込めてきた。それをここで吐き出せば、絶対に相手にすがりたくなる。つらさを理解し、受け止めてほしいと願ってしまう。だが相手は記者で、そう出来る相手ではない。
「いいえ。望月さんは今までほとんど可八の話しか聞いてらっしゃらないからそうおっしゃれるんです。」
「見くびらないで下さい。これでも色々なものを見、色々なことを聞いてきました。どんなことでも、冷静に受け止める力は培われてきていると思っています。」
　愛姫は、これ以上明羅に心が動くことが怖かった。もう、ほんの少しのきっかけで、ものすごいスピードで走り出していくことは間違いないと思われるからだ。だが、そんな理由で取材をセーブする

のもどうかと思う。だが、やはりこれ以上明羅と関わるのが怖い。
母の自殺も、父の浮気も、すべて一人で抱え込んできた。
あまりにも多くの秘密を抱えすぎた。特定の友人もいなく、恋人もいたことがない。
十二歳のあの日から、可八とだけの人生を歩んできたのではないだろうか。他人の介入を許せば、秘密が明るみにでる。それを、恐れて。
昼休みが終わりに近づき、人気が減ってきた。
愛姫は、自分にこそ覚悟が必要だと思った。
自分の抱え込んできたものを誰かに半分背負ってもらおうなどという甘えを捨てきってしまうこと。いつか、誰かに打ち明けて楽になりたいと思っていた自分を捨てること。
今こそ、それを実行すべきときなのかもしれない。
明羅という、とてつもない誘惑を実験台にして。
「一週間後、時間がとれます。そのときまた、続きをお話します。」
「わかりました。でも、話すラインは橋田さんの判断で決めてください。無理強いはしません。」
愛姫は少し微笑んだ。
「記者は、それでも聞き出すのがお仕事だと思っていましたけど。」
明羅も、穏やかに瞳でこたえた。
「そうですね。でも、こちらもラインはわきまえていますから。」
陽に照らされた頬が赤く染まっているのは、明羅の肌が白人に近い証拠だ。あまり日焼けせず終わるのだろう。そんな何気ない発見が、今の愛姫には嬉しかった。そして、同時に寂しかった。
明羅は自分のものにはならない。
そんな予感が、なぜか胸をよぎった。

第3話

可八の父親は真面目な男だった。可八の母親はそんな男に甘えて、遊び好きで浮気性だった。そんな妻は夫に刺し殺された。可八の父には、実刑で懲役七年という判決が下されたが、次の日には獄中で首を吊って自殺してしまった。人一人殺めたことが、真面目な男には耐えられなかったらしい。だから裁きを受けた後、自分で自分を処罰したと、遺書には書いてあった。残された一人娘の可八を兄夫婦に託すとも遺書には書いてあったが、ことごとく断られた。すべての親戚が事件以後、血縁関係を知られまいと必死だったからだ。母親方は殺人犯の娘など何をするかわからないと、拒否した。愛姫の父がそれを見かねたというのも、あながち嘘ではないかもしれない。だが、それをひけらかしたことが、愛姫には許せないのだ。

愛姫の母親は潔癖で、神経質だった。愛姫には優しい母だったが、時折ヒステリックに叫ぶときがあり、そのときは手がつけられなかった。

殺人犯の娘。なぜ家が引き取らねばならないのかと、母と父はしばらく言い合いを続けていた。それに嫌気がさした父は多忙な折に利用していた都心のマンションに入り浸るようになり、家へは戻ってこなくなった。愛姫もできる限り可八との関わりを避けていた。それでも世話をせねばならない母は孤立した状態になり、段々陰気になり、やがてノイローゼと診断された。

助けを求めても父は多忙で連絡が取れず、病気の母と六歳の幼女を抱えて、中学生になったばかりの愛姫は途方に暮れた。

やがて母は、愛姫が買い物に行った留守にスカーフで首をくくって自殺。愛姫が見つけたとき、可八は冷たくなりつつある母の肩を無言でゆすっていた。異常を感じ、起きて欲しいと懸命に願っているようだった。可八は、人が死ぬ現場を、またしても目の当たりにしてしまったのだ。

父はそれでも戻らず、母が亡くなったことをいいことに、ますます若い秘書に現を抜かすようになっていった。
赤の他人との生活を余儀なくされることを愛姫が受け入れられるとでも思っていたのだろうか。家庭の何もかもを一人で背負えると思ったのだろうか。
「可八との接触をできるだけ避けていた結果・・・可八は、自閉症になってしまったんです。」
明羅の新聞社がある高層ビルの一角は、マジックミラーが施された応接室になっている。極秘の取材もできるように、他者との動線が一切混じることなく、また、防音もしっかりしている。愛姫はその日の午後、少しばかりの有給休暇をとって明羅に会った。
「それで、どうしました。」
明羅のメモ帳に走る速記文字は愛姫にはまったくわからない。同時に音声も録られているが、意識しながらも、ただ、自分は喋るだけだ。
「医者にかかって、診断を聞いたとき私は取り返しのつかないことをしたのではないかと恐怖で目の前が真っ暗になりました。このまま可八を入院させて、放っておこうと本気で思いました。母のことも記憶に新しいのに、もう、自分こそどうにかなってしまいたい、と。」
額を押さえて唇を噛む愛姫に、明羅はいったんペンを置いた。
「でも、あなたはそれを乗り越えたわけですよね。」
「ええ。・・・母の病気のときでさえ拒否をした父には、もう頼れないと思って、私は自分で何とかするしかないと覚悟しました。」
「藤木さんは、小学1年生になっていましたね。学校はどうしましたか。」
「学校では殺人犯の娘としていじめられたらしくて。生徒だけでなく、先生からも。だから、家に居させるしかありません。頼れる大人もいないし、相談する相手もいない。そのときからです。可八を守るのは自分しかいないという・・・使命感のようなものが芽生え

たのは。」
愛姫は、そこで慌てて付け加えた。
「でも、それは恐怖から逃れたいという理由から生まれただけの気持ちなんです。やむをえなくて、自分の犯した罪を少しでも何とかしたいと思って、義務のような、いえ、義務以下というか・・・。」
明羅は少し困惑した。
「そんなに、ご自分を卑下なさらなくても。変な美化とかはしませんから。」
愛姫は疲れた表情で首を振った。
「いいえ、卑下ではなく、事実です。私、自分を守るためならどんなことでもする卑怯な性格なんです。今思えば、それこそ父譲りなのかもしれません。」
「本当の卑怯者なら、藤木さんが完治することはなかったと思いますよ。」
「ただ、必死でした。とりあえず私も学校を休んで可八との時間を作りました。絶えず話しかけて、至れり尽くせり世話をして、彼女の信頼を得ることだけを考えました。初めて可八が私の声に反応したとき、どんなに嬉しかったか・・・！」
愛姫の目に、思わず涙があふれた。しかし、それを明羅に感づかれまいと唇の上下を必死にひきしめた。明羅は、涙を見せていい相手ではない。だが、明羅はそれを察知し、そして涙を見られたくないという愛姫の気持ちも汲み取り、
「一休みしましょう。コーヒーでも入れます。」と言い、部屋を出て行った。
　愛姫は、自分でも思った以上のことを話してしまっていると冷静に考えた。明羅の聞き方が優しいから、思わず話が次から次へとでてしまう。明羅の同情を欲している自分を押し殺そうと決意した。それを試練としようとした。
　だが、それには、どんな意味があるのだろう。
　他人に甘えていると痛い目を見ると学んだから。

一人でも生きていける強さが必要だったから。
そして、明羅は記者。互いの関係はあくまでビジネスだから。
「お待たせしました。」
紙コップに入ったブラックコーヒーに、明羅は愛姫の分にだけ砂糖とミルクをつけた。濃いコーヒーが苦手な愛姫は両方とも入れて、口紅の色だけ残った唇をつけて少しすすった。この後どんなに胃が焼けようと、すべて飲み干す。相手が明羅だからでなく、それが礼儀だと思うからだ。
窓からは、周囲のオフィスの窓が見える。カーテンウォールのミラーガラスのため中の様子は伺えないが、あの向こうで無数の人間が働いているのだと思うと、いつまでも見ていたい気持ちになる。
「反対側の部屋の並びなら、日比谷公園の方が見えるんですけどね。」
明羅の言葉に愛姫は軽く頷いた。
「でも、私はオフィスの窓を見るのって好きです。特に窓に明かりが灯った夜景は絶品ですわ。高いところから無数に散らばる光には興味がないんです。」
「めずらしいですね。」
「変わり者なんです。言われなれています。」
カップの温かさを手のひらで感じながら、愛姫はさらに窓の外を眺めた。
以前可八を病院に連れて行って、診察を待つ間、こんな風な景色が見えていた気がする。その景色が見られるから、病院通いを苦に感じなかったのかもしれない。
そんなことを、ふと思い出した。
今回の取材に応じたことは、この二十年を振り返り、ひとつの区切りをつけるためだ。取材が終わったとき、可八との曖昧な関係に何かしらの決着をつけられたらいい・・・、愛姫は、そう感じていた。

第４話

蝉の鳴く声は、何故こうも暑さを助長させるのだろうか。公園がいくら好きでも、クーラーの効きすぎたオフィスから出る気にはなれない。

だが、その日は法廷があったため、久々に木陰に座ることにした。日本庭園風の池を眺められる小道には木々の葉が心地よい影を落としてくれている。自動販売機で買ったばかりの炭酸飲料を飲み干し、愛姫は一息ついた。

スラックスをはいた足なら、気兼ねなく組める。

と、不意に見上げた先に、思いがけない姿を見つけ、愛姫はドキリとした。

池の奥の淵は土手になり、その上は歩道である。木々が連なっているため全体を鮮明に見ることはできないが、そこには確かに明羅がいた。そして髪の長い、美しい女性と何やら言い争っているように見えた。二人はいったん立ち止まったが、やがて歩き出し、愛姫の視界から消えた。

愛姫は思わず立ち上がり、二人の消えた方向へと足早に向かっていた。気になった。影からでも、その行方を見届けたいと思った。まず公園から出て、右へ曲がった。鉢合わせはさすがにまずいと思い、注意深く歩道の端を歩いた。

だが、歩けど歩けど二人の姿を捉えることはできなかった。

この街は行く先をいくつも持っている。道も四方に伸びているし、見つけることは不可能に近かったのかもしれない。第一、見かけたのが明羅であったという確証はない。

しかし、愛姫は一つの決定的事実に気づいた。それは、明羅が先ほどの様な美しい女性に囲まれて仕事をしているのだということだ。人違いであったとしても、それは確かなことだろう。頭がいい上に美しいという恵まれた女性は数え切れないほどいる。女性は化粧で

ある程度磨くことができるから、美人はいくらでもいる。美しく整えられた爪でワープロを打つ有能な同僚に囲まれ、明羅は、選り取り見取りなのだろう。そんな明羅が、自分とどうにかなる可能性など無に等しいのだ。なのに、必要以上に自意識過剰になっていた。明羅を意識した。ばかだった。ありえもしないと心の奥底で繰り返しながら、結局夢を見ていた。

夢を見まいと、あんなにも頑なになっていたのだ。勝手に甘えて、期待を寄せて、裏切られたような気分にならないために、本能が自己防衛していたのだ。

そして、今までもそうして生きてきた。

四つ角を結ぶスクランブル交差点の真ん中で、立ち止まる度胸はない。ただ、人の流れに流されるままだ。

だが、何も塗っていない、やすりで磨いただけの爪に誇りを持っている。不安なのは、その誇りを誰も認めてくれずに終わるのではないかということだ。ほとんどの男は、きれいに整えた色つきの爪に価値を見出すのだろう。その中で、自分は誰の目に留められることなく終わるのではないか。

家では、やはり色つきの爪に興味を示さない女が待っている。自分の価値が自然と乗り移ってしまったのか。

「お風呂は沸いている？」

「はい。すぐお入りになりますか。」

「そうね。」

可八は、愛姫が風呂から出たらすぐ食事ができるよう、食器を並べる。愛姫は、可八のためにそんなことをしたことはない。少なくとも可八が家事を仕切れるようになってからは、ない。

「可八は、望月さんに何を話しているの。」

愛姫の問いに、可八は箸を置いて答えた。

「だいたいは、愛姫さんとの生活のことです。」

「私との・・・？」

「あ、でも、愛姫さんが困るようなことは話していませんから。」

「別に、話されて困るようなことはないけど。」
そうだろうか。自分から話すのは良くても、可八の口から話されたくないことはいくらでもあるのではないか。だが、可八にそういう気の遣われ方をされるのは、何だか癪に障る。
愛姫のきつい口調に、可八は口を噤んでしまった。こういうことの繰り返しが可八を無意識に威圧していることになるのだろうか。
明羅のいう「依存」というよりも、「自立を許さない」ような結果をうみだしているのではないだろうか。
愛姫より六歳も若い可八は、うつむいた頬にも艶がある。たとえ可八が美人でなくても、垢抜けたメイクの仕方を知らなくとも、その若さだけで愛姫よりも十二分に魅力を備えているのではないだろうか。そして、明羅の目を引くに十分な理由になるのではないか。愛姫がそれに勝るには、年齢を重ねたなりの魅力を持つ努力をするしかない。若い頃のような無防備では通用しない。
次の日。
夜九時に帰宅した愛姫は、いくらチャイムを押しても可八がでてこないことに驚いた。何かあったのではないかと怖くなる。
久々に鍵を使って中に入ると、廊下は真っ暗だった。こんなことは今までなかった。会社の同僚と食事をすることもなく、いつも愛姫より先に帰宅していた可八。
リビングに入り、留守電のランプが点滅していたため、すぐ再生した。
『可八です。望月さんと取材がてら夕食をご馳走になることになりました。愛姫さんの夕食は冷蔵庫にあります。』
愛姫は、呆然とその場に立ち尽くした。
可八が明羅と食事をする。
取材がつこうとつくまいと、その事実だけが問題だ。愛姫は今まで、どんなに取材が食事の時間帯にかかろうと、明羅と食事をするようなことはなかった。なのに、可八は違う。
胸の奥から出そうになる奇声をこらえようと、口元を手で押さえ

こんだ。
ストレートな嫉妬。
それ以外の何ものでもない。
得体のない何かを無性に壊したい。だが、それは形のないもので、どうにもならない。
いつの間に、こんなに明羅に思いをかけていたのだろう。胸の奥を直に刃で刺されたように、心が打ち砕かれている。
この先、可八に心から優しい言葉をかけることができるだろうか。この世で頼れるのは互いに二人きりだと悟ったあの日から、やっと迎えた穏やかな日々。しかし、いつも立場は対等ではなかった。愛姫は可八を守り、擁護する姉以上に「主人」であった。
（私は、可八に真の自由を与えたことなどなかったのかもしれない。）
明羅が可八とどうにかなったら。
見下げていた相手に負けることを正気で耐えられそうにはない。
（でも、・・・まだ、何もはっきりしたわけじゃない。）
平静を保とうとしたそんな言い訳がむなしい。
明羅が自分のものにならないと予感したのは、可八とのことに繋がっていたのか。
冷蔵庫など開ける気にはなれなかった。
夕食を皿ごと投げ捨てたい気分になる。
当分、可八とは顔を合わせたくなかった。何をしてしまうかわからないからだ。
愛姫は、ほんの少し華やいだ日常が再びもとに戻ってしまうことを、打ちひしがれた思いで覚悟していた。

第5話

ここ何日か、雨の日ばかりが続いている。また、その頃愛姫には民事の裁判が重なり、午前様に近い帰宅が続いた。それでも待っている可八に、愛姫は強い口調で言った。

「お願いだから寝てて頂戴。待ってられると思うと安心して残業もできないのよ。帰ったらベッドに直行したいの。可八に気を遣う余裕もないくらい疲れてるんだから。」

明羅と可八が夕食をともにした一件以来、可八に冷たい。わかっているが、冷静に心を立て直す余裕は、今まったくない。思ったことをそのまま口に出す以上のエネルギーは備えていない。

黙って自室に引き下がる可八を見ても、同情や優しさは生まれない。そんな鬼のような自分が本能的に悲しい。本心から可八が憎いとか、嫌いだというのではない。ただ、積もった感情を遠慮なくぶつけてしまう。

ドラマで見た、疲れて帰宅した夫に、妻が日常の愚痴をこぼしても取り合ってもらえないシーンを思い出す。そうだ。外で気を張ってきたのに、家で妻のご機嫌取りまでしたくはない。優しくできるのは、心のゆとりがあってこそだ。今の愛姫に、それはまったくない。

やがて、愛姫には可八の生活がまったくつかめなくなった。朝食と夕食のコミュニケーションが完全に途絶えたからだ。週末、顔を合わせてもほとんど会話することもなくなった。互いに自室にこもり、共有する時間がなくなった。

夜遅く、朝早い多忙な生活。愛姫の心はさらに刺々しくなっていく。話しかけに答えることさえ鬱陶しい。

その日、朝六時に家を出ようとした愛姫に、可八は玄関まで見送りに出た。

「今日も、遅くなりそうですか。」

「わからないわ。」
可八の顔を見ることもなく、そう答える。
「今晩、望月さんがおじ様と家にいらっしゃるそうです。」
愛姫は靴を履き終わり、上体を起こした。
「取材？」
「はい。私とおじ様の関係をお知りになりたいと。」
明羅は、愛姫が父を嫌っていることを知っているから一緒の取材などしないのか。だとしても、またの可八との扱いの違いに、切ない憤慨を感じた。明羅が愛姫と可八の間に違いを持てば持つほど、その違いが可八を優遇している気がするから、辛くなる。
「それで？私にどうしろと。」
「いえ、・・一応お知らせしておこうと思いまして。」
自分にも同席しろということではないのだ。明羅も、それを望んでいるわけではないのだ。
愛姫は僅かに震えた唇を開いた。
「安心して。二人がいる間には帰ってこないから。二人がここに泊まらない限り、会ったりはしないわよ。」
言うや否や、愛姫は扉を閉めた。
冷たい感情。
冷酷で、残忍な感情。
一人の男のことで、こんなにも心が揺れる。
明羅の真意など知る由もないのに。
可八の思いなど知る由もないのに。
一人で勝手によがり、のた打ち回っている。
こんなに好きになるつもりはなかった。
こんな気持ちにまでなるとは思わなかった。
ブレーキをかけていたつもりだった。自分に、美しい爪の価値が存在しないと知ったときから。
なのに。

明羅の取材による記事の第一回が掲載された週刊誌は、愛姫と可八の元に別々で郵送されてきた。
話の始まりは、二十年前の事件の概要とその直後のマスコミの様子のことだった。当時の可八の記憶はほとんどない。愛姫の記憶と、おそらく父の語ったことから構成されている。客観的に、しかし、暗にマスコミを非難して。それは愛姫の感情だ。
季節は夏の盛り。
仕事はひと段落したが、愛姫はまだ、可八に優しく振舞うことはできずにいた。
少し曇りがちな昼下がり。弁護士会館からの帰り道、愛姫は日比谷公園に久しぶりに寄ってみた。台風でも来るのだろうか。風が異様に木々をざわめかせている。
「やっと、お会いできましたね。」
明羅の出現で、愛姫の頬は思わず緩んだ。今日は最高にラッキーな日だ。星占いも、干支占いも、何もかもが花盛りではなかったのだろうか。
白いシャツからやや色づいたひきしまった腕がでている。あんなに搾り出すような切ない日々を、今はとても思い出せない。
「機会があれば公園を通るようにはしていたんです。」
「取材でしたら、お電話くだされればよろしいのですよ。」
「ここのところ、相当お忙しいようだと藤木さんから聞いていたので。」
「ええ、まあ。でも、時折なら大丈夫です。」
「ここへお見えになったということは、今は少しお時間があるということですか。」
「そうですね。第一回の記事、読みましたよ。」
「いかがでしたか。」
「実は、掲載前の原稿、私は軽くしか目を通せなくて。でも、心配するようなことはありませんでしたわ。」
「それは良かった。これからもお願いします。」

「私の父とお会いになりましたね。父は、何か言っていましたか。」
「・・・橋田検事が家をお出になった経緯をいろいろと。」
「そうですか。でも、例え正当な理由があったとしても、私や可八の理不尽な生活は実際に起こってしまったわけですから。」
「でも当時、藤木さんは時々橋田検事にお会いしていたようですよ。」
「え・・・？」
愛姫は驚いて一瞬、言葉を失った。父が、自分の知らないところで可八と会っていたとはどういうことなのだ。そんな話は、今だかつて、可八の口からもでたことがない。
明羅は、愛姫の表情の強張りように慌てて言葉を繋いだ。
「橋田さんが学校へ行っている間、時々様子を見に来ていたと、おっしゃっていました。」
「それは、・・・事実ですか。」
「藤木さんも肯定してましたから。」
「そんな・・・・。」
では、父は可八のことは気にかけていたというのか。愛姫が一人で誰にも頼れず、母を失い、可八を病気にさせ、半狂乱になりかけたあの時、父は可八には手を差し伸べていたというのか。
「それは、いつくらいのことですか。母が死んだあとですか。可八が精神を患ってからですか。」
「藤木さんがご病気になった後の様です。」
「じゃあ、可八が自閉症になったことも知っていたということですか。」
「橋田さんが学校をお休みしたり、遅刻や早退を繰り返していると学校側から連絡が入り、それでわかったようです。」
「私が家にいるときには一度も来なかったんですよ。」
「橋田さんがいない時に、藤木さんが一人でいるのを心配してきていたようですから。」
愛姫は首を横に振った。

「そんなの・・・嘘です。父の美談作りの一部です。一度や二度、偶々訪れたのをいいように利用しているだけですわ。」
「それは、違うと思います。現に、藤木さんは橋田検事を慕っていますね。」
「不思議には思っていました。でも・・・信じられません。」
「藤木さんの身の上を、この上なく不憫に思っていらっしゃるようでした。」
愛姫は再び否定した。
「父は偽善者です。ただ、自分の行いを取り繕う術を人並み以上に備えているだけなんです。現実を見ろとおっしゃらないで！前の記者が散々言いました。でも、違うんです。父が昔の記事にあるような人徳者なら、母は自殺なんかしなかったし、可八だって自閉症になるなんてことありえないんです。可八のことは、私にも非があります。でも、でも、あの時の私は、どうにもできなかった。」
「橋田検事も、その責任は感じてらっしゃるようでした。」
「それは上辺だけです。望月さん、父は他にも私たちに沢山の傷跡を残しました。それを・・・お忘れにならないで下さい。私の独りよがりではないと思います。可八の二十年が私の二十年と違うように、父の二十年も違います。望月さんは三者三様の話を聞いていらっしゃるから、その矛盾を感じているとは思います。」
「私はあくまで第三者として、冷静な判断で記事を書きます。そのときは、橋田さんが認められない事実もでてくるかもしれません。」
今にも降り出しそうな灰色の濃い雲が地上に近づいてきた。高層ビルの間を、千切れ雲が走り出している。盛夏の緑が、一層ざわめきはじめ、愛姫は立ち上がった。
「わかりました。望月さんの記事を信じます。私はこの二十年を冷静に振り返るために取材をお受けしました。・・・見ます。認められないような事実でも。その上で私がどう感じようと、それは私の問題ですから、自分で整理をつけます。」
明羅の顔が、少し悲痛に見えた。

愛姫の築き上げてきた歴史を、かき乱すことになったと感じているのだろうか。
突然ポツリと、冷たい液体の感触が人肌を刺激した。石が水に濡れた、独特の匂いが鼻をつく。
二人は、思わずいっせいに空を見上げた。細かな雨が、放射状に降り注いでくる。周囲の人々が、あたふたと身支度を整えはじめた。
「お手間とらせました。また、ご連絡いたします。」
「わかりました。お願いします。」
互いのオフィスに向かって、互いの踵を返した。
足早にアスファルトを蹴りながら、愛姫は眉をひそめていた。
もし、こんなとき。
不意の雨に遭ったとき。可八が相手なら、明羅はお茶に誘うのだろうか。
今、二人の話はひと段落ついてはいた。
しかし。
信号で立ち止まることを強要され、冷たい雨が愛姫の額から滑り落ち始めていた。目の中に雫が入り、僅かな刺激痛を覚える。
明羅の告白は、確かに衝撃的だった。しかし、それに対し、もっと他の言いようがあったのではないだろうか。あんなに感情をむき出しにすることはなかったのではないか。
後悔する。
自分は、明羅に好かれるようなことを何一つできていない。優しさも、賢さも示せてはいない。
信号が青に変わった。濡れたアスファルトに滑り出したパンプスから、雨の雫が飛び散る。唇が開き、息が切れるように体が走り出す。
頭の中からかき消してしまいたい。
明羅への思いを、一掃してしまいたい。そうしたら、こんな気持ちにはならずにすんだ。

恋をしたいと思っていた。
長いこと動かなかった心を、かき乱すほどの恋を。
しかし、結果はいつも辛辣だ。
雨に打たれて走り抜ける愛姫を、傘の波が冷ややかに見送っていた。

第6話

愛姫の父は、名検事として名を馳せている。
その父に歯向かうように弁護士になった。父の頭脳を譲り受けなかったのか、何度も司法試験に挑戦した。しかも大学は一浪している。現役合格した中堅大学への入学を、父が許可しなかったからだ。強制的に予備校へやられ、二年目に一流大へ入学した。
港区のマンションは、霞ヶ関からタクシーでもそうかからない。昔、仕事で帰宅できなかったときの常宿を、父はそのまま今の住まいにしている。身の回りの世話をするという名目の秘書の女を愛姫は追い返し、一人リビングで父の帰りを待った。自分から父に会いに来るなど、十年ぶりくらいだ。
父は午前一時過ぎに帰ってきた。
「お前が会いに来るとはな。」
「うざったい女は帰したわよ。」
「どうせ帰るんだ。かまわん。」
エリートの父には、風格がある。だが、愛姫にとってそんなことはどうでもいいことだ。
「それで？何の用だ。」
愛姫はソファから立ち上がり、父を見上げた。
「どうして今まで黙っていたの。可八の自閉症を知っていたこと。」
父はブランデーのビンを棚から出しながら
「だから何だ。」
「実の娘のことは放っておいて、可八のことは気にかけていたのね。」
「それがどうした。あのまま可八が病気で日陰の生活を送っていてもいいというのか。」
「お母さんの病気も、放っておいたでしょ。」
「奈津子は大人だ。」

「大人なら放っておいてもいいってこと？お母さんが頼れたのはお父さんしかいなかったのに！私だって、そうだった！」
父は琥珀色の液体の入ったグラスに口をつけ、笑った。
「やきもちか。」
愛姫はカッとして地団太踏んだ。
「馬鹿言わないで！誰が！？」
父の言うとおりなのかもしれない。だが、それは認められない。
「可八がどんなに感謝していようと、いい気にならないでよ。私とお母さんは確実に犠牲者なんだから。」
父は何も答えず、背を向けた。
「望月さんが、どう記事にするかはわからないけど、お父さんへの賛美には絶対にさせない。可八の事実がどうであろうと、私の事実は変わらない。それだけ、言いたかったの。」
かばんを持ち、玄関へと向かった。
「愛姫、どうやって帰る気だ。」
「タクシーを拾うわ。」
「お前の家まではけっこうかかるだろう。」
「だから？別にお金に困ってはいないわ。」
「可八はどうだ。結婚資金ぐらい蓄えているのだろうな。」
愛姫は苦笑した。
「可八のことなら心配要らないわ。」
「そうか。可八はどうやらお前より先に嫁に行くようだな。」
「え・・・？」
驚いて振り向いた愛姫に、父は間髪いれずに言い放った。
「知らないのか？あの望月君と、つきあってるらしいじゃないか。」

その夜は、まんじりともできなかった。
可八が、明羅とつきあっている。
信じたくない想像が、現実になってしまった。臓の奥が深々と冷えてゆく。すぐに息が上がり、唇が開く。口中が乾き、喉がひっつ

くようだ。
朝、気だるい体をひきずる様にしてキッチンで冷たいジュースを飲み干した。それでも胸につかえてしまう。
可八に会いたくはない。
家に着いたのは夜中の一時に近かったが、朝六時には家を出た。これ以上遅くなると可八が起きだしてしまう。
重い頭も、辛い現実の前では震える。
間もなく九月になる。
暑く、焼け付くような季節。
肌にまとわりつく重苦しい空気が大嫌いだ。
今は、何もかもが大嫌いだ。

そんな中、事態は思わぬ展開を迎えた。
可八に明羅とのことを確かめることもできずにいた。そこへ、一本の電話が入った。経理の女性から繋いでもらうと、相手はこう名乗った。
「突然お電話して申し訳ありません。私は望月瑞希といいます。週間トピックスの記者の望月明羅の弟です。」
愛姫は、耳を疑った。明羅の弟が何の用だというのだろう。
「実は、取り急ぎお話したいことがございまして、無礼とは承知しながら、お電話させていただきました。」
不審に思う。何かのいたずらではとも思う。見知らぬ他人と関わらねばならない重荷が疲れえた心にのしかかる。
だが無碍に断ることもできず、その日の六時に、瑞希が愛姫の事務所に来ることになった。
仕事の合間に頬杖をつき、何度も考え込んでしまう。明羅の弟が自分に話さなければならないこととは何か。しかも、火急という。
六時少し前に、愛姫は事務所から出た。小さな雑居ビルのため、エレベーターはひとつしかない。狭い廊下並みのエレベーターホールにいれば、絶対に会える。職場の人より前に会いたかったし、で

きれば職場の人に見られたくなかった。余計な詮索をされるのではないかと杞憂するからだ。
瑞希などという人間はもしかしたら現れないのでは、という不安がよぎる前に、昇りのエレベーターが開いた。
そこから出てきた男が二歩目を踏み出す隙間もなく、愛姫が鉢合わせた。
男はダークブラウンのスーツを着ていた。それが瑞希だということは、疑う余地がなかった。兄と同じ目の形。彫が深すぎない頬。明羅よりもやや優しい印象の顔立ちだ。が、瞳に宿る光は鋭く、冷たい。
「橋田愛姫さんですね。はじめまして、望月瑞希です。お忙しいところすみません。」
イントネーションが明羅と同じだ。だが、これからどんな話があるのだろうと思うと緊張が解けない。
二人は新橋方面に歩いていく途中の喫茶店に入った。地下の薄暗い落ち着いた雰囲気の穴場だ。
瑞希は上着を脱ぎ、アイスのアールグレイを注文した。喫茶店でコーヒーでなく紅茶を注文する男性は初めてだ。
愛姫はメニューを見ず、同じものを注文した。何が来ようとかまわない。
瑞希は、名刺を愛姫に渡した。
誰もが知っている超名門の私立学校で教師をしているという。明羅の年齢から考えて、愛姫より年下だろう。
「撫しつけついでにお聞きします。私の兄が、藤木可八さんと婚約したのをご存知ですか。」
「婚約？」
まさかそこまで話が進んでいるとは思わなかった。次の言葉が出ずうろたえていると、瑞希は付け足すように言った。
「まだ正式のものではないようですが。」
愛姫は目の前のグラスの中の氷を凝視した。頭の中が動かない。

考えられない。何も。
目が、瞬きを忘れて固まっている。だが、瑞希の話は続いた。
「実は、私には年明けに結婚する予定があります。勤務する学校の理事長の娘です。しかし兄の婚約者が殺人犯の娘ということが知られれば、おそらく破談になると思うんです。」
だから何だというのか。
「初対面で、失礼なことは重々承知しています。ですが、あなたにしか頼めないのです。どうか、藤木さんに結婚を諦めるよう、説得していただけませんか。」
「え・・・。」
瑞希の細い眉が目に入った。まっすぐにこちらを見て、手を突いている。
何をどう答えればいいのか。
明羅と可八が婚約したなどという衝撃的な告白のあとに、今度はそれを壊せと言われて、何と答えればいいというのだろう。
間を繋ぐように、グラスに手をかけた。氷が溶けてグラスの周りが水滴だらけになっている。アールグレイの香りなど、もはや感じられない。味も、しない。
「兄の手帳を勝手に見て、あなたの勤務先を知りました。以前からあなたのことは聞いてましたし、記事も読んでいます。橋田さんしかいないと思いました。あなたが、藤木さんに最も近いからです。お願いする筋合いなどないでしょう。でも、ほんの少しでも可能性があるのならそれにすがるしかなくて。」
必死なのだろう。言ってることが要領を得ていない。しかし、それだけに気持ちが段々と理解できてくる。
もし自分に姉妹がいて、殺人犯の子と結婚するなどと言ったら、愛姫だって反対するだろう。もっと考えろと、諭すだろう。
「この一週間、兄とは喧嘩しっぱなしです。どんなに言ってもだめなんです。藤木さんに夢中で、僕の言うことなど聞く耳ももたない。」

そんなに。
そんなにまで好きなのか。
自分にはなく、可八にだけあった明羅の誘い。それは伊達ではなかったということか。
愛姫は、瞳を伏せた。
「望月さん。あなたのお気持ちはよくわかります。多分あなたの立場なら、私も同じことをしたでしょう。でも、私は可八に何か言える立場ではありません。昔ならいざ知らず、今は、私たちは自立した他人同士です。」
「他人とはいえないでしょう。血は繋がっていなくとも、肉親以上に家族です。藤木さんと橋田さんが二十年もの間、どうやって生きてきたか聞いています。実は、僕の両親は考古学者でしたが、海外の赴任先で流行病で早くに死にました。僕たちも、兄弟二人きりの生活が長いんです。だからお二人の境遇がわかります。僕たちも、ずっとお互いを支えて生きてきました。兄のいない人生はありえなかったし、もう、自分の一部のような感じさえするほどです。その兄が、僕の言うことにまったく耳を貸さないのは初めてです。恋人が家族に勝るのはわかっています。ただ、その相手が問題なんです。」
瑞希のグラスから、溶けた氷の上水が溢れそうになっている。
「私に・・・殺人犯の娘だから身を引けとは言えません。」
「直接的でなくてもいいんです。あきらめてさえ下されば。」
「私には反対する資格がないと思います。」
愛姫が明羅を思っていることは、反対する理由にはならない。明羅のような性格の男は、例え無理矢理可八と別れても、他の女を好きにはならない。そんな気がする。
やはり明羅には、愛姫の手は届かない。
「本人の責任でないことを、責めるわけにはいきません。」
「藤木さん自身に非が無いことは重々承知しています。問題は、その血です。」

「・・・血？」
「そうです。殺人を犯した人の血が流れているんですよ、彼女の中には。」
「でも、その血がまた殺人を犯すわけではありません。」
「例えば、あなたはどんなに人を憎んだり、恨んだりしたとしても、殺そうという気にはならないでしょう？大半の人はそうなんです。例え思っても、実行に至らず終わるんです。人を殺すということを本能的に押さえ込む性を持っているんです。逆にそれを持てない人もいる。それは、育ちが問題ではなく、生まれ持った素質によるものだと思います。」
「可八に、結婚は一生あきらめろと、言えというのですか。」
「いいえ。藤木さんの出生を問題にしない家もあるでしょう。でも、望月家は違います。そして、僕の婚約者の家も。」
「もし可八が身を引くと言っても望月・・明羅さんが承知しなかったら？」
「藤木さんさえその気になって下さったら、あとは僕が自分で何とかします。」
　愛姫は下唇を噛んだ。
「明羅さんが、不幸になりませんか。」
「兄ほどの男なら、相手はいくらでもいます。好き好んで、殺人犯の娘と一緒になることはないんです。結婚したら、どんなに隠しても絶対に人の口に上ります。兄が気にしないといったって、やはり良くない目で見られるんです。藤木さんだって辛い思いをするでしょう。それがわかっているから、反対するんです。愛し合ってさえいれば結婚できるなんて、子供か無頓着な人の考えです。家と家の繋がりを約束する以上、家族すべてを巻き込むことを考えれば、自分の意思だけで結婚を決められるものではないと思います。」
　瑞希の言い分はわかる。愛姫だって同じ考えだからだ。しかし、弱者側に立つと、一概にそうとは言えない。可八が悪いならいざ知らず、可八に非がないからだ。

「もし、私がお断りしたらどうしますか。」
瑞希の眉が軽く中央に寄り、が、またしっかりと前を見据えた。
「最後の手段に出ます。」
「・・・それは・・・？」
「藤木さんに直接言います、僕が。」
愛姫はゆっくり冠りを振った。
「それは・・・やめてください。あなたに言われたら、可八は傷つきます。」
「じゃあ、橋田さんが実行してくださいますか。答えは二つに一つだけです。本当に、待てないんです。結納は三週間後です。相手の家は資産家で、それなりの家柄なため今までも探偵に身辺調査をさせていました。おそらく、今でも続いています。ばれるのは時間の問題だと思っています。待てないんです。一日も早く、解決したいんです。」
例えばれずに結婚しても、ばれたが最後、離婚となってしまうと言う。
何という酷な選択。
明羅が好きだ。可八と別れてくれたらどんなに気持ちが楽になるだろう。しかし、それが明羅の意思でなければ何の意味も無い。ましてや自分が間に立って破談にしたとなれば、後悔と自責の念に押しつぶされるだろう。
下心のあるまま可八に別れを迫れない。瑞希の申し出だからという盾を傘に、自分のために別れさせるようなことになるからだ。自分勝手な都合で瑞希の願いを撥ねるのもおかしなことだが、やはり、色々苦労してきた可哀想な可八に、せっかくの幸せを諦めろとは言えそうにない。
黙りこんだ愛姫に、さすがの瑞希も攻めあぐねたようだった。強い口調を和らげ、穏やかに言った。
「すみません。初対面で無理を申し上げた上、攻めるような真似までしてしまって。」

「いえ・・・。」
「ですが、本当に、引き下がれません。両親をなくしてから、伯母がいたとはいえ色々と虐げられてきました。それがやっとつかんだ幸せなんです。どうしても、壊したくない。」
「明羅さんも・・・瑞希さんと同じ思いかもしれませんよ。」
「今は、周りが見えてないだけなんです。冷静になれば、僕の言うことが正しかったと気づくはずです。」
なぜか、母の死に顔を思い出した。
殺人犯の娘と暮らすことをどうしても受け入れられなかった母。努力しても駄目なことで、更に自分を追い詰めてしまった母。
だが、それは可八のせいではない。そう思うまでに十年以上はかかった。瑞希だって同じなのかもしれない。
いや。
無理やり納得しただけなのかもしれない。
どうせ可八は他人だ。いつかは別れる。どちらかが結婚すれば、それで終わる。
友達でも、家族でもない。一生つきあっていく理由がない。だから、受け入れることにしただけなのかもしれない。
「私は、・・・可八から明羅さんとの話を聞いたこともないので、とにかく一度話をしたいと思います。その上で、考えさせてくださいませんか。」
「わかりました。ただ、あまり待てません。」
「ええ。」
瑞希と視線が重なっても、いつものように逸らせたりはしなかった。瑞希の顔は、非の打ち所がなかった。明羅をこんなに観察したことはなかったが、きっと同じだろう。瑞希の自信は、この容姿に裏打ちされているような気さえする。
別れ際、瑞希は付け足すように言った。
「あなたなら、良かったのに。」
「え？」

「兄が選んだのが橋田さんだったら、僕は反対などしませんでした。」

夜のオフィス街に一人取り残された愛姫は、そのまま地下鉄の入り口に立ちすくんだ。

本当に、明羅が自分を選んでくれたら。

なんて甘い幻想。

なんて滑稽な夢。

蛍光灯の白い窓がいくつも層になる、この大好きな景色の中に溶け込んでしまいたい。

明羅は自分を選ばない。この先も、決して。

きっと今日も、瑞希と争うのだろう。

そして、自分も可八と争わなければならない。

やがて、晩夏の嵐が吹き荒れる。

第7話

愛姫は、かなり悩んだ。
瑞希からの依頼を、何と切り出せばいいかわからなかったからだ。しかし、いつかは話さねばならないのだろう。夕飯の後片付けをしている可八の背中に、愛姫は思い切って声をかけた。
「可八。」
「何ですか。」
洗い物の手を止めて、可八は無邪気に振り向いた。おそらく、愛姫の話など夢にも想像していないのだろう。
「望月さんとおつきあいしているんですってね。」
「・・・。」
可八の表情がこわばった。愛姫は話を引き出そうと落ち着いて、優しく言った。
「父に会って聞いたのよ。別に、隠すことではないと思ったから。」
「つきあいと言っても、いつも取材つきなので、何ともいえません。」
よく言う。
明羅が結婚まで考えているというのなら、それなりのことはあるはずだ。
「父は、結婚するみたいだと言っていたけど。」
「そんな、それは行きすぎです。」
何が、どう行きすぎだというのだろう。可八の話は体よくあしらわれている様で核心をつけない。
「じゃあ、考えてないの？結婚。」
「・・・考えてません。」
思わず、愛姫は身を乗り出した。
「考えてないの？」
「はい。」

「それほど好きじゃないってこと？」
「いいえ。」
「じゃあ、何？」
思わず口調が強くなる。すると、可八は少しうつむいていった。
「私は、殺人者の娘ですよ。結婚なんかしたら、明羅さんまで後ろ指指されてしまいます。」
愛姫は、可八がそんな風に思っているなどと少しも考えがおよばなかった。愛姫の態度が可八に劣等感を植え付けさせているとは感じていたが、こうまで考えているとは。
瑞希が案じる必要などなかったのだ。
「私、取材が終わったら明羅さんとは会いませんから。」
いつにない、強い意志の声だった。愛姫はなんとなく、可八が哀れになった。
「でも、好きなんでしょう。」
可八は、向日葵色の色あせたエプロンの裾をぎゅっと握った。
「好きですよ。」
そう言った可八の目が驚くほど大人で、愛姫は思わず息を呑んだ。
「好きだから、結婚しません。私の命より大事な人を、中傷の的になどさせられません。明羅さんのご家族にまで迷惑かけてしまいます。そんなことできません。」
きれいな表情だった。
可八が自分の意思を、こうもはっきり出したことがかつてあっただろうか。こんな表情を見れば、明羅が好きになっても不思議はないと思う。
もし、可八が明羅と結婚すると平然と言ってのけたなら、きっと愛姫は反発しただろう。だが、こういう展開では何も言えない。ただ、可八と争う必要がなくなったことで心の重荷が少し軽くなった。
現金なものだ。自分に都合が良いときは、相手に思いやりを持てる。
次の日、愛姫は瑞希に可八の思いを伝えた。瑞希は安堵している

ようだったが、愛姫は、本当に説得すべきは明羅なのだろうと感じていた。瑞希の戦いは、むしろこれからなのかもしれない。

可八がいくら明羅と結婚しないといっても、明羅が可八を思っているということだけで、愛姫は十分に傷ついている。思い返すたびに、胸の奥がずきりと痛む。

愛姫の今の仕事は、麻薬所持逮捕者の弁護だ。どう足掻いても有罪を免れない場合は、少しでも刑が軽くなるように手を尽くす。正義感の塊の愛姫には、耐えられないような依頼も少なくない。「では何故弁護士か」と言われたら、父と同じ立場にありたくなかったからとしか、答えられない。

今日は、逮捕者の上司に会い、情状のための意見書を書いてくれるよう頼んできた。本音を言ってしまえば、麻薬所持という常習性の高い犯罪に、情状の余地はないと思っている。それでも弁護をするのは、仕事だからと割り切ればいいのかもしれない。だが、愛姫にはまだ割り切れない部分のほうが多い。その分、精神的には非常に疲れる。

特に可八と明羅のことがあってからは、家について食事を終えればすぐに眠ってしまう。しかも、闇に引っ張られるように深い眠りに落ちる。

ワープロを打つ手の甲の細胞の筋が、深くなってきた。

ふと、窓の外をぼんやりと眺めた。

道向かいの雑居ビルのミラーガラスに、灰色の電柱が映っている。

目標が無い。

どこへ向かっていけばいいのかわからないのに、生きていかねばならないのは、少し辛い。

朝起きて化粧をして。

電車に乗って仕事をして。

夜、家に帰って眠る。

ただ、それの繰り返し。

休日を区切りに瞬く間に一週間が終わり、そして一年が過ぎていく。
繰り返して、どんどん年をとっていく。
一人なのだろうか。
このまま一生、一人なのだろうか。
明羅を好きになって、人生に少しの光が見えてきた気がしたのに、また闇に引き戻されてしまった。次にいつ動くかわからない心を抱えて、今度こそ、その覚悟をしなければならないのだろうか。
昼休み。
すっきりとしない頭を抱えて、日比谷公園にやってきた。
ベンチに仰向けになっているサラリーマンや、ランチを楽しむOL達の間を、ぼんやりと歩いていく。
出会う男が皆、既婚になっている。あるいは離婚暦のある男。そんなのに興味は無い。
ずっと一生懸命に生きてきたつもりなのに、どうして神様は、自分より気楽に生きているようにしか見えない女たちには与えている「妻」という座を、自分には与えてくれないのだろうか。
卑怯なところはある。人を見下す癖もある。
それがすべて、一人でいる原因になるのだろうか。
一人でも生きてはいける。
仕事にあぶれる心配はないし、大病さえしなければ、老後まで安泰だろう。
しかし。
公園の芝生に群がる無数の雀が、いっせいに空へ羽ばたいた。
空を仰いだ首筋がピンとのび、新鮮な空気が体に満ちた。
だが、空があまりにも眩しくて。
再び地面を見下ろし、瞼を固く閉じた。
睫毛だけが、静かに濡れた。

第8話

望月瑞希は、兄、明羅と二人で都心のマンションに暮らしている。十五年前に事故で亡くなった両親はローンをかかえていなかったため、今でもここに住んでいる。

二人が学生の頃は、父の妹で精神科医の美紗緒が、一緒に暮らして保護者代わりになってくれていた。独身貴族の叔母は、今でも時折様子見がてら、話し相手になってくれている。

しかし明羅の一件は駄目だった。叔母は明羅に味方した。

「彼女が罪を犯したわけではないでしょう。第一、明羅君はそれで中傷されたら真正面から立ち向かうわ。瑞希君だって、そう思うでしょう。」

「素性の悪い家系は、絶対に廻りますよ。」

「明羅君が、守るわ。絶対にね。」

精神科医は寛大だ。瑞希は頼る術が身内に無いことを知り、最後の頼みの綱として、愛姫を訪ねたのだった。

愛姫は可八の意志を確認してくれたが、全然安心できない。可八の薄弱な思いなど、明羅の強さにすぐ押し切られてしまうと思うからだ。

愛姫は、所詮他人なのだ。可八が誰と結婚しようと関係ないのだ。いや、肩入れするからこそ、反対などできないのかもしれない。どちらにせよ、期待などしてはいけなかったのだ。

孤立無援の意味を、瑞希はことさら噛み締めた。兄の幸せのために、自分の輝かしい未来を犠牲にされていいわけがない。愛姫のような強い女性より、頼りなげな可八を選んだ兄の気持ちが、わからないわけではない。そう、愛姫は男に頼らず一人で前を向いて生きていく。どちらかというと、自分より下の男は男として価値を見出していないような気さえする。

瑞希の婚約者の沙織は、同じ勤務校でフランス語の講師をしてい

る。典型的なお嬢様育ちで、講師も社会勉強のためであり、仕事としての責任やキャリアなどというものとは無縁だ。こういう女が、平日は仕事で目一杯の夫に、休日の家族サービスを当たり前のように要求する妻になるのだろう。自分の都合に合わせて時間を作り、自分一人の時間を持てる立場に感謝などせず、非日常を夫にねだる。働いている者にとっては、家にいられる休日こそが非日常だというのに。だが、将来の理事長の椅子を思えば、それくらい容易いものだ。

直接会う前に、実は、瑞希は愛姫の裁判を見に行った。

颯爽としていて、うらやましかった。だが、その表情が何故か憂いを帯びていた気もする。大変な仕事だからそれなりに辛いこともあるのだろうと、一人納得した。

だが、あの姿が冷たい他人行儀を思い起こさせる。実際会った愛姫は、エリートぶったりせず、大人しい印象の女性だった。しかし自分の意見をのべるときだけは、商業柄か、瞳の鋭さが違った。

瑞希は、自分がどんなにもてるか自覚している。それに気づいたときから、女は利用する道具になった。自分を高めるためなら、自分の得になるのなら、どんな女とでもつきあった。自分から近づいたことなどなかったし、別れることを惜しんだ相手などなかった。雑誌に並んでいる物を与えれば喜ぶのだから、簡単なものだった。瑞希は、自分にあしらえない女などいないと思っている。

だが、愛姫はわからない。

ピアスもマニュキュアもしない女はめずらしい。これ見よがしのブランドのバッグも持っていない。指輪もしていない。鎖骨に、シンプルな銀のネックレスがさりげなく輝くだけだ。何をあげたら喜ぶのかわからない。どんなに優しくしても、自分の思い通りには動かないと思う。

その夜、明羅は十時過ぎに帰ってきた。可八と食事をした後、家まで送り届けてから帰ってきたという。

「忙しくて疲れているんだったら、送り届けるなんてことまで、す

ることはないだろう？」
腹立たしく言い捨てると、明羅は穏やかに微笑んだ。
「瑞希だって、遅くなれば沙織さんを送っていくだろう？」
「兄貴が疲れきっているから心配しているんだよ。」
「そうか。ありがとう。」
あまりにも穏やかな様子が妙に腹立たしい。自分とは正反対で、女性になどずっと興味が無かった兄が選んだのが、あの冴えない殺人犯の娘だと思うと地団駄踏みたい気分だ。
「で？もう結婚の話をしたのか。」
「ああ。」
瑞希は思わず固唾を呑んだ。
「彼女、何て。」
明羅は瑞希がどんなに反対しているかわかっている。だから少しためらい、そして言った。
「大丈夫だよ。」
「え・・・？」
明羅のそれは、答えになっていない。
「どういうことだよ。」
愛姫の言葉を信じている。だからこそ、はっきりさせたい。焦る気持ちをむき出しにした瑞希に、明羅は冷静な目を向けた。
「結婚するよ。例え、彼女が何と言おうと。嫌われない限りは。」
兄の背を眺めながら、瑞希は愛姫に会ったことが無駄だったのだと悟った。可八がどう思っているかなど問題ではなかったのだ。兄を説得しない限りは、どうにもならなかったのだ。
「俺の結婚はどうなる？いつかは破談になる。」
「沙織さんが瑞希を本当に好きならそうはならないはずだ。」
「馬鹿を言わないでくれ！結婚は家同士の繋りだ。本人同士の問題だけで済まされるようないい加減な家系じゃないんだよ！」
「本人に責任の無いことを攻めるのは卑怯なことだ。そういう相手となら、結婚すべきじゃない。」

「それはこっちのセリフだ。家の者の賛成を得られないような相手とは結婚すべきじゃない。絶対に、どこかで誰かが不幸になる。兄貴に、俺を不幸にする権利なんかないはずだ！」
「なら、どうすればいい？俺が、望月家から籍を外せばいいのか。」
瑞希は強く唇を噛んだ。
「兄貴には、俺よりも、叔母さんよりも、藤木さんのほうが大切なのか。」
明羅の細い目が、僅かに揺れた。
「彼女には、俺しかいない。」
「橋田さんがいる。」
「橋田さんは、いつか結婚する。その時彼女は天涯孤独になる。」
「同情で結婚するのか。」
「同情なら、橋田さんにだってしている。違うよ、可八に対しては同情なんかじゃない。」
「橋田さんだったら良かったよ。俺、そしたら大手を振って賛成していた。」
「それは、橋田さんが地位ある女性だからか。」
「それだけじゃないよ、素性も確かだ。少なくとも犯罪者の家系じゃない。」
「人を、家系で判断するな。」
「十分な判断材料だよ。犯罪を起こしたんだ、まともな血が流れているとは思えない。それを拒否する俺は正常だ。沙織の家も正常だ。だから今、婚約を破棄されたって当然だと思ってる。・・・時間の問題だよ。例え兄貴が籍を抜いたって関係ないだろうね。血が繋がっている限りは、他人にはなりえない。兄貴が藤木さんとの結婚を諦めてくれない限りはどうにもならない。藤木さんがどんなに素晴らしい人であろうと関係ないんだ、殺人犯の血が流れている限りは！」
　同じようなやりとりを、もう何回もしている。堂々巡りで決着などつかない。だが、言わずにはいられない。兄の理想論など、現実

の前では無に等しい。
やっとつかんだ逆玉のチャンスだ。女性は結婚する相手の男によって人生が左右されるというが、それは男にだって同じことだ。
兄の転落人生など見たくない。日陰を歩かせるようなことなどしたくない。二人で一生懸命生きてきた。お互いが最高の理解者だと信じていた。
だが、ここで決別した。
女という生き物によって。
馬鹿らしいと思う。
だが、互いが譲れない。
もう、どうにもならないのか。
絶望のふちに立たされた瑞希は、最後の手段を決意していた。

第9話

瑞希に可八の思いを伝えたものの、愛姫にはあれで解決できたとは思えない。

可八は明羅と会っている。最近では、可八の様子でそれがわかるようになっていた。

悔しい。

自分より先に恋人を持ったことではなく、あの明羅の心をとらえたことが悔しい。

だが、可八はその未来をあきらめている。それが本当なら、切ないことだ。

しかし。

どうせ明羅についていくのだろうと思う。

明羅の言葉に抗えないのだろうと思う。そうすると、可八の潔い決意の言葉でさえ、疎ましくなってしまう。

誰に相談することもできず、自分の中で反芻しては落ち込んでいく日々が愛姫には続いた。本当に重い悩みは誰にも話せないものだが、それでもこういうときは、自分の孤独をことさらに感じずにはいられない。

友達がいない。

恋人もいない。

家族も、いない。

ある夜、どうしてもバーに行きたくなった。

酒は嫌いだが、どうしてもあの雰囲気に浸りたくなった。

たった一杯のシンガポール・スリングだったが、アルコールに免疫のない体はすぐに反応し、体が熱くなった。気だるい液体を吸い込んだ赤いチェリーが効いたようだ。

マンションに戻ると、下半身の力が一気にぬけ、上がり框に手をついた。

「大丈夫ですか？」
あわてて愛姫の体を支えようとした可八は、いつもと違う雰囲気に、動きを止めた。
「お酒、召し上がってらっしゃいます？」
愛姫は何も答えず、とりあえず框に腰を下ろした。足が思ったように動かない。どうしたら楽になるのかわからないが、こうして休むほかない。
そこへ、可八が水の入ったコップを持ってきた。
差し出されたグラスを持ち、しかし、愛姫はそれを素直に受け取る気持ちになれなかった。
可八には支えがある。つらい思いを支えてくれる、これ以上ない恋人がいる。だから、こんな自分にもやさしくできる余裕があるのだ。
可八のせいで。
可八のせいで、母は死んだのに。
可八のせいで、自分の人生は狂ってしまったのに！
パシャッ
気づくと、グラスの水は可八の頬から滴り落ちていた。空のグラスをフローリングに投げ出し、愛姫は座った目で可八を訝しげに睨み付けた。
「思い上がった顔をしないで。自分に恋人がいるからって、浮かれた顔見せないで。私から何もかも奪ったくせに、そんな顔しないでよ！」
可八がどんな表情をしたか。
わからないまま床に倒れこんだ。
もう、どうなってもいいと思った。
可八と一緒にいたくない。
明羅と結婚したければすればいい。そうしたら晴れて自分は自由の身だ。
しかし、一人になって、それで何があるというのだろう。

何も無い。
家に帰って、毎日一人になるだけだ。
いったい自分は何を求めているのだろう。何がどうなれば満足するのだろう。
明羅は可八のもとへ行ってしまった。
あんなに苦労してなった弁護士なのに、毎日がジレンマとの戦いだ。
どうして、弁護士を目指したのか。父に対抗したかっただけなのか。だとすれば情けない。
人生の価値が見出せない。今までが我武者羅すぎたのか。
冷たい床に頬をつけたまま、愛姫は重い瞼を閉じた。

次の日は、可八と会わずに家を出た。あそこまでしてしまったのはお酒のせいもあるだろうが、やっぱり後悔せずにはいられない。
気まずい。どうすればいいのか。
その日の帰り、あまりの蒸し暑さに耐え切れず、愛姫は帰り道のコンビニで冷たい炭酸飲料を買い、飲みながら夜道を歩いた。このまま帰って可八にの顔を見るのも気が重く、愛姫はマンション近くの公園へ足を伸ばした。
木々の間を流れ出した風が汗に当たって気持ちが良い。ブランコを揺らしながら公園を独占し、ペットボトルが空になるのを待って、家へ戻った。
しかし、可八は家にいなかった。
また明羅か。
後悔した気持ちが又憎しみに変わり、空のボトルをゴミ箱に投げつけた。
時計を見ると、十一時を回っている。
その時だった。
突然、玄関のチャイムが鳴り響いた。
こんな自分に誰か。可八なら鍵を持っている。

チェーンをつけたままドアを開けると、そこには紺色の制服姿の若い警官がいた。
驚く愛姫に、警官は軽く頭を下げた。
「夜分遅くに失礼します。橋田愛姫さんですね。」
「・・・はい。」
「こちらの女性と同居していらっしゃいますね。」
警官の影に隠れるように、幽霊のように可八が立っていた。
「・・・そうです。」
警官は可八に家に入るよう促し、その影が見えなくなるのを確認してから、小さな声で愛姫に言った。
「実は、電車に飛び込もうとしたところを保護したんです。」
「・・・！？」
愛姫は耳を疑った。
空気が固まってしまったように、体内に入らない。
「青い顔してホームにずっと立っていたらしく、駅の係員が不振に思っていたら、突然走り出したということで、通報が。」
「・・・・・。」
「聞いても何も話してくれなくて、とにかくやっとここの住所だけ聞き出しまして。」
「そうですか。すみませんでした・・・。」
一通りの手続きをすませ、警官が帰ると、愛姫は玄関にへたりこんだ。
何ということだ。
今さら、心臓が高鳴りだした。喉から飛び出そうで、息ができない。
可八が自殺未遂。
自分のせいなのだろうか。
夕べのことがあったから。
（私が・・・・。）
もし、このまま可八が死んでいたら、どうしていただろう。自分

の言動が可八を追い詰めたのだとしたら、自分が殺したも同じだ。殺人者と同じだ。
突然、唇が震えた。歯が噛み合わさらなくなった。
恐ろしかった。
自分の罪が恐ろしい。未遂でよかったものの、本当に死んでいたら。
と、その刹那、愛姫ははじかれるように立ち上がった。可八が、今また独りになって自殺をはかろうとしているのでは、という不安がよぎったからだ。
「可八！」
愛姫は廊下を走り、可八の部屋の扉を勢いよく開けた。
中は暗く、廊下の明かりではよく見えない。
息を呑み、目を凝らして中へ入っていくと、ベッドに顔を伏せて可八は泣いていた。
「可八・・・。」
愛姫はとりあえず安堵して可八のそばに近寄った。
「可八、・・・私が悪かったのね。」
すると、可八は布団に埋めた顔を横に振った。
「でも、昨日は私が悪かったわ。」
「そうでは・・・ないです。」
声にならないほどの嗚咽が夜の静寂に響く。
「じゃあ、なぜ・・・。」
可八は泣いたまま、何も言わなかった。言えなかったという方が正しいかもしれない。
愛姫は、とにかく可八を独りにしてはいけないと思った。いつ、また死への衝動にかられるかわからないからだ。
泣きやまない可八をベッドに入らせ、愛姫はその傍らに付き添うことにした。
どんな理由にしろ、可八が自殺していいわけはない。
（もしかして・・・。）

瑞希ではないか。
駄目なら最後の手段に出ると言っていた。明羅の説得ができなくて、可八に直談判したのではないか。もしそれが事実で、それに愛姫の態度も加わったなら、自殺するほどの気持ちになっても無理はない。
（やっぱり、私が・・・。）
昔、可八が自閉症になって、自分のせいだと思ったときを思い出した。あのときも恐ろしくなって、可八を救うことに必死になっていた。それと同じことを繰り返している。
可八を救うためではない。
自分を救うために必死になっていただけだ。
一番卑怯な自分。
一番ずるい自分。
やっと眠った可八を眺めながら、愛姫は自責の念にかられた。今、こうして傍に付き添っているのも、優しさからではない。自分が楽になりたいからだ。自分を救うためだ。
（でも、）
可八がいくら憎くても、死んで欲しくはない。夢見が悪いからとかではなく、ストレートな、感情だ。それが、長く一緒に暮らしているがゆえの情というものだろうか。
（自分を殺したりしないで。）
窓の外のベランダ越しに、銀色の星が見える。
夜は、真夜中でも漆黒ではない。雨が降っても、いつも蒼い夜だ。
（宇宙の色は、・・・黒じゃないんだ。）
愛姫の瞳から、涙が溢れだした。
何が悲しいのか、自責の念なのか、可八が無事だったことにホッとしているのか、わからない。ただ、涙が止めどなく溢れていく。
愛姫はその夜、可八の手を握ったまま、放すことはなかった。

第１０話

愛姫はまんじりともせず、朝を迎えた。
一晩中、身体のどこかしらが、恐怖に震えていた。自責の念か、死というものを目の当たりにしそうになった恐怖か。
まぶたの裏から離れることの無い、母の死顔。それが可八の寝顔に重なって、喉を締めつけられるような苦しみに苛まれる。もう、ごめんだ。誰かが死ぬところを、二度と見たくない。例えそれが、可八であっても。
愛姫がどんなに想っても、明羅が可八を選んだことは、可八の責任ではない。そんなことは、十分わかっていたはずだ。もういい加減、気持ちに区切りをつけねば。
起きた可八の目は腫れていて、瞼がまともに開かないようだった。
「今日は、会社・・休みなさいね。」
いくら愛姫でも、優しくせずにはいられない。傷ついてぼろぼろになっている可八を、責めることなどできない。
朝食をお盆に載せ、ベッドの脇に置いた。
「私も、今日は休むから。」
すると、可八は慌てて首を振った。
「私、大丈夫ですから。」
「駄目よ。独りになんて、できないわ。」
なんて偽善的なせりふ。
父を偽善者だとあざけっていたが、見事に自分も偽善者になっている。可八はそれきり口を噤んでしまった。自殺の理由は話せないようだった。傷が深いのだから、当然だと思う。
「とにかく、今日は二人でずる休みしよう。今まで、そんなことしないで生きてきたんだから、一日くらいいいよね。」
明るく言って、愛姫は立ち上がった。
「そうだ、久々に料理でもするわ。チェリータルトでも作ろうかな。

そしたら、一緒にお茶しよう、ね。」
部屋を出て、愛姫は今日の仕事を休むとどうなるか頭の中でシミュレーションして少し青ざめた。
だが。
仕事より大事なこともこの世にはある。仕事至上主義の愛姫だが、今日は例外だと思う。可八のためにできることが、他にみつからない。
今日だけは、可八を孤独にさせてはいけない。もし自殺の原因が瑞希だとしたら、明羅に頼れはしないだろう。そういうときのための「同居人」なのではないか。
家の冷蔵庫を久々に開けた。
よく整理され、磨かれている。
可八に恋人ができたからといって、家族としての役割が終わったわけではなかったのだ。むしろ、それによる悩みや障害を越えるための力になる存在が、新たに必要になるのだ。そんなことが、わからなかった。
その日は雨だった。
こんな出歩くのが億劫になる日に家にいられるのは、ちょっとした優越感に浸れる。
ベッドの中の可八と、できたてのタルトでお茶をした。
熱々のとろけるようなオムライスを食べた。
二人で映画のビデオを観た。
夕方は一緒に台所に立った。
久しぶりだった。一日を丸ごと二人で過ごしたのは。家にいても、二人は自室でばらばらに過ごすことのほうが多かったからだ。
こういうのが家族なのかと、愛姫はしみじみと思った。そう、可八が自閉症だったときも、学校を休んでは、こんなことをした気がする。
夜。
可八はこれ以上愛姫に迷惑をかけられないと、重い口を開いた。

瑞希から明羅と別れるよう宣告されたと、告白した。
「私、明羅さんには結婚を断りました。でも、明羅さんからは絶対あきらめないと言われて。」
「・・・それで？」
「私の気持ちは変わりません。明羅さんに私の罪を一緒に背負わせるようなことさせられません。でも、私は怖いんです。明羅さんをどんなに拒んでも、あきらめてもらえなかったら、私の気持ちもいつか抑えきれなくなってしまいます。そしたらきっと、明羅さんの申し出を受けてしまうんです。私は、私に負けてしまう。だから、・・・死のうと思いました。死ねば、結婚できませんから。」
「可八・・・・！」
愛姫は可八の肩を揺すった。
「そんなこと考えちゃ駄目！あなたを失ったら、明羅さんは一生それを引きずる！幸せになるどころじゃないでしょう？」
「じゃあ、どうしたらいいんです？！」
可八の悲痛が、愛姫を貫いた。
「私は、どうすればいいんですか。もう、・・・私は、明羅さんを意識しないで生きていくことはできません。明羅さんが私を嫌って下されば、いいんだと思います。でも、どうしたらいいのかわかりません。」
　こんな悲恋も、愛姫にはうらやましく思える。胸がはりさけるほどの恋愛をしてみたい。片思いの独り相撲でなく、両思いが故の苦しみを味わってみたい。独りより二人のほうが悩みが深いときいている。でも・・・。
「可八が明羅さんを嫌わない限り、無理よ。可八みたいな正直者が嫌われるようなお芝居ができるわけがないもの。」
「・・・ですから、」
「でも、死ぬなんて言わないで。もう、絶対にそんなことしないで。明羅さんにとっては、あなたと結婚することで受ける苦しみのほうが、あなたを失う苦しみよりずっと楽なはず。明羅さんがすべてわ

かって可八を選んだなら、迷うことはないと思う。」
愛姫は可八の細い手を握り締めた。
「そして、お願い。私を、独りにしないで。」
「愛姫さん・・・。」
今は、心から、そう願う。
可八がいない人生を望んでいた。
だが、いなければ本当に独りだ。こんなにも孤独になる。邪険にできたのは、いるのが当たり前だったからだ。言いたいことを言っていたのは、可八の存在に甘えすぎていたからだ。
「ごめんなさい、愛姫さん。私、・・・本当にこの世にはいらないって思ってて・・・。愛姫さんにもずっとずっと迷惑かけていて、私はやっぱり生きていてはいけないって・・。」
「ううん、私が悪かったの。私が可八に甘えていたのよ・・・。いっつも八つ当たりして。可八が受け止めてくれるのが当たり前みたいにして、・・・。」
互いの手を強く握りながら、愛姫は瑞希に会おうと思った。
可八と明羅のことを認めてもらおうと思う。可八の純粋な思いと明羅の強い意志の前なら許さざるを得なくなるかもしれない。
もう、二度とこんな思いをさせてはいけない。可八が殺人犯の血が流れているからといってこの世に存在していけない理由はない。
その夜、愛姫は可八の隣に眠った。
まだ不安がなくなったわけではない。
次の日は、さすがに仕事を休めなかった。可八には休みをとらせたが、こまめに電話することにした。可八は、「もう馬鹿な真似しませんから。安心してください。」と笑ったが、そのまま受け取れはしない。
今回のことを、明羅が知ることはないだろう。可八が明羅に話したら、それこそすべては嘘になる。
可八を信じる。
明羅を信じる。

二人の真剣な思いを信じて、二人を応援する。可八の不幸を見てはいられない。明羅の不幸を見たくはない。

明羅になら、可八を安心して任せられる。どんなことがあっても、その力の限り可八を守り抜くだろう。圧倒的な意思を持って。

それをうらやみながらも、あきらめの風が吹いている。

可八には自分が持っていないものを持っている。そして、可八のように複雑な生い立ちを持つ女には、明羅ほどの男でなければ太刀打ちできないとも思う。

時々、自殺未遂で愛姫を脅かした可八をずるいと思う気持ちが湧き上がったが、それを時の流れで少しずつ溶かしながら、愛姫は可八との現実を受け止めていくしかなかった。

第１１話

九月の下旬。ようやく残業をしなくても良い程度に、仕事がひと段落した。
愛姫は瑞希と会おうと決意し、電話をした。が、通じない。
携帯の留守電にメッセージを入れたが、返事がない。
明羅に瑞希とのことを知られてはならないため、自宅へは電話できない。
仕事場である学校に電話をかければ、迷惑をかける気がする。肩書きなしの女性から結婚間近の男性に電話があったなどと噂がたっても良くないし、弁護士という肩書きの人間からの電話も、何かトラブルをかかえているのではないかと、疑われるだろうからだ。
十月に入っても、まだ返事が無かった。
さすがに嫌われたのかと思ったが、瑞希の結婚が駄目になってないかと思うと、気は休まらない。ばれるのが時間の問題だと言っていたから、もうばれているだろう。その結果、どうなったのか。明羅はその問題を、どう感じているのか。
いくら返事がもらえなくても、関わった以上、行く末を見届ける責任があるように思う。
取材で明羅に会ったとき、愛姫はそれとなく水を向けてみた。
「望月さんには弟さんがいらっしゃるそうですね。」
「ええ、・・・よくご存知ですね。」
「可八から聞いたんです。結婚が近いとか。」
「そうです。いわゆる逆玉というやつで。両親が事故死した当時、弟はまだ小学生でした。親なしっ子と随分いじめられたようです。だからか、すごく上昇志向が強い男です。・・・弟が、何か？」
少し怪訝そうな顔つきになったのを察知し、愛姫は首を振った。
「いえ、単なる世間話ですから、お気になさらないで。」
この様子では破談にはなっていないようだ。しかし、本筋は全然

わからない。
いや。もし破談になっていたとしても、他人の愛姫になどそう簡単に話さないだろう。
十月も終わりに近づき、一枚の上着では寒く感じられるようになった頃、明羅が取材で北海道へ行くことになった。問題は、明羅が可八を一緒に連れて行くと言ったことだ。
「女性の記者が二人行くことになっていたんですが、そのうちの一人が急遽別の取材で駄目になりまして。チケットもホテルも相当のキャンセル料がとられてしまうので、無駄にするくらいなら誰か連れて行ってはどうかという話になったんです。」
出発は明後日。
旅行などしたことがない可八にとって、それは大変なことだ。しかも、恋人と旅行！
例え、二人きりでなくても。
女性記者と同室だと言われても。
責任を持つという明羅の愛姫に対する説得は、まるで娘の母親にするようなものだった。いくら可八と明羅のことを諦めたとしても、まだ恋心が完全に消え去ったわけではない。いや、二人の仲を認めたからといって、明羅を思う気持ちがなくなったわけではない。
だが、愛姫は可八の旅支度を甲斐甲斐しく手伝った。娘の初旅行の手伝いをする母親のように。自殺しようとまでした可八が、今は不憫でしかない。できるなら、明羅と幸せになって欲しいとも思う。
愛姫の旅行鞄を貸し、持って行くべきものを買い揃えた。いくらホテルに一式そろっているからといって、何も持たないのは楽観的過ぎる。寝巻きまで新品を買うことにした。とにかく、そうしないではいられなかったのだ。
出発の朝。愛姫は玄関で、お金の入った封筒を可八に渡した。
「皆さんに頼りきりでは駄目よ。自分のことは自分でね。お仕事の邪魔にならないよう、独りでおとなしくしているのよ。」
すると、可八は少し緊張しながらも、軽く笑って見せた。

「愛姫さんたら。私は小学生ではないんですよ？」
「でも、きっと望月さんたちは気を遣って下さるわ。それに甘えないようにね。」
「はい。じゃ、行ってきます。」
軽く手を上げて、可八は明るく出て行った。
仕事の場にプライベートを持ち込むということは、関係を公にするだけの前提があるということだ。
つまり、結婚を公にするということ。
瑞希は、やはり明羅をどうにもできなかった証拠だろう。今回の取材旅行のことも知っているのだろうか。知っていたとしたら、相当、もめたのではないだろうか。
とにかく、瑞希の沈黙が不気味だ。あきらめたとは思えない。だが、そんなことを思うと、明羅に思いを馳せないではいられない。
可八のいない夜。
眠れなくて、テレビをつけっぱなしにして、ソファに体を投げ出し、ただ宙をにらみつけていた。
深い夜。今頃明羅は可八を抱いているのではないか。そう思うと、体の中で感情と結びついている臓器という臓器が引きちぎられるようで、痛い。
明羅が好きだ。今でも。一生遂げられない思いでも、だからといってどう葬ればいいというのだろう。諦めている。可八との仲も認めている。だからといって、暴れるこの感情を沈めることなどできない。
こういうとき、人はお酒におぼれるのだろうか。だが、酒に弱い愛姫には、適わない。
明羅の手が、可八をどう抱きしめるのかと思うと、いてもたってもいられない。
「・・・・！」
言葉にならない気勢を上げ、クッションを床に投げつけた。
柔らかな綿がショックを吸収し、その手ごたえの無さがかえって

いらいらを増長させる。
明羅にとって、愛姫は可八の保護者でしかないのだろう。
あんなに弱みを曝け出したのに、同情以上のものはもらえなかった。
一瞬でも未来を思い描いた自分が、滑稽で情けない。
恋がしたかった。
誰かに、目茶目茶に心を乱されたかった。
叶ったのに。
恋の悩みが贅沢だと知っているのに。
いざ当事者になれば、そんな理屈は何にもならない。ただ、自分を冷静に批評する判断材料になり、自分をこき下ろすだけだ。
（ただひとつ、良かったことは・・・。）
告白しなかったこと。
明羅の優しさを勘違いして、安易に自分の思いを告げてしまわなくてよかった。
おかげで、今も“保護者”面はしていられる。
それを臆病という人がいる。だが、そんな言葉で片付けられたくない。相手の気持ちを大切にしているのだ。その上で、自分を防御しているのだ。
ひざをかかえて、泣いた。
今日は、可八がいないから堂々と泣ける。
可八と同居を始めて以来、可八がいない夜は、初めてだ。
修学旅行を担任に止められた可八。
普段のいじめが助長する虞があるからと。
だから、いつも一緒だった。自分が出張したり、旅行する以外はいつも。
可八は二十年間、愛姫のそば以外で、夜をすごしたことがなかったのだ。
可哀想な可八。
だけど、憎らしい可八。

明羅を手に入れられるのなら、可八の不幸をすべて背負ったっていい。明羅との人生が待っているのなら、どんな苦労だって我慢する。

しかし。

可八よりましな人生を与えられた愛姫を、明羅は欲しなかった。

心の中の希望という在りかに、ぽっかり穴が空いている。

（でも、私は生きていくのだ・・・。）

命が枯れない限り、明日がなくならない限り。

日々の老いに怯えながら、一生独りであることに怯えながら、希望なく生きていくのはどんなに侘しく苦しいだろう。

人は希望なくして、生きてはいけない。希望の無い人間は他に楽しみをみつけ、それを希望にすりかえる。

そんな寂しい人生を、これから五十年も送っていかなければならないのか。

（誰か・・・、私を見つけて。）

こんなに一生懸命生きている自分を見つけて欲しい。認めて欲しい。

愛して欲しい。

母を失い、父を捨てた愛姫にとって、可八だけが愛姫の孤独を埋める存在だったのだ。

その可八をも手放す日が近いことに、愛姫は重苦しい寂しさを噛み締めていた。

第１２話

少しは眠っただろうか。
カーテンの隙間から差し込む光が白くて、愛姫はあわてて起きた。
愛姫は、瑞希に会うという目的を持つことで、今日を生き抜くことにした。目的が無くても生きてはいけるのだろうが、何も無しでは心を支えきれそうにない。
だが、瑞希の仕事場へ行くわけにも行かないし、待ち合わせしようにも、電話にも出てもらえない。会うためには、明羅のいない今、マンションへ出向くしかなさそうだ。
会わないではいられない。どうなったのか、聞かないではいられない。
結婚が駄目になってしまったのならば、謝りたい。結局、力にはなれなかったと。可八と明羅の思いに負けてしまったと、正直に言って、謝るしかない。
明羅をふっきるためにも、瑞希との決着をつけておきたい。
愛姫は、自分でも大胆すぎるほど大胆な行動に打って出た。
瑞希の名刺にはご丁寧に自宅の住所も書いてあり、マンションの場所はすぐにわかった。
八時少し前。
確実に帰宅していて、夜遅すぎない時刻を考えた。
高層マンションの7階。表札を何度も確認して、チャイムを押した。
一度押すと、呼び出し音は二回、繰り返される。
しかし、何の音沙汰も無い。
もう一度、ゆっくり、丁寧にチャイムを押した。
（まだ、帰らないのだろうか。）
次で駄目なら、少し時間を置いて出直そうと、再びボタンを押した。

ガチャッ。
突然、扉は開いた。
ゆっくりと開かれたその内部は、電気がついていないのかと思われるほど暗かった。共用廊下の蛍光灯で、かろうじて瑞希だとわかった程度だ。
瑞希は、かなり驚いた様子だったが、何も言わなかった。愛姫は戸惑いながらも頭を下げた。
「突然すみません。でも、なかなか連絡がとれなかったものですから。」
瑞希の荒んだ目が、光った気がした。
「・・・外に話が筒抜けになりますから、中に入ってください。」
扉を閉めると、瑞希は玄関の電気をつけた。つまり、ここで話をしろということだ。
突然、アルコールの匂いが鼻をついた。ひんやりとした室内を、気だるい雰囲気が漂う。瑞希の暗い表情に、愛姫は大体の事情を察した。
「用件をどうぞ。」
壁に肩を預けた瑞希の声は、投げやりで冷たい。
裾をまくった白いシャツまでが、冷たく感じる。
「可八と、お兄様のことです。許していただきたくて。」
「許す？」
「そうです。可八は出生のことで、ひどく悩んでいました。でも明羅さんの決心が強く、断りきれないと。それで、先日自殺しようと・・・しました。」
だが、瑞希は顔色一つ変えずに言った。
「だから？彼女は生きていますよね、立派に。自殺のふりをして許されるくらいなら、誰だってやりますよ。」
「そんなこと・・！可八は演技したりしません、本気でした。ただ、周りにいた方たちが止めてくださったから諦めたにすぎません。私はその時にわかりました、可八は、自分の命よりも明羅さんが大事

なんだと！」
瑞希は鼻の先で笑った。
「俺がそんなことで情に絆されるとは思わないで下さい。藤木可八は生きている。そして、兄と旅行にまで出かけている！」
やはり、瑞希は知っていた。旅行前は、相当もめただろう。
「兄を思って自殺しかけた女が、今ではのうのうと生きている！旅行だなんて、娯楽にも走っている！同情の余地どころか、かえってあてつけがましくて、腹立たしい！」
瑞希の手が、下駄箱の上のガラスの置物を床へたたきつけた。
お酒のせいもあるだろうが、相当荒れている。だが、愛姫もこのまま引き下がるわけにはいかない。
「可八の旅行は、私がお願いしました。あの子、今まで旅行をしたことがないんです。修学旅行さえ参加したことがなくて、不憫で、私がお願いしたんです。ですから、可八のことは責めないで下さい！」
突如、瑞希は愛姫の両肩を乱暴につかみ、揺さぶった。
恐ろしいほどの形相で、瑞希は愛姫の顔を睨んだ。
「あなたまでそういう嘘を言うんですか。あの殺人犯の娘をかばうんですか！俺の生活をすべて奪った、あの女を！」
「・・・・！」
愛姫を乱暴に突き放し、瑞希は床に崩れるようにひざをついた。そして、床の上に散らばったガラスの上で、かまわずに拳を何度もたたきつけた。
むき出しの感情が恐ろしくて、愛姫は何も言えずにただその様子を見ていた。
やがて、搾り出すような声がした。
「婚約は、破棄されました。学校も、今月一杯でクビですよ・・・！」
「！！」
懼れていたことが現実になってしまった。だから、電話しても出

てもらえなかったのだ。
「どうして、どうして関係のない人間までが巻き込まれなければならない！？それは、あなただって経験していたことでしょう！？俺が、やっと掴んだ幸せを・・・、例え他人にとっては汚いやりかただったとしても、自分には目一杯の努力で手に入れたものを、どうして赤の他人に奪われなければならないんですか！」
廊下に崩れるように蹲る瑞希を見下ろし、愛姫は突如、母を思い出した。
冷たくなっていた母。
傍らでその体を揺する可八。
そして、明羅を奪った可八。
瑞希の手が、ガラスで血に染まっている。愛姫は慌ててハンカチを取り出し、瑞希の手にあてた。
「ごめんなさい。可八のために、あなたの人生を狂わせてしまってごめんなさい。わたしは何もできなかった。とりかえしのつかないことになると、わかっていながら・・。」
瑞希の表情は、長い前髪に隠れて見えない。だが、髪の先が小刻みに震えている。
愛姫は怖くなった。
瑞希が、かつての母のようになってしまうのではないかと思うと、唇が震えだす。
可八のせいで、またも同じことが繰り返されてはならない。
何もできなかった自分を責めた。
後悔が無力であるあることを知っているから、切なかった。
切なくて、切なくてたまらない。
自分がかつて体験した事と、今、実感している寂しさとがあいまって、それが瑞希の切なさにシンクロして、たまらなくなる。
瑞希は、愛姫のハンカチを拒絶した。
「橋田さんに謝ってもらおうとは思いませんよ。」
「私は、可八の自殺騒ぎで結婚に反対する気力を失いました。瑞希

さんの力になることをやめました。だから、私にも責任があります。」

「だからって、あなたに何ができますか？できはしない、できるわけがない！」

瑞希の端正な顔が、こんなにゆがめられるのは悲しい。

「あなたが・・・、橋田さんのような人が育てたから、藤木さんは兄の目にとまるような女になってしまったんでしょうね。もっといい加減な、学の無い人間に育てられていれば、と思ってしまう。わかっています、俺が自分のことしか考えられない暴君だってことは。だけど誰だって自分が一番大事だ。その大事な自分が崩れることを耐えられる人間なんかいるわけがない・・・！」

愛姫は、瑞希の言葉に何度も頷いた。

明羅を失い、希望が崩れる音をきいたばかりの愛姫には、瑞希の気持ちがわかる気がする。世間では、瑞希を自分勝手と責める人がいるかもしれない。本人に責任の無い出生を責める瑞希を、卑怯とか、冷酷だという人もいるかもしれない。

だが、愛姫はそうは思わない。

瑞希の可八を嫌悪する気持ちは、今まで愛姫が可八に抱いてきた気持ちと同じだからだ。

殺人者の娘であることは、可八のせいでない。

だが、可八の存在が母を殺した。

可八の存在が、愛姫の人生を左右した。

可八の存在が、瑞希の将来を台無しにした。

その、事実。

それは抗えない。

だから、憎んでしまう。

それを、責めないで欲しい。

可八の苦しみをわかっていても、なお、責めずにはいられない。

殺人という罪を嫌悪するからこそ、可八を受け入れられず、可八との関わりを拒絶する瑞希を、責められはしない。

瑞希の未来を壊してしまった。
ただ、それだけが事実。
壊れた未来を償うことなどできない。瑞希が将来得られたであろう未来を、作り直すことなどできない。人生に、やり直しはきかない。もし今後別の幸せを見つけたとしても、一度壊された幸せは二度と取り戻せない。
床のきしみが聞こえるほどの静寂が続いた。
瑞希の手から流れていた血は、止まったようだった。
「ご自分を、あまり痛めつけないで下さい。」
「・・・。」
うなだれた瑞希に、他に言う言葉が見つからなかった。よろめきながら膝を立て、愛姫は再び玄関に立った。
額に汗がにじんでいる。
まだ立ち直れない瑞希を見下ろしながら、愛姫は意を決した。自分の弱みを知ってもらうことで、少しは慰めになればと想った。少しでも貶めた自分を見せようと、愛姫は口を開いた。
「私、・・・明羅さんが好きでした。明羅さんが可八を選んだことで、私も苦しみました。でも、それはただの失恋で、瑞希さんのように未来を崩されたわけではないと思うと、自分の苦しみが、甘ったるい感傷だと気づきましたわ・・・。バカみたい、でしょう？」
瑞希は、何も反応しない。
だが、その表情の影の色に、愛姫は最近感じた恐怖を思い出した。可八の自殺未遂の夜に感じた、今、手を離したらそのまま死んでしまうのではないかという不安。それがまざまざと思い起こされ、指先が震えだした。
母を自殺でなくしている愛姫。自殺未遂の人間をつい最近目の当たりにした愛姫。
それは、一生拭えないトラウマだ。
思わず、瑞希のそばに再び膝をついた。
「私よりずっと重い苦しみだとは思います。でも、どうか、どうか

これ以上ご自分を痛めつけないで！」
止まったとはいえ、血で汚れた生々しい瑞希の手を握り締めた。
「ご自分に非の無いことで苦しんで、傷つけるようなことだけはなさらないで。お願いだから、母のようにはならないで！」
瑞希は、驚いて少し顔をあげた。
愛姫が何を懼れているのか、わかった気がした。明羅の書いた記事を見ていて、大体の経緯は知っている。
愛姫も、つらいのだと思った。
兄に失恋して、可八のことで再び心を悩ませて。
可八さえいなければ、普通のお嬢様でいられただろうに。いわれの無い苦しみを味わうことなど、なかっただろうに。
お互いのつらさが身にしみる。
今、どんな思いでいるか。言葉などなくても、理解できる。
握った手を離さず、愛姫は言った。
「瑞希さんは、明羅さんが本当に大事なんですよね。他人の可八を憎んでも、お兄様である明羅さんを憎むことは、できないのでしょう？」
「・・・どうして・・・。」
「だってまだ、明羅さんには言ってないのでしょう？婚約解消のことも、仕事をクビになることも。」
瑞希は、思わず息を呑んだ。
愛姫の濡れた瞳が、切なく揺れている。
握られた手から、愛姫の心の震えが伝わってくる。
「知っていたら、いくら明羅さんでも可八を旅行に連れて行ったりはできないはずだもの・・・！」
「・・・！」
瑞希の呼吸が、一瞬止まったように思う。
と、次の瞬間。
愛姫は、唇に生まれて初めての違和感ある感触を覚えた。
見開いた目の前に、瑞希の長いまつげがある。

それがキスだということに気づくまで、ものすごく長い時間がかかった気がした。
硬い縁甲板張りの狭い廊下に押し倒されたとき、愛姫は瑞希を見ないように、固く目を閉じた。目尻を、覚えの無い液体が濡らしてゆく。
初めてのキスは、心のどこにも、体のどこにも、まったく染みていかなかった。ただ、体の一部に今まで感じたことのない違和感が這っているというだけの冷めた行為。だが、瑞希に触れられることには、不思議と生理的嫌悪を感じなかった。
ただ、必要だったのだと思う。
今まで、独りで背負い、かかえ、必死に辛抱していたものが、今一息に堰を切ったように流れ出したのだ。
もう、独りでは立てない。
もう、一人では抱えきれない。
玄関の頂側窓からそそぐ青白い明かりの中で、愛姫は今までのすべての夜に訣別した。

第１３話

朝は、少しの狂いもなく訪れる。
乱れた前髪の先の金色の光が眩しく、愛姫は思わず目を細めた。
夕べ、どうやって家にもどってきたのか思い出せない。ただ、重い頭をもたげると、一つの記憶だけがまざまざと呼び起こされた。
男を、初めて知った。
自分の体が自分のものでなければいいと思うくらいに、瑞希の感触が全身に残っている。どんなに体を洗っても、振り払おうと思っても、決してかなわないことがあるのだ。
自分が嫌いなとき、自分の肌を見ることもできない。
今日は、自分の肌を見ることもできない。
自分が途轍もなく淫らになったような気がして、生理的嫌悪さえ覚える。
瑞希と寝たことを後悔はしていない。だが、それとこれとは別なのだ。
食事などする気にはならなかった。
唇しか見えない口紅用の手鏡で化粧をすませ、早々に家をでた。
涼しい風を感じながらアスファルトを闊歩しているのに、信号で立ち止まると、途端に体が瑞希を思い出す。はっとして思わず腕をつかむと、その感触が自分のそれとは明らかに違っていたことを自覚する。
瑞希と会ったのは、昨日が二度目だったというのに、今まで出会った誰よりも深い関係を結んでしまった。どんな気持ちだったとしても、どんな状況だったとしても、それが良いことだとは思わない。だが、どうしても瑞希を独りにしたくなかった。その手を離したら、もしかしたら一生後悔するような気さえした。
愛姫は、瑞希を愛していたわけではない。
瑞希が自分のことなど何とも思っていないことも、百も承知だ。

しかし、率直に言えば、愛姫にとってこそ必要な行為だったのだ。
ずっと恐れていた。一生、男を知らずに終わるのではないかと。この歳になっても、とコンプレックスを抱えていた。自分が相当に異常なのかもしれないとさえ思うことがあった。自分は自分と言い聞かせながらも、一生独りはやはり寂しいことだと感じていた。そこへ、夕べ初めてのチャンスがやってきた。これで自分を縛り付けてきた劣等感から解放される。そう、冷静に計算していた。これでもう、一生未体験なんて言わせない。一度があるのとないのでは大きな違いだ。
世間の目に、言ってやりたくなった。
自分は、ちゃんと経験済みなのだと。
男を知っているのだと。
何という悲しいコンプレックス。
何という、さもしい見栄。
でも、軽率だったなんて思わない。
いい。
この先、もう二度と男と関わることがなくても、生きていける。
だが、本当に冷めた行為だった。情熱は、悲しみに占領されていた。
ただ、慰めあうためだけにベッドに入る。それを今までどんなに嫌悪し、軽蔑してきたことだろう。貶していたことだろう。
だが、そうせずにはいられなかった。瑞希の全てが必要だった。誰かに抱きしめられたかった。孤独が募っていた。
しかし、もう二度と瑞希とこうなることは無いだろう。
また、苦しみも悲しみも、自分一人で抱えていかなければならない。
瑞希は、他人だ。例え一度寝たからといって、恋人でもなんでもない。苦しいからといって飛び込んで行ってもいい関係にはならない。
愛姫の身体を、愛姫の意思以上に支配しながら、瑞希は違う世界

を生きていく。
愛姫は、独りの夜を越えていく。

第１４話

日曜の午後、可八が旅行から帰ってきた。夕方だったが、明羅と、そして一緒に取材に行ったという仲間も一緒だった。
どちらにせよ、お世話になった以上挨拶せねばと思っていた愛姫は、全員をリビングに招いた。
この家に父の連れ以外の客が入ったのは初めてだ。それぐらい、愛姫と可八は他人を介入させない生活を送っていた。
大人が五人もそろうと、ソファはスツールまでも埋まり、狭く感じる。
「可八はお仕事の邪魔ではなかったでしょうか。」
擬似麗句でたずねると、四十近いカメラマン風の男は、笑顔で答えた。
「とんでもない。こちらこそ、色々手伝ってもらっちゃって恐縮してますよ。あんまり気が利くので、こっちもつい頼ってしまって。」
すると、可八と同室だとったいう女性記者、間宮早紀子も相槌を打った。
「本当に。せっかくの旅行なのに、全然気の休まる暇もなかったみたいで。かえって申し訳なかったくらい。」
優しい言葉だ。こういうメンバーだから、明羅も安心して可八を誘ったのだろう。
明羅も穏やかな表情で可八を見つめた。
「夜中まで間宮さんと二人、ずっとおしゃべりしてたみたいですよ。」
「そうそう、女ってどうして話題が尽きないのかと不思議になりますよ。望月と二人で、あきれたくらいで。」
すると、早紀子は可八と顔を見合わせ、悪戯っぽく笑った。
「あら、たった三晩でどれほどのことが話せるというの？まだまだ足りないくらいよ。」

この話の様子では、明羅と可八が同じ夜をすごしたことはないようだ。ならば、愛姫は可八との間に決定的な差をつくってしまった。
お茶の葉を入れなおそうと席を立った愛姫を、早紀子が手伝いに追った。
「すみません、お客様に。」
「いいえ、こちらこそ急にお邪魔してごめんなさいね。」
「とんでもない。可八がお世話になったお礼を申し上げねばと思っていたので、こちらこそ調度良かったと感謝してます。」
早紀子は、きれいに整えられた眉で微笑んだ。
「私、望月さんの記事を読んでいますので大体のことは承知しているつもりでした。でも、可八さんとお話していて、記事とひとつだけ違うことを見つけましたわ。」
「・・・違うこと？」
「ええ。橋田さんは、本当に大事に可八さんをお育てになったのだということです。記事で橋田さんは『自分に災いが及ばないため』みたいなことをおっしゃっていましたが、そんなことはないと思います。」
「・・・。」
「ごめんなさい、生意気なことを言って。あなたより二つ年上だということで、それは許して。でもね、幸い両親に大事に育てられた私は、可八さんと話をしていて、それを痛感したんです。」
「可八が話さない真実はたくさんあります。」
「ええ、色々あったのでしょう。でも、それはどんな家庭にでもあること。愛し合う家族だって憎みあうこともあるし、喧嘩もするし、傷つけあうこともあります。でも、必ず元に戻るのは、普段から培った絆があるからです。お二人にもその絆・・・感じました。」
手際よく、早紀子は洗ったポットに茶葉を入れた。
「例えあなたが否定しても、あなたは立派に可八さんの保護者だわ。」
「・・・。」

「お二人は、二人だけの家庭を作り上げているでしょう。でも、その狭い世界は自立には邪魔になることがあるのよ。可八さんは、あなたと別れることをひどく恐れています。」
もしかしたら、明羅も同じことを感じていたのかもしれない。だからその濃い関係に風穴を開けるため、今回の旅行を提案し、早紀子のようなアドバイザーをつけたのかもしれない。
「また、可八の・・・話を聞いてやって下さいませんか。あの子、友達がいないんです。あなたのような方がいらっしゃると、心強いと思います。」
「私でよければ、いくらでも。」
「すみません、お仕事も忙しいでしょうに。」
「大丈夫。私、パラサイトシングルですから。」
「独身・・・ですか。」
「ええ。」
信じられなかった。早紀子のようにさばけていて、でも女らしい穏やかな色気がある女性なら、引く手数多だろうに。
「意外？」
愛姫の表情からすべてを察したように、早紀子は笑った。
「・・・ええ。」
「結婚してない女って何らかの欠陥があるみたいに言われるのは心外だわ。もちろん、人間だから欠点もあるけど。でも結婚ってそんな簡単なものではないでしょう？そもそも出会えるかどうかから問題ね。好きイコール結婚なんて、あまりにも単純すぎるって知ってしまったし。」
「私、結婚に至るまでは、少なくとも十の関門があると思ってます。」
「真理ね。同感だわ。」
心から思った男は、可八のものだ。世界で一番知っている男は、一生遠い存在だ。この先の人生で、これ以上の出会いを期待はできない。未来に裏切られるのが怖いから、もう、何も期待はしない。

「望月さんと藤木さんの間にも、まだ関門が残っているみたいね。」
早紀子の何気ない言葉が、愛姫をどきりとさせた。
そう、その関門こそが瑞希だからだ。そして、瑞希を思い出すと、あの夜のことだけが思い出される。瑞希の肌の感触が、全身を走り抜ける。
苦い、しかし、心を騒がす、疼き。
自分の中の「女」を強烈に感じる。今更ながら目覚めてしまった女の性。
客が去った後、可八が後片付けをすると言ったが、疲れているのだから先に休むよう諭した。
穏やかな余裕は、もう未経験の女だと嘲笑される心配がなくなったから。
時に暴れだす気持ちは、今まで知らなかった自分が目覚めてしまったから。
二人の女が自分に同居している。
それをコントロールできなくなったら・・・。
それは、新しい自我への不安だった。

第１５話

次の日の帰りだった。
勤務先の事務所を出て時計を見ると、もう九時をまわっている。電車の時間も気になり、とにかく急ごうと足早に駅へ向かった。と、そのとき。
突然、後ろから肩をつかまれた。
息も止まるほど驚いてふりむき、暗い夜の闇に浮かび上がった姿に、さらに息を呑んだ。
「すみません、どうしても話をしたくて、待っていました。」
思いがけない瑞希の出現に、愛姫の心臓はこれ以上ないほど高鳴った。
どうしよう。
まともに顔を見ることなどできない。
「少し時間、いいですか。」
「ずっと、待っていらしたんですか。」
「・・・直接、話がしたかったので。」
どうしてか、唇が震えている。目の前の白いシャツがこんなにも心を乱す。
人通りのめっきり少なくなったオフィス街の裏通りの歩道。愛姫は顔を横へ背けたまま、鞄の取っ手をぎゅっと握り締めた。
「この間は、すみませんでした。」
瑞希の穏やかな声が、上から聞こえた。
「・・・どうして、謝るんですか。」
「それは―。」
「謝る必要なんてありません。同意の上・・・なのですから。」
瑞希の体が、愛姫のほうへ一歩近づいた。顔を上げれば、すぐそこにいそうなほど、近い。
「すみませんでした、本当に。」

「ですから、どうして、―　」
「初めてとは、思わなくて。」
「・・・・・。」
「傷つけてしまいました、体も、心も。」
「・・・・・。」
「本当に、すまないことをしました。どうやっても取り返しがつかないけれど、」
「そうです、つきません。」
愛姫は、そのとき初めて瑞希を直視した。まっすぐ見上げて、口を開いた。
「でも、それは私が望んだことです。ですから、謝る必要なんてありません。」
「しかし、」
「心がなかったのはお互い様です。私にも、瑞希さんにも、弱みも強みもないのですから。」
瑞希に見つめられるのはたまらない。自分のすべてを知っている唯一の男だ。
そして、自分も知っている。瑞希の―　すべてを。
だが、瑞希は他人だ。
なんとなく親しい、少なくとも他人でないとさえ思ってしまうが、間違いなく他人なのだ。　体を許しても、心を許したわけではない。あの一夜で二人の関係が何か変わったわけではない。だから、悲しいことがあったからといって、いつでもその胸にとびこんでもいい相手でも、なんでもない。
「・・・失礼します。」
そういい残し、愛姫は踵を返した。
瑞希が追ってくる様子は無かった。
そうだろう、あれ以上話すことなどない。
もう、二度と求めてはいけない。
瑞希は、恋人でも何でもないのだから。

寂しくても、悲しくても、自分を迎え入れてくれる男ではないのだから。
独りには、何らかわらないのだから。
変わったことは一つだけ。
自分が男を知っている女になったということ。
ただ、それだけなのだから。

第１６話

十二月になった。
街にはクリスマスムードが漂い、師走の忙しさを感じさせる。
瑞希は行くところがないはずだが、どうしているのだろう。明羅には、もう、すべてを打ち明けたのだろうか。
空気が冷たく愛姫の頬を刺す。一日過ぎるごとに、瑞希の感触が薄くなっていくのを実感する。
なんとなく、すべてが有耶無耶だ。明羅と可八のことも、瑞希のことも。そして自分のことも。
明日に希望が無く、目標が無いという状況は虚しい。
二十年後にも弁護士をしているなんて、信じられないことだ。まったく想像できない。だが、何となく四十になり、五十になり、気づいたら六十だったなんてことは避けたい。
愛姫は、温かい陽気より、寒い冷気のほうが清清しくて好きだ。
その日のランチは、テイクアウトのスープとブリーチーズサンドを手に、久々に日比谷公園に向かった。
軽やかな足取りの先に、愛しい横顔があった。
その横顔は、ワープロに向かっている。今までは、決して自分から声をかけることはできなかった。だが、今日はあえて隣に座ることを決意した。
「こんにちは。」
「・・・ああ、お久しぶりですね。」
明羅はまぶしそうに目を細め、ワープロを打つ手を止めた。
「しばらく、公園のほうへはいらっしゃいませんでしたね。」
「ええ、何かと忙しくて。」
「僕はあなたに教えられてからは、時々来ていました。人気の無い公園って、結構いいものですね。」
「・・・そうですね。わかります。」

以前よりも緊張しないで会話ができる。前よりも、意識しなくなったということだろうか。明羅を忘れてかけている証拠か。
「・・・あの、弟さん、どうなさってますか。」
「えっ？」
「可八から、聞いたんです。その、あまり結婚に賛成していない、みたいな。」
「ええ・・・。そうですね、何となく平行線です。それに、最近は朝早く出て学校から帰ってくるのは夜中。僕もそんなに家にいるわけではないので、週末くらいしか顔をあわせないんです。」
瑞希は、まだ何も明羅に言っていないのだろう。いや、明羅が身内の話など愛姫にはしたくないだけなのかもしれない。
愛姫は言った。
「あなたのお気持ちは、弟さんがなんと言おうと、変わらないのですね。」
「変わりません。何があっても。」
「それは、瑞希さんという弟よりも、可八という他人をとるということなんでしょうか。」
明羅の視線が、愛姫に注がれた。
「なぜ、そうなりますか。」
「そう、なりませんか。」
「少なくとも僕の中にそういう感覚はありません。瑞希と藤木さんとは、比べられるものではありません。」
「でも、瑞希さんの反対を押し切るわけですよね。」
「それは、瑞希をないがしろにすることでも、捨てることでもないんです。」
「明羅さんがそう思ってらしても、瑞希さんは苦しみますわ。その苦しみに、望月さんはどう対応するつもりなんです？」
明羅の目は、不思議そうに愛姫を見つめた。
「苦しむ・・・？何にです？」
愛姫は口を閉ざした。

明羅は、本当に何も知らないのだろうか。それとも、知っていて尚、そう言うのだろうか。
余計なことは言えない。下手をすれば、瑞希の気遣いをすべて無にしてしまう。
愛姫は何とか話をうまくそらせようと考えた。
「それは・・・可八の血に、です。殺人犯の血が望月の家に関わることで、一生、苦しむかもしれないでしょう。」
明羅の目が、怪訝にゆがんだ。
「殺人犯の娘が、その血ゆえに罪を繰り返すというのですか。」
「いいえ、例え清廉潔白な聖女であったとしても、その血を継ぐという避けられない事実が、瑞希さんにとっての問題だということです。」
明羅に、こんなことを言うつもりはなかった。明羅を責めるつもりはない。だが、瑞希の気持ちが表にでることなく押し込められてしまうのは、たまらない。
身体の繋がりで、心まで奪われたか。
いや、そんなことではない。
「弟と、・・・そういうことで毎晩言い合いました。橋田さんまで、同じようなことをおっしゃるとは思いませんでした。」
「結婚は、家と家の繋がりです。家族の賛成を得られない結婚は、不幸です。瑞希さんの同意を得られないまま可八が嫁いでも、幸せにはなれません。瑞希さんだって、幸せにはなれません。あなたが、・・・いくら理路整然としていらしたとしても、解決しないこともあるのです。」
「では、結婚をやめろと？」
「いいえ。瑞希さんのお気持ちを確認なさってから、踏み出して欲しいということです。」
「・・・いつか、わかるはずです。結婚して、幸せな家庭を築きます。その様子を見れば、弟も許してくれると思います。」
瑞希の結婚は、駄目になった。それはどうするのか。もう、もと

には戻るまい。それは、罪ではないのか。
「犯罪者の家族が世間から冷たくあしらわれるのは、必ずしも非難できることではありません。そういう目こそ、犯罪の抑止力となるからです。犯罪者の血を許さない家は、たくさんあります。いい加減でないお家ほど、そうだと思います。」
「犯罪者の家族を、十派一からげで語らないで下さい。」
「私がそうでなくとも、世間が許さないんです。望月さんが世間の目を厭わないとしても、望月さんの家族がそれに耐えられなければ、意味がないんです。」
言ってしまいたい。
瑞希のこと。瑞希の苦しみ。
それは、仕方の無いこととでもいうのか。
明羅は、可八の見方だとしたら頼もしい。だが、瑞希側から見れば、独りよがりの頑固者だ。
「いわれなき差別に満ちた世間など、こちらからお断りです・・・！」
愛姫は、唇を噛んだ。
明羅の誠実さが、今はうらめしい。
自分を、愛してくれてさえいれば。
瑞希が幸せだった。誰も、傷つかないはずだ。可八が、明羅を好きでさえなければ。
「望月さん、いわれなき差別だからこそ、不幸なんですよ。理不尽な不幸だから、苦しむんです。可八も、・・・瑞希さんも。」
愛姫は、これ以上何か言われたら、瑞希のことを明羅に全て話してしまうと思った。
だから、スッと席を立った。
「私・・・、望月さんが可八を選んでくださって嬉しいんです。あんなに幸せそうな可八を、私はこれまでに見たことはありませんでした。可八は、心から望月さんを信頼しています。望月さんなら、可八を絶対的な力で守って下さるでしょう。私も、望月さんを信じ

ています。理不尽な不幸も、きっと、あなたは吹き飛ばして、幸せにしてしまうのでしょうね。でも、」
愛姫は、足を一歩、踏み出した。
「その幸せが、独りよがりなものにならないことを祈ります・・・！」
ザッと踏みしめた砂利が、パンプスを通して愛姫の足の裏を刺激した。
明羅は本当に知らないのだろうか。
瑞希の苦しみを、悔しさを。
今、どれほどに傷が癒えたかわからないが、一ヶ月前のあの時、確かに傷ついていた。やり場が無く、喘いでいた。それは、自分が一番わかっている、と思う。男の人があれほどつらい表情をしたのを、初めて見た。男の睫毛が震えるのを、初めて見た。
明羅を想う気もちが、瑞希を憂う気持ちにかわっている。
どうしているのだろう。
瑞希は、乗り越えられたのだろうか。
一度謝りにきたとき、あんな風に邪険にしないで、もっと話をしてやればよかったろうか。もっと優しく、接すればよかったろうか。だが、あの時は気恥ずかしさの方が優先していた。自分を防御することしか頭になかった。
足の速度を緩めた。
自己嫌悪だ。
だが、今、瑞希に何をしてやれるというのだろう。なぐさめの言葉など、起こってしまった事実には何にもならない。そばにいて抱きしめてやるような間柄でもない。だが、あの一夜で瑞希を他人とは思えなくなってしまった。しかし、確実に他人なのだ。それをわかっていながら、もう、瑞希が自分の一部になったような気がしてならない。
可八の微笑みの裏には、必ず明羅の幸せがある。
だから、つらい。

瑞希に関わりたくても、関わるいわれも術もないから、それがもどかしい。
瑞希の恋人だったら。
そしたら、ずっとずっと気の済むまで抱いて一緒に泣くのに。
瑞希からの連絡は無い。当然だが、何となく寂しいと思う。気になって気をもんでいるのが自分だけなのかと思うと、情けなくなったりもする。
年が明け、可八は愛姫に指輪を見せた。
プラチナ台に輝くルビー一粒。婚約指輪だった。
「結婚、・・・決まったのね。」
そう言うと、可八は少し困惑した表情を見せた。
「瑞希さんは・・・了承なさってないらしいんですけど。」
「そう。でも、可八の気持ちは固まったのね。」
「・・・はい。」
まっすぐ未来を見据える可八の瞳には、輝きがある。
自殺しかけたとき、結婚を後押ししたのは自分だ。あのまま反対などしたら、間違いなく可八は崩壊したと思う。だから、後悔などしない。
気になるのは、瑞希。
平行線をたどる一方だった事態に、明羅はついに終止符を打つことを決意したのだ。二人の決意に、何も言うことはない。あんなに泣いて騒いだ明羅への恋も、今は静かに凪いでいる。
忘れるきっかけが瑞希との夜だったといわれても、否定はできない。時間は確実に、その気持ちを溶かしていった。時間は、いつも公平で誰にでも味方になる。敵にもなりうるが、それらはすべて、自分の心の持ち様にかかっていて、時間自体は常に公平で冷静だ。
形式ばった披露宴はしないらしい。
だが、結婚式だけはさせてやりたいと思う。住むところはどうするつもりだろう。明羅が今のマンションを出るのか、それとも瑞希が出るのか。

可八は、早ければ四月に小さな教会で式を挙げたいと言っていた。
身寄りの無い可八と、周囲の反対を受けている明羅。にぎやかな式にはならないだろう。それは、悲しいことだ。せめて瑞希だけでも参列してくれれば、心強いだろうに。
愛姫は、もう、可八との生活が残りわずかだと思うと、複雑な気分になった。独りになりたいという気持ちが強かったのに、寂しさがこみ上げる。
（一生可八と一緒だなんてごめんだ・・・って思ってたんだし、淋しいなんて、ないものねだりだ。）
ため息をつくと、自分が独りだということにはっとする。そしてまた、それが今更なことではないと、力なく笑う。
一生、一人でも大丈夫なように心の準備をしている。あと何十年あるかしれない未来は、何と色褪せて希望がないのだろう。仕事に今以上のどんな向上を目指せばいいのだろう。
仕事と、趣味と、お金と、男と、これ以外に何か望めるものはないのか。活力の無い、生きる張り合いのない日々が続く。
しかし、こんな悩みを抱いている日々こそが、実は嵐の前の静けさだったのかもしれない。

第17話

身体が重く、頭が痛いことなどめずらしくない。顔色が悪いこともままある。

しかし、今回は少し事情が違っていた。

その違いに、愛姫の脳裏にはふと一つの考えが浮かんだ。が、あまりの突拍子の無さに自嘲して忘れることにした。

ところが、一週間たち、二週間たち、三週間目に入った頃、さすがの愛姫も心臓の大きくなる音を感じずにはいられなかった。

今までなら、日常生活に支障が無いからとほうっておく。だが、今回ばかりはそんな悠長なことは言っていられない。

一月の下旬。

愛姫は、自分が妊娠していることを確信した。

瑞希との夜から三ヶ月。

周りの目を気にしてなどいられる場合ではなく、思い切って妊娠検査薬を買った。

陽性の反応がでる。

（どうしたら・・・？）

飛び出しそうなほど高鳴る心臓に、口を押さえながら愛姫は目を瞑った。吐き気がする。それは、自分への嫌悪だ。

思わず押さえた下腹部が、命を確信させる。

愛してもいない男との間に子を妊娠する。

それを、いままでどれほど嫌悪していたことか。

そんな種類の女を、どれほど蔑んできたか。

妊娠したと告げる未婚の女。うろたえる男。滑稽だった。鼻の先であしらってきた。万が一自分がそんなことになったら、男に告げることなく、潔く自分ひとりでけりをつけるつもりだった。しかし。

いざとなると、何もできない。

まだ人の形をしてもいない子が、必死に自分の身体にしがみつい

ているようで、振り払うことがためらわれる。
潔く？
命を絶つことに、何が「潔い」だ。
この問題は、時間が水で流してくれるような類のものではない。放っておけばどんどん大きくなり、取り返しがつかなくなる。「命」、とはそういうものだ。
中絶という行為が、自分のような勝手な女のために許されているのではないということを、弁護士の愛姫は嫌というほどわかっている。どれほどに重い、責任ある行為なのか、いつも自分に言い聞かせてきた。その辺の女の浅はかさに、何百回と悪態をついていた。
自分は、違うと。
自分だけは、決してそんなことになるまいと思っていたのに。
音がするくらいに唇を噛んだ。
自分の責任は、自分でとらねばならない。

可八は、愛姫の様子の変化に気がついていた。
今まで、朝食をとらないこともざらだったというのに、最近は何かを必ず口にする。いいことだとは思うが、それが逆に不自然にも思えるのだ。仕方なく食べている、口に入れているという感じがする。食べているわりには顔色が悪いし、全身がだるそうだ。可八は心配になって、夕食の時にきいてみた。
「どこか、具合が悪いんじゃないんですか。」
「そんなことないわ。」
食べ物を箸でつつき、弄ぶようにして愛姫は適当に答えた。
「お仕事が忙しいんですか。」
「ええ。・・・そんなことより、可八は自分の結婚式の心配でもすれば。」
そう言い捨て、席をたった。
愛姫は、どうでもいいような他愛のないことは可八によく話すし、愚痴も言う。だが、重大なことや肝心なことは絶対に口にしない。

相談したこともない。
可八にとって愛姫は、赤の他人である自分を二十年も存在させてくれた恩人だ。愛姫と出会えなかったら、自分は存在していないと思っている。身を崩しているか、精神異常になるか、死んでいただろう。その恩にどうしたら報いることができるだろうか。
わからない。
明羅という分不相応な婚約者を得て、叫びたいほど幸せだというのに、その片隅で愛姫のことが気にかかる。可八は愛姫と別れたくないのだ。叶うものなら、ずっと一緒にいたい。
明羅との生活に期待を寄せながらも、愛姫との生活も捨てがたいのだ。愛姫と一緒に暮らさなくなれば、もう赤の他人だ。今だって他人なのに、今度は「次」のない他人になってしまう。街ですれちがって無視されたとしても、仕方の無いほどの他人に。
いつ、その手を振りほどかれるか、ずっと不安だった。今でも、それは変わらない。
自分が、愛姫の人生をどれほど乱れさせたか。
よく、一緒にいてくれたと思う。
結婚して別れる前に、一度くらい役に立ちたい。可八と一緒でよかったと、一瞬でいいからそう思ってもらいたい。愛姫が悩みを打ち明けてくれたら、どんなことだってする。一晩中、うらみごとを聞いたっていい。
愛姫を、尊敬している。
だが、愛姫は自分を好いてはいないだろう。時々感じる、愛姫の冷ややかなまなざし。それが可八の心を凍らせる。
（やはり、私は殺人犯の娘にすぎないのだ。）
そう、思い知らされる瞬間が、何度もある。だが、それでも生きていこうと思えたのは、愛姫の時々見せる優しさがあったから。ぶっきら棒に差し出す手があったから。
夜。
何気なく目を覚ました可八は、何かの物音を感じ、ベッドから出

た。
明かりのついている方向へ行くと、洗面台の下に愛姫が崩れるように座り込んでいる。
「愛姫さん・・・！」
あわててかけよると、真っ青な顔で愛姫は叫んだ。
「独りにしておいて。放っといてよ！」
「でも、」
「私にかまわないで、頼むから・・・！」
涙声が、可八の言葉をさえぎった。可八は何も言えず、自室に戻る。
愛姫はどうしてしまったのか、わからない。
愛姫は病気だと思う。だが、病院へ行くそぶりが無い。
心配だ。もし、このまま放っておいて死んでしまったとしたら。
愛姫の意にはいつも逆らえない。だが。

第１８話

朝、駅へ向かう途中、愛姫は突如腹痛を覚えた。
そして、吐き気はないものの気分が悪く、太腿の筋肉に力が入らず、引きずるようにしか歩けなくなった。
そのうち、脂汗とも冷や汗ともつかないものが額と背中から噴出してきた。
駅のトイレの広い個室に入り、便器に腰掛けたまま、症状が落ち着くのを待とうと思った。　腰から太腿にかけての関節が痛いため、足を伸ばしてみたり、少しでも楽になる方法を考えた。だんだん息が荒くなり、冷たい壁に身体をもたれかけさせないではいられなくなった。
立てないほどに辛い中で、このまま流産でもしてしまえばいいと思った。そうすれば、何のあとくされも無く、すべてが解決する。楽になれる。自然の流産なら、罪悪感も無くてすむのではないか。
時計を見、出勤にまだ余裕があることを確認する。このまま動けなくなることも、意識を失うようなことはないだろう。
汗で濡れたキャミソールが肌にへばりついている。放っておくと、風邪をひくかもしれない。
二十分が経過した。そろそろ行かないと仕事に遅刻する。しかし、立ち上がった途端に気分が悪くなり、また座り込んでしまった。
横になりたい。
このまま、冷たいタイルの上でもいいから、身体を楽にしたい。
（大丈夫。もう少し休んでいれば・・・。）
とうとう四十分が経過してしまった。
事務所へ遅刻の電話をかけた。
トイレの個室で電話をするなど、周りの人から見たら奇妙だろう。もしかしたら、「大丈夫ですか。」などと声をかけられるかもしれない。だが、ここで休んでいることを他人になど知られたくなかっ

た。知られたくないし、詮索もされたくない。絶対、放っておいてほしい。
だが、本当にこのままだったらどうすればいいだろう。這ってでも家へ戻らねばならない。　タクシーでも拾うか。だが、そこまで行くことさえもが、今はできそうにない。
可八に助けを求めるか。
いや、そんなことをしたら、病院へ直行されてしまう。
父に助けてもらうのも御免だ。
では、誰に・・・？
瑞希なのか。
いや、駄目だ。
瑞希は他人だ。他愛ない話もできないほどの他人だ。
なのに、そんな相手との間に子どもを作ってしまった。
（泣いてるのだろうか。こんな私に消されてしまう命が、必死に訴えているのか。それとも、罰があたったか。）
それも致し方ない。自業自得だ。
（でも、産めない。産めるわけがない。）
産めば、絶対瑞希に気付かれる。隠し子みたいな存在は、ステイタスや世間体を重んじる瑞希には人生最大の障害となるだろう。
例え相談しても、絶対産めとは言わないはずだ。きっと、だまって金を差し出す。女慣れしていると聞いている。もしかしたら、こんなことは初めてでないかもしれない。
男は残酷だ。
女を抱いた手で、堕胎のための金を握る。それで、すべての責任を果たしたような顔をする。殆どの男は、堕胎の方法など知らないくせに。かろうじてヒトになった頭をはさみで打ち砕くところを、想像だにしたことなどないくせに。
やはり、言わない。
一人でかたをつける。
つけてみせる。

愛姫はその日、仕事を休んだ。幸い押し迫った仕事はなかった。
だが、ベッドで寝ているところを、帰宅した可八に見られてしまった
しきりに病院へいこうと言う。無理やり救急車を呼びかねない勢いで、可八は愛姫を嗜めた。
「重い病気だったらどうするんです？絶対、もう駄目ですよ！」
そのとき、リビングから電話の呼び出し音が鳴っているのが聞こえた。可八が部屋を出て行く。
相手は、明羅だった。可八は優しい恋人の声に、思わずすがりついた。
「愛姫さんが、ずっと、具合が悪いんです。なのに、薬も飲まないし、病院へもいかないで放っておくんです。今日なんて、お仕事お休みしたんですよ？体調不良でも、熱があっても、絶対お休みなんてしない方なのに。」
『風邪か？』
「いいえ、そうではないようです。ただ、とにかく気分が悪そうで、顔色が悪くて。あまり食べられないんです。以前はお好きだったものまで食べられなくなってしまって。」
明羅は一通り話を聞き、とにかく今日一晩様子を見て、明日も立てない様なら往診してくれる医者を探すように、と言うほかなかった。そして、一人で手に負えないようならいつでも力になる、と添えて。
愛姫の名が電話口の明羅の口から出たとたん、瑞希は思わず息を殺して話に聞き入った。
気にならないわけがない。
あんな別れ方をして、後悔は一層つのった。
愛姫の言葉はどんな蔑みよりも堪えた。
電話を終えた明羅に、瑞希は尋ねた。
「橋田さん、どうかしたのか。」

「ああ、ここしばらくずっと具合が悪いらしい。今日は仕事を休んだそうだ。」
「・・・風邪？」
「いや、よくわからない。とにかく食べられないそうだ。夜もあまり眠れなかったりするみたいだ。」
瑞希の心臓は、勝手に大きく高鳴った。
それは、本能が感じ取った勘のせいだろう。
まさかと思う。だから、口にして楽になってしまおうと思った。
「それって、妊娠でもしてるんじゃないのか。」
すると、明羅の目が厳しく光った。
「冗談でも言っていいことと悪いことがあるぞ、瑞希。」
「・・・ごめん。」
「橋田さんは、分別のある真面目な人だ。会ったことがないお前には、わからないかもしれないがな。」
「・・・。」
長い前髪の奥で、瑞希は眉をひそめた。
（冗談じゃないんだよ、兄貴・・。）
頬の筋肉が、苦々しく引きつる。
（会ったことはあるんだよ、会って・・・。）
妊娠している可能性は十分にある。
あの夜、瑞希に理性はなかった。
愛姫がどんな女かなど知る余地もなかった。
だから抱けたのだ。
自分が兄を思って苦境を言えずにいたことを、何も語らずしてわかってくれた愛姫に心が動いたというだけで。
謝りに行ったとき、自分を責めてくれれば「そっちにも非がある」と開き直れたのに、「自分から望んだ」と言われれば、それ以上何も言えない。
確かめなければと思った。
その病の、真の原因を確認しなければ。

瑞希は、再び愛姫に会う決心をした。

第１９話

次の朝。明羅と可八の電話での会話から、瑞希は愛姫が出勤したことを知った。
この間と同じように、帰りを待ち伏せするしかないだろう。
マンションには可八がいる。可八に聞かれたくはないし、第一、会いたくもない。
仕事を失くし、いくつかの学校の講師をかけもちしている瑞希に時間はある。退社予定時刻より早めに愛姫の事務所のあるビルの前にたどりついた。いくら待ってもいい。とにかく、会って話をしなければならない。
愛姫が出てきたのは、五時を少しまわった頃だった。
かなり早い。やはり、まだ身体が本調子ではないのか。
黒いコートが、心なしか浮いて見える。一回り痩せたように見えるのは服のせいだけではないだろう。冷たい風を切って足早に行き過ぎる愛姫を、瑞希は後ろからつかまえた。
つかんだ肩が細い。
愛姫は、驚いた様子だったが、それを表情に出すのもつらそうに無表情だった。
「話・・・、させてください。」
愛姫は蒼い顔で目を伏せた。
「すみません、具合が悪いので、また今度に。」
「じゃあ、病院へ行きましょう。タクシーをひろいますから。」
「医者は嫌いです。どうかかまわないで。」
先に立って歩き出した愛姫を、瑞希は追った。
「待ってください！」
瑞希が力いっぱい愛姫の腕を引き寄せた。力の無い愛姫は、そのまま瑞希の胸の中に崩れ込んだ。
「医者へ行きましょう。」

愛姫は、子どもが駄々をこねるように瑞希の腕の中でもがいた。
「俺は、今日、なんとしてもあなたを医者に診せるつもりです。」
「そんな権利、あなたにはないわ！」
熱い息を吐き出すように、叫ぶ。
「そう、言い切れますか？」
挑戦的な物言いで、瑞希は愛姫を軽々と抱き上げると、大通りへ向かって歩き出した。
見上げた瑞希の横顔は真剣で、その腕はあまりにも力強かった。
愛姫は胸に疼きを覚え、しかし、その甘苦さも痛感した。
このまま瑞希にしがみついてしまおうか。
そうしたら、きっと楽になれる。独りで苦しまなくてもいい。
だが、ここでそれを許してはいけないと、愛姫は自分の心にムチ打った。
駄目だ、知られてはいけない。
「お願い、降ろしてください・・！」
「駄目です。」
「いやなんです、どうしても。」
「ご自分の身体を、何だと思っているんです？」
「そうです、私の体です。だから、瑞希さんには関係がありません。」
「・・・・そのお腹にいる子は、俺の子ですよ？」
「！」
瑞希が立ち止まり、二人の視線が重なった。
音がしそうなほど、激しい視線。
愛姫は、瑞希がすべてを察してしまっているのだと悟った。
そう、知っているから、わざわざ尋ねてきたのだ。
そして、その事実を確認しようというのだ。
だが、その先は？
それは、ひとつだ。
瑞希は、愛姫の目がすべてを語っていると確信した。

そうか、やはり妊娠している。
アフターファイブの新橋に、人が溢れ始めた。家路を急ぎながらも向けてしまう好奇の目も、今の二人には問題ではない。
愛姫は言った。
「子どもって、何のことです？」
「えっ、」
「何か、思い違いをしてらっしゃいます。」
愛姫は自分のためなら、どんな嘘でも冷静につける。それが自分の醜く、厭らしい本性だと知っている。
瑞希は、ゆるぎない愛姫の目を見つめながら、気をとりなおした。
「それは、病院に行けば、はっきりすることですよね。」
「そんな必要、ありません。」
「あなたの体と顔色だけで、十分その必要はありますよ。」
瑞希は再び歩き出した。
このまま医者へ行かれたら、一貫の終わりだ。早く瑞希から離れなければと、愛姫は苦し紛れに言った。
「降ろしてください、私・・・瑞希さんに触られるの、怖いんです。」
瑞希の肩が一瞬硬直したようだったが、再び表情を固く引き締めていた。
「何と言われても、俺はあなたを病院へつれていきます。タクシーがつかまらなかったとしても、歩いてでも、絶対につれていく。」
愛姫は仕方なく、つま先を軽く振った。黒のパンプスが、コロンとアスファルトに落ちる。
「瑞希さん、靴が・・・。」
「靴なんか、あとでいくらでも弁償します。」
「あの靴がいいんです、あれでないと駄目なんです！」
瑞希は、軽くため息をつき、そっと愛姫を地面に下ろした。そして自ら道を戻り、靴を拾ってくると、すばやく愛姫の下に跪き、それを履かせた。

「ありがとう・・ございます。」
都会の空がラベンダーからネイビーブルーへと染め変えられいく。
そして、ビルの明かりが浮かび上がってくる。信号の赤も輝きだした。
「私は、大丈夫ですから。ご心配なく。」
「病気でないなら、なぜ具合が悪そうにしている？変でしょう。」
「瑞希さんには関係ないことです。放っておいてください。」
「ならば、関係ないことを証明してください、病院で！」
「そんな必要ないわ！」
愛姫は一歩、そしてまた一歩、後ずさる。
ここで負けてはいけない。
そして、一刻も早く処分しなければならない、子どもを。
そして何もなかったように、日常を取り戻さなければ。
背を向け、立ち去ろうと思った。
と、その瞬間。
愛姫の下腹部に、ものすごい激痛が走った。思わずそこを押さえ、顔をゆがめる。
（だめ、耐えて歩かなければ。でなきゃ、わかってしまう。）
愛姫は下唇をギュッと噛み、前を見据えた。だが、あまりの気分の悪さに、立つのもつらくなっている。
（このくらいで死んだりしない。だから、しっかりするのよ！）
自分を叱責しながらも、額に噴出す汗を感じる。
急に動かなくなった愛姫に不振を抱いた瑞希は、再び愛姫の肩に手をかけた。
愛姫は、筋肉が吊るような下腹の痛みをこらえながら、言い放った。
「瑞希さんが心配なのは、どうせ私の体ではなくて、妊娠したかどうかということでしょう？」
「・・・確かに、それが一番気がかりです。でも、」
「どうぞ安心なさって。私、妊娠なんてしていませんから。」

「橋田さん、俺は、」
「例え妊娠していたとしても、瑞希さんにできることなんて何もありませんし。」
まだ、痛くて歩き出せそうにない。油とも冷や汗ともつかないが、額と背から滲み出すのがわかる。
「そんなことはありません。とるべき責任はとります。」
その言葉は、愛姫の神経を逆撫でした。肩越しに振り返り、愛姫は嘲笑った。
「責任って何ですか。中絶のお金を払うことですか、それとも結婚することですか。」
「・・・・・それは、」
「男の言う責任なんて、その二つに一つしかないじゃないですか？笑わせないで、そんなの責任なんかじゃないわ！」
日比谷公園の寒々しい針葉樹が、風でザワザワと音をたてた。
愛姫は、瑞希をにらみつけた。眼球に力を入れることで、痛みを分散しようとするかのように。
「女の体には一生跡が残るんです。責任をとるなんて言ったって、その跡は消せないんですよ、例え神にだって！その肝心なことができないくせに、責任だなんて偉そうに言わないで下さい！」
「・・あなたの気が少しでも済むようにしてください。過ちなんて言葉ですまされるとは、毛頭思っていませんから。」
「・・・・別に、妊娠しているわけではないんですから、いいんですけど。」
瑞希は、その言葉に嘘を感じた。
さっきの愛姫の怒りは、本物だった。妊娠したからこそ口をついて出た言葉だと思った。しかし、愛姫が言わないと決めたことなら、死んでも口を割らないように思える。
愛姫は、そのまま歩き出した。
が。
突如、歩道の真ん中に愛姫の体が崩れ落ちた。

ひざが崩れ、上半身がそれに伴って宙に舞った。
「橋田さん？」
瑞希が慌てて駆け寄ったときには、愛姫の目は固く閉じられていた。
「橋田さん・・・・、橋田さん！」
抱き起こして上半身を揺すったが、愛姫の反応はない。
この只ならぬ有様に、周囲の人々が立ち止まり始めた。
「救急車を呼びますね！」
中年のサラリーマンが、そう言って携帯をとりだしている。
意識のない愛姫の青い額に頬を寄せて、瑞希はしきりに奥歯を噛んでいた。
愛姫をこんなふうにしてしまったのは自分だ。妊娠しているかどうかが問題ではない。自分が犯した過ちの結果が、これだ。
自分を被害者だと思っていた。
すべて自分だけが背負っているような気になっていた。しかし、本当は違う。
二十年もの間、一から十まで背負ってきたのは、愛姫自身なのだ。
救急車が来るまで、そして病院に着くまで、それはひどく長い時間に思えた。
瑞希には、誰の声も、誰の顔も眼中になかった。
ただただ、愛姫の苦悩を思い、自分の被害者意識を悔いていた。

第２０話

病院の処置室に愛姫が運ばれてからほどなく、一人の医師が出てきた。
「患者のお身内の方にお話をしたいのですが。」
瑞希は一瞬言いよどんだが、ここへ他の人間を呼ぶわけにはいかない。愛姫は妊娠の事実を誰かに知られるのを嫌がるだろう。妊娠に関わった自分以外、ここには呼べない。
「私は、・・・彼女の婚約者ですが。」
医者の表情が少し緊迫した。
「では、患者が妊娠していることは・・・？」
「無論、知っています。私の子です。」
「衰弱が激しく、このままでは母子ともに危険です。残念ながら、流産せざるを得ません。」
「今後に、影響はありませんか。」
「ないように、全力を尽くします。」
「・・・では、お願いします。」
「しばらく、入院が必要ですから、そのつもりでいてください。」
医師が処置室に戻り、瑞希は廊下の待合いすに崩れるように腰を下ろした。
これから、どうすべきか。
まず、可八には知らせねばならない。入院の準備をお願いしなければならない。可八に言うということは、自然と兄にも知られることだ。
言い訳を考えねばならならい。
愛姫は、「過労」。
自分が一緒にいるのは、・・・。
思考が止まる。恐ろしく冷静な自分の奥底に、激しい動揺が見え隠れする。前髪を掻き毟り、それでも尚襲う冷たい現実が、唇を震

わす。
愛姫に罪はない。
罪は、自分にある。
なのに、苦しんでいるのは愛姫だ。
愛姫は、産むつもりだったのか。いや、ならばもっと健康に気をつかうはずだ。いつ死んでもいいような投げやりな生活を送るはずがない。そう、まるで自然に流産するのを待っているかのような凄惨さ。
瑞希自身、愛姫から打ち明けられたとしても、堕ろす方向の話をしたはずだ。どちらにせよ、この世に生をうけられなかった子。なのに、この罪悪感。地の底へ叩きつけられたような絶望感。
愛姫のバッグから財布をとりだし、免許証を見て電話をかけた。
瑞希の声を聞いた可八は、ひどく怯えていたが、愛姫の入院のことを耳にした途端、口調がしっかりとした。
「どこが、悪いのでしょうか。」
「医者は過労だと言っています。一週間は入院して欲しいとのことです。」
「わかりました、すぐ準備して伺います。」
「いえ、今日はもう遅いですから、明日の朝来てください。」
「でも、つきそいとか・・・。」
「完全看護だそうですから、大丈夫ですよ。」
明羅の書いた記事を読む限り、可八は、愛姫の影にいるという印象が強かった。だが、そうでもない。子が、親と対等になる日が来るように、可八は円熟している。
瑞希は、その後明羅に電話をした。
今晩は帰らない。完全看護だろうと、看護師に何と言われようと、帰らない。愛姫が目覚めたとき、一番初めに会わねばならない。会って、話をしなければならない。愛姫にどんなに罵倒されようと、叩かれようと、すべて受けなければならない。
―　そんなの、責任じゃないわ！　―

鋭い眼差し。
紺碧に染まった街の中の黒いコートが、脳裏で翻る。
明羅には、詳しいことは何も言わなかった。ただ、今夜は帰らないとだけ、告げた。今までにも、こういうことがなかったわけではない。しかし、次の日の明羅はいつも冷たかった。外泊などということを許せない、潔癖な兄は、瑞希の行動を叱責してきた。
そう、兄の言うことは正しかった。
結果的に、そういうことの積み重ねが、愛姫をこんな目にあわせてしまったのだから。
廊下の待合椅子に体を横たえた。
愛姫の審判は、明日下る。

愛姫が目覚めたのは、まだ日の昇らない早朝だった。
見知らぬ天井に、一瞬戸惑ったが、やがて瑞希と会ったことを思い出し、それからの記憶がないことに気付いた。
病院の検査着のような寝巻きが心地悪い。見ると、腕にはチューブが繋がれている。
（子ども、・・・どうなったろうか。）
まだ生きているとしたら、よほど運の強い子なのだ。
（そうしたら、もう・・・殺せないね。）
ここまでして自分にしがみついているものを、もはや邪険になどできない。それは、いくら冷たくしても寄ってきた可八と同じだ。
と、そのとき。
突然、病室の扉が開いた。ブラインドの向こうの青い朝が白けてきて、その姿を映し出した。
「瑞希さん・・・。」
瑞希も、愛姫がすでに起きていたことに驚いた。一応、様子を見ておこうと思っていただけで、まだ話をする心の準備はできていない。
愛姫も、何と切り出していいのか、わからない。だが、瑞希はも

うすべてを知っているだろう。このまま黙っていても仕方が無い。
愛姫は上体を起こし、大きな枕に背を埋めた。瑞希がそれを手伝い、ベッドの脇に腰を下ろした。
「病院に、一晩中いらしたんですか？」
「ええ。あなたと、誰よりも早く、話をしなければならないと思って。」
「話・・・。」
「そうです。その、・・・子どものことを、」
愛姫は息を呑んだ。
「あなたの体が衰弱していて、やむなく、流産させました。」
愛姫は瑞希の表情が無いのを確認した。多分、自分も同じようなのだろう。
「安心なさったでしょう。」
瑞希は、眉を吊り上げた。
「そういう言い方を、・・・・されたくないんです。もちろん、悪いのは俺なんですが。でも、・・・安心したわけではありません。」
「どちらにせよ、この世に生を受けられない子だったわけですわね。私は遅かれ早かれ堕ろすつもりでした。瑞希さんだって、例え知っても、産めとはおっしゃらないでしょう。」
「・・・橋田さんの、気持ちしだいではわからなかったと思います。」
「それは、私と結婚してもよかったということですか。それとも私生児を認知してもよかったということですか。」
愛姫の表情が恐ろしく変わった。言葉が棘のように瑞希を貫く。
「・・・それは、」
「おっしゃらなくていいわ。子どもができたから結婚なんていうカップルを、私が何度嘲笑ってきたかを考えれば、私は決して結婚などしませんし、私生児を産んだりもしませんから。」
さっき。
もし、まだ子どもが生きていたなら産もうと思ったことなど、愛

姫はもう忘れていた。瑞希の前で、頑なになる心を声にすることしか頭に無い。
瑞希は、椅子から立ち上がると、灰色のビニル床にひざまずいた。そして、手をついた。
「何と言われても、かまいません。謝ります。本当に、申し訳ありませんでした。」
瑞希の白いシャツの背しか見えない。
愛姫はそれが瑞希の「手」で、こういうときの常套手段なのかとも思った。
だが、例えそうでも、こんなことを望んではいない。瑞希を責める気はない。ただ、子どもができたから結婚してもいいなどという陳腐な台詞に、腹が立つだけだ。
「どうか、・・・頭を上げてください。そんなことなさらないで。瑞希さんが謝るいわれなどないんですから。」
「いいえ、俺が悪いんです。橋田さんに甘えたのが、悪かったんです。」
「もし私に少しでもその気がなかったなら、どんなことをしてでも拒絶していました。それをしなかったのは、多分私にも必要だったんです。・・・だから、瑞希さんが謝ることはないんです。」
愛姫は、ベッドからそっと降り、瑞希の体を起こした。点滴の針が抜け、痛みが走ったが、それもいいと思った。
真摯な表情の瑞希は一層男前だった。顔のいい人間は、やはり得だ。こんな表情を見せられたら、女は誰でも何でも許してしまうだろう。この男が、いきさつはどうあれ、今自分のためだけにここに存在しているということを、すごいと思ってしまう。
瑞希は、どうしていいかわからなかった。ろうけた愛姫の顔は、化粧をしているときとあまり変わらない。眉墨がなくても眉は濃いし、アイシャドウをしなくても、二重まぶたは濃い茶色の影を落としている。アイラインなどしなくても、目の輪郭ははっきりしている。ファンデーションなど塗らなくても、白い肌の肌理は細かくて

認識できないほどだ。
化粧品やカラーリングで容姿を飾り立てている女たちと比べて、愛姫は自然体で美しい。マニキュアと除光剤で艶をなくした爪先も、愛姫には縁のないもので、素のままで桜貝のような光沢がある。
女の真価。そんな言葉が思い浮かんだ。自然の美を、愛姫は知っているのか。
瑞希が立ち上がると、愛姫は頷いた。
「私は大丈夫ですから、どうぞお帰りになってください。お仕事もあるでしょう？」
「ええ。でも、藤木さんが来るまではいます。」
「可八に、・・・連絡したんですか。」
「バッグの中の免許証を無断で見させて頂きました。橋田さんがお帰りにならないと、心配なさると思ったので。」
「そうですか。・・・すみません、ありがとうございます。」
愛姫は部屋の時計をチラと見ると、言った。
「すみませんが、部屋から出ていただけますか。着換えたいので。」
「着換える？」
「ええ。」
「でも、藤木さんが来るまで着換えは・・・。」
「可八が来る前に、帰ります。」
瑞希は、一瞬耳を疑った。
「帰る？何を言っているんです？あなたは、入院しなければならないんですよ。」
すると、愛姫の表情が厳しく引き締まった。
「こんなことで仕事は休めません。第一、今日は大事な法廷があるんです。寝ていられません。」
「馬鹿言わないで下さい、あなたは自分の体がそんなに丈夫だと思っているんですか？」
「丈夫でしょう、こうして立っていられるのですから。」
「丈夫じゃないから、衰弱して、子どもが駄目になったんじゃあり

ませんか！」
　すると、愛姫の表情がゆがんだ。
「どうせ、・・・どうせ、いつかは堕ろすつもりでした。私の体のせいじゃありません！」
　愛姫はくるりと背を向けると、瑞希の目をものともせず、寝巻きの紐をほどき、上着を脱いだ。瑞希が出ていかないのなら、このまま着換えてしまおうと思った。今更、恥ずかしがることもない。どうせ、全部知られている。
　慌てたのは瑞希だった。愛姫がワイシャツを羽織ったところで、それを阻止しようと腕をつかんだ。
「離して！」
　見ると、その腕から一筋の血が流れている。点滴の針を抜いた穴からだ。
「ベッドに戻ってください。手術をしているんですよ、立っていいわけがないでしょう？まして、仕事などと！」
「子どもを堕ろしたのは、私の勝手です、病気とかじゃないんです！それを理由に休めません。休みたくない！」
　通勤途中に動けなくなって有給休暇をとったとき、情けなさで自己嫌悪に陥った。もう二度とこんなことで休むまいと誓った。
「駄目ですよ、無理したら、また倒れます！」
「倒れたから、何です？私なんか、死んだっていい！」
「橋田さん！」
「私は、人殺しをした。生きる資格なんかない！温かいベッドで、眠る資格なんかない！」
ヒステリックに叫び、もがく愛姫を後ろから抱きかかえようとするが、抵抗は増すばかりだ。
「何をしているんです！？」
　起床の時刻を知らせにきた看護師が入ってきて、驚きの声をあげた。瑞希は、額に汗を浮かべながら言った。
「すみません、どうしても仕事に行くというので。」

すると、看護師も愛姫の下にかけよってきた。
「何を馬鹿なことを！あなたは病気なんですよ？あんなに体を弱らせて。これ以上婚約者に心配かけさせてどうするんです？」
思わず、愛姫の動きが止まった。
（婚約者？）
瑞希の方を見ると、今とばかりに瑞希は愛姫を抱き上げ、ベッドに寝かせた。シャツを着られなかった素肌が瑞希の白いシャツに触れた瞬間、愛姫は全身に電流が走るような感覚を覚えた。そして、瑞希がいつもつけているコロンの香り。愛姫の大好きな冷たいダージリンの香りがほのかに鼻をくすぐり、そのせいか驚くほど神経が落ち着いていった。
「藤木さんに言って、うまく話をつけるから、休んでくれ。頼む。」
婚約者という立場上、やむなく使ったタメ口がこそばゆい。寝かされても、なお瑞希の腕をつかみ、愛姫は首を振った。
「誰にも代わりはできません。できないと、思っています。だから行かせて。」
「駄目だ、絶対に。無理をしたら、法廷で倒れる。それこそ、周りの迷惑だ。自分の目線だけで物事を考えるな。」
瑞希の瞳は、つらそうに見える。切なさで揺れている。愛姫は唇を噛み、そっと瑞希から手を離した。
「一日も早く復帰したいのなら、今休むべきだ。藤木さんから事務所へ連絡を入れてもらう。それなら、いいだろう？」
「・・・なんて？」
「過労で入院。嘘ではないから。」
瑞希は愛姫の目の色が落ち着いたのを見届け、看護師に後を頼んで廊下に出た。可八に電話をし、事務所への欠勤連絡を頼んだ。
『十時過ぎには病院へ行きます。ご迷惑をおかけして、申し訳ありませんでした。』
「いいえ。」
可八は、どうして愛姫と自分が一緒にいるのかと訊ねない。それ

は自分を恐れているからなのか。
看護師がいるところで、本音の話はできない。愛姫をこれ以上興奮させたくもない。
瑞希は、とりあえず仕事に行くことにした。愛姫の言うとおり、「こんなこと」で仕事を休めない。いや、「こんなこと」などで片付く問題ではないのだが、身から出た錆のようなことを理由に休めはしないということだ。
よく考えれば、可八に会いたくもなかった。どんな顔をして会えるだろう。愛姫を妊娠させた挙句、流産させたなどと、今まで自分で罵った相手に顔向けができない。
ふと見たシャツの袖に、一筋の血がにじんでいた。愛姫の血だ。
流産したことを、愛姫がどんなに罪と感じているか知ってしまった。
人殺しと言った。
そう、殺したのは瑞希自身だ。なのに、愛姫はその責任を一身に負い、休む資格さえないと叫んだ。
そんな風に思っていたのか。
そんな風に自分を責めるのか。
病院の外に出ると快晴の冬の冷気が口中を凍らせた。薄い白いシャツにジャケットを羽織らず、瑞希はまっすぐ前を見据えて歩き出した。
愛姫が苦しむのなら、自分はそれ以上に苦しまねばならない。

第２１話

仕事を終えた瑞希が再び病院に戻ったのは、午後三時の少し前だった。
見ると、廊下のソファに可八が一人、荷物を抱えて座っている。
「どうなさったんですか。」
その声が瑞希にしては穏やかだったため、可八は口を開いた。
「面会時間を待っているんです。」
「面会時間・・・？」
「朝来たら、面会時間までは会えないといわれて。」
「ずっと、待っていたんですか。」
「ええ。・・・でも、もうすぐ時間になりますから。」
五時間も、ここで待っていたというのか。
「でも、あなたは橋田さんの近親者でしょう？しかも、入院の荷物を持ってきたんですから面会時間は関係ないと思いますよ。ちゃんと、受付でそう言いましたか。」
すると可八は少し困惑した表情を浮かべた。
「・・・私は、近親者ではありません。ただの同居人です。」
「二十年も一緒に暮らしていれば、他人じゃないですよ。家族と同じです。」
だが、愛姫は首を振った。
「いいえ、私は、他人です。例え五十年一緒にいても、それは変わらないんです。」
兄が言うのとは違い、二人の絆はずっと複雑なのかもしれない。いつまでも心を開けず、真の家族になどなりえないとお互いに思っている。傍から感じる絆を、本人たちは否定している。
「あの、ひとつだけお聞きしてもいいですか。」
遠慮がちな可八に、瑞希は「どうぞ。」と素っ気無く答えた。
「なぜ、瑞希さんが愛姫さんを病院に連れてきてくださったんです

か。」
瑞希の態度がいつもより優しかったからか、ついに核心をついてきた。瑞希は、用意した言葉を口にした。
「個人的な相談をするために、事務所へ行ったんです。橋田さんは事務所から出てきたところだったので、少し歩いて話をしていたら、・・・突然、倒れたんです。」
あながち嘘ではない。
「そう・・・、ですか。本当に、ご迷惑をおかけしてすみませんでした。」
「別に、藤木さんがあやまる必要はありませんよ。あなたが言うように、二人が他人なんだとすれば、なおさらです。」
そのとき、廊下に柔らかなトロイメライのオルゴールが流れた。面会時間を告げる合図だ。　入院病棟がにわかに騒がしくなってきた。
「僕は廊下にいますから、どうぞ先に。」
可八は頭を下げ、病室に入っていった。一人部屋にしたのは、愛姫が他人と一緒にいることをいやがると思ったから。それは、正解だったのだろうか。
十分ほどで、可八はでてきた。
「もう、いいんですか。」
そう訊ねると、可八は小さく苦笑した。
「だって、お話することがないんですもの。事務所との連絡と、洗濯物のことくらいです。あと、おじ様には黙っていることと。」
「おじ様?」
「愛姫さんのお父様のことです。」
父親に、こんな様を見られたくないということか。記事では絶縁状態にあると書かれていた。
「では、私は入院の手続きを済ませて今日は帰ります。・・・失礼します。」
行きずりで病院までつきそった瑞希がなぜ今日も病院に来たのか、

ましてや泊まりでつきそっていたのか、疑問に思わないのだろうか。いや、あえて口にしないのか。
明羅に知られるのも時間の問題だろう。今夜はさすがに帰らなければならない。愛姫と話をして、それから。
病室に入ると、愛姫は体をベッドの背に預けて起きていた。
愛姫は、瑞希を見ると軽く視線を落とした。
「起きていて、大丈夫ですか。」
「ええ。」
ベッドの脇に立つ瑞希を見上げ、愛姫は穏やかに言った。
「瑞希さん、もう、忘れてください。今回のこと、すべて。」
「・・・それはできません。」
「私は、もう何も気にしませんから。」
「あなたは、絶対忘れないはずです。・・・朝、あなたが言ったこと、覚えていますか。」
「・・・。」
「正直、あれは堪えました。あなたがご自分を責める以上に、俺自身を責めねばならないと自覚しました。」
「私は、瑞希さんにそんなことを望んではいません。」
瑞希は組んだ指に力を入れた。
「相手の女性を、こんな目にあわせたのは初めてです。まして、橋田さんのような女性をこんな風にしてしまったことを、心から後悔しています。あなたが望むことを、何でもします。例え、死ぬことさえも。」
どきりとしたのは、瑞希の言葉が本心だから。
相手の言葉の真意を疑う余地などない。心が判断している。瑞希の、真剣さを。
「瑞希さんのお気持ちはわかりました。でも、何かしてもらおうなんて考えていません。」
「俺の気持ちは決まっています。一生、あなたの下僕になる覚悟もできています。本当です。今まで、散々女性を弄んできた罰を受け

なければならない。あなたが、一生誰とも結婚するなと言うなら、そうします。二度と顔も見たくないというなら、離島へ越したっていいと思っています。」
「やめてください、そんなことをされたら、かえって重荷です。今回のことで、瑞希さんの人生を狂わすことなんてできません。」
「でも、橋田さんは今回のことを忘れないでしょう？一生、背負って生きていこうとか考えているでしょう。」
その通りだ。
どうせ堕ろすつもりだったのに、実際にいなくなってみて感じるこの罪悪感は一生忘れてはならない。
罪を犯した。罪を逃れる例外規定は、二人にはあてはまらない。
「だったら、俺も忘れるわけにはいきません。あなたが罪と感じているなら、俺も同罪です。あなたがご自分に科そうとしている償いがあるのなら、どうかそれ以上のものを俺に求めてください。一生許されないのは覚悟しています。」
本当は。
実のところ、愛姫は瑞希がもっとドライに去っていくと思っていた。入院費は責任持つからと、そのまま終わりにすると思っていた。それでも仕方ないというより、それが当たり前だと思っていた。朝、瑞希がいたのは話をつけるためで当然だと思ったが、今もこうして現れていることが、不思議な気さえする。
愛姫は言った。
「瑞希さん、・・・私は今回のことで瑞希さんを訴えようとか思っていませんから安心してください。」
突然、瑞希の息遣いが変わった。
愛姫がはっとするより早く、瑞希は言った。
「あなたは・・・！あなたは、俺がそんなことを恐れているから、こうして必死になっていると考えているんですか？確かに、俺はいい加減ですよ。女を女と思ったこともないし、愛情のかけらも持ったことがないし、道具のように扱ったことさえありますよ！でも、

今は心から、心から・・・・・!!」
怒りのあまり、声が続かない瑞希を見て、愛姫はもう疑うまいと思った。ここまで言うのなら、信じるしかない。例え、これが演技だとしても、騙されたとは思わない。
「ごめんなさい。・・・」
「いいえ・・・。俺のほうこそ、すみません。あなたがそう思っても、当たり前なんですが。」
病室の扉がノックされた。
看護師が、食間の薬を運んできたのだ。
「なんだか大きい声がしたようですけど?」
朝のことがあるから、警戒されている。
「絶対安静なんですから、興奮させないで下さいね?」
にらまれた瑞希は、軽く頭を下げた。
「婚約者なんだから、こういうときこそ労わらないと。過労ゆえの流産なんだから、誰のせいでもないのだし。結婚したら、また作ればいいだけの話しだもの。」
二人が婚約していると信じている看護師の好意の言葉が、愛姫と瑞希には痛かった。
もう、「次」はない。たぶん、一生。
気まずい雰囲気を取り繕おうと、瑞希は愛姫に小さな包みを差し出した。
「何がお好きかわからなかったので、適当に選んだんですが。」
愛姫は青白い腕で受け取り、静かに封を開けた。
「・・・フルーツカクテルですわね?私の大好物ですわ。」
「そうですか。では、どうぞ召し上がってください。」
しかし、愛姫は首を振った。
「今は・・食べる気にまだなれません。」
「具合が良くありませんか。」
「それもあります。でも、・・・。」
「子どもを殺しておいて、生きるための食事なんかできないとか言

うんですか。」
愛姫は驚いた。
瑞希には、段々自分の思っていることがわかっていってしまっている。
あれだけ吐露していれば当然か。
「今はまだ、時間がそう経っていないし、気持ちが穏やかでないとは思います。でも、ひとつだけ変わらないのは、あなたは生きていくということです。自分から命を絶つことなど、できないはずです。」
「・・・瑞希さん・・・。」
「あなたは、藤木さんの自殺を止めたし、俺にも、『母のようにならないで』と言った。そのあなたが、命を絶つことはないはずなんです。死にたいと思ったとしても、生きていくはずです。ですから、」
「瑞希さん、あなたのおっしゃることは正論だし、私だってわかっています。でも、今は自分を地中深く沈めてしまいたい気分なんです。身の置き所がなくて、雷にでも打たれたい気分なんです。ですから、とても食べられない・・・！」
右肩に顔を埋めた愛姫を、瑞希はただ見ているしかないのだと悟った。何をすればいいかわからない。何もできない。今の愛姫に、一番何かしなければならないのは自分なのに、何ができるというのか。
本当に婚約者だったら。
どんなにか楽だったろう。
優しく労わり、今後に期待し、次の子どもを待てばいい。だが、その未来はない。なぐさめの言葉さえみつからない。なぐさめられるほど愛姫のことを知らない。だいたい、あの夜までに愛姫とどれほどの時間を過ごしたというのだろう。お互いを知る十分な時間などなかった。話といえば、兄と同居人との結婚話のみ。その繋がりでしかなかったというのに。

「じゃあ、あなたが食事をするまで、俺も食事を摂らないことにします。」
「瑞希さんには、関係のないことです。」
「同罪か、それ以上の罪があるのに、関係なくはないでしょう？これだけは覚えていて下さい。俺は、あなたが御自分に科す罰をすべて一緒に味わいます。あなたが何と言おうともです。一生続くのなら、一生、つきあいます。あなたが望もうと望むまいと、関係のないことです。俺が犯した罪を、あなたが考えている方法で、一緒に償うというだけです。どんなに拒絶されても、絶対にやりとおしますから。」
愛姫は、苦笑した。
「あなたは、一生私の下僕になってもいいとおっしゃったでしょ？それは、私の言うことをきくということですよね？なら、私が『忘れて』といったら、そのとおりにしてくださるのではないの？」
瑞希は濃い輪郭の眉に力を込め、愛姫を見た。
「俺は、あなたと問答する気はないですよ。」
「私だって。真剣に言っているのに。」
「罪を、償わせてください。いたたまれないのは、俺も同じです。どうしたらいいか、わからないんです。」
「どうしたらいいんでしょうね？死んでしまった子は、もう二度とヒトにはなれない。産まれてくれれば味わえた喜びも、幸せも、すべて幻になってしまった。それを、どうしたら償えるのでしょう？私は弁護士ですから、今まで『犯した罪は、償える』とか言ってたんですよ。でも、そんなの嘘です。償えない罪だってあります。弁護の余地もない過ちは、やっぱりあるんです！」
瑞希にも、答えなどわからない。どうして世の中には、あんなにも堕胎する人間が多いのだろう。子どもができたら、「失敗」などというのだろう。子どもができたことを結婚のきっかけにしたりするのだろう。愛姫が言ったとおり、堕胎の金を払うことも、結婚することも「責任」などではない。責任などという言葉を口にするの

なら、子どもができる前に責任を取っておくべきなのだ。それに、男が「責任をとる」というのもおかしい話だ。子どもができたのは、強引でないのなら、双方の責任であり、女も同等の立場にあるはずだ。女が責任を口にしないのは、子どもを宿した時点で、すでに責任から回避できない立場に自動的におかれるからなのか。

数年前、妊娠したからと嘘をついて瑞希に結婚を迫った女がいた。幸い真実がすぐに明るみになったが、以来慎重にならざるを得ないだけの衝撃は受けた。愛姫のときは、本当に理性のかけらもなかった。というより、理性があれば、愛姫を抱きはしなかったはずだ。

やはり、甘えだった。

瑞希は自分の苦しみだけで精一杯で、自分ひとりが犠牲者だと思っていたのだ。

愛情の欠片もない女性に救いを求めたことが、罪だったのだろうか。

喉につかえて呑み込めずにいるのは、後悔より罪悪感なのだろうか。

第２２話

瑞希が家に戻ったのは、夜の7時をまわったばかりだったが、めずらしく明羅が家にいた。
午後、出張が早めに切りあがったという明羅の顔は、強張って見えた。
どうしたのかと問うと、
「さっきまで、お客様がいた。」
「誰？」
「瑞希のよく知っている人だ。話は全部聞いた。」
明羅の深刻な表情に、瑞希は、はっとなった。
かつての婚約者、沙織なのか。
何となく、香水の甘ったるい匂いが残っている。
兄の悲痛な表情も、それを物語っている。
「沙織さん、謝りに来たらしい。俺にも、頭を下げていた。」
ソファで頭を垂れた兄を、瑞希は向かい側で見ていた。何と言えばいいのか。「今更知ったのか、遅すぎる」とでも言えばいいのか。だが、そんなのは虚しいだけだ。
「仕事・・・どうしてるんだ？」
瑞希は、平然とした口調で答えた。
「講師のかけもちしてる。来年、国公立の試験を受けなおそうかと思う。」
「諦められるのか？」
「何を？俺の夢を？沙織を？」
瑞希はいたたまれずに立ち上がり、背を向けた。
「諦められなくたって、もう手遅れじゃないか。今更兄貴が藤木可八と別れたって、取り返しなんかつかない。くだらないこと聞くなよ。」
兄がどんな表情をしているかわかるから、振り返れない。だが、

言わずにはいられない。
「俺は、散々言った。兄貴にも、藤木さんにも。あげく、橋田さんにも・・・頼みに行った。だけど、兄貴は拒絶したんだ。それは、俺の望む未来を拒絶したのと同じだったんだよ。こうなるのは、わかってた。兄貴にだって、そう言ったじゃないか。だけど、兄貴は藤木さんと別れなかった。俺より、彼女を選んだんだ。それを・・・！今更、どうしようもないことを言うなよ！」
明羅には、愛姫がかつて言った言葉の真の意味が、今になって理解できた。
―　その幸せが、独りよがりにならないことを祈ります　―
あの時。
愛姫は瑞希のことを知っていたのだろうか。だから、あんなことを言ったのだろうか。
「・・・すまない。」
「別に。もう、どうでもいいよ。どうせ絶対に取り返しがつかないんだ。例え、地球が崩壊しても。」
そこまで言って、瑞希は今自分の置かれている状況をまざまざと思い出し、口を噤んだ。
今の自分に、兄を責める資格などあるのか。
謝っても、地球が崩壊しても、とりかえしのつかないことをしたのは自分ではないのか。子どもを殺しただけでなく、一人の女の心まで深く傷つけてしまった。癒す手段など思いもつかない。
瑞希は部屋に戻り、柔らかな羽枕をフローリングに叩きつけた。手ごたえのなさが一層苛立ちを逆なでする。
（畜生・・・！）
いっそ、愛姫を冷酷に突き放してしまえたら。
世間の男女のように、あと腐れなく金でかたをつけられたら。
できない。
他の女ならできたかもしれないが、相手が愛姫だからそんなことはできない。

いまどき、こんな女がまだ存在するのかと思った。世間の流行りや生き方に左右されず、自分の道を確立し、まっすぐに生きている。自分に厳しく、罪を一つ一つ噛み締めずにはいられない。
瑞希は、己の生き方を悔いていた。
もっと、胸を張れる生き方をどうしてしてこなかったのだろう。だから、愛姫を傷つけてしまったのだ。だが、今さらどうにもならない。
こんな思いになるなんて、瑞希自身が一番戸惑っていた。女との間のことなら、どんなことでも冷静に対処できるという自負があった。一人の女のことで、こんなに気持ちを引きずられるとは、予想だにしていなかった。女が子どもを堕ろすことに、こんなにうろたえ、罪の意識を感じるとは思っていなかった。なのに、この重苦しい、地の底へ突き落とされたような感覚。子どもの頃、悪いことをして、それが親にばれないかと冷や冷やしていたあの感覚が、何十倍もになって襲い掛かってくるようだ。
だが、愛姫との問題に解決策などあるのだろうか。
償いとは、何か。そんなものが、存在するのか。
次の日の午後。
面会時間を少し回って愛姫の部屋を尋ねると、そこはもぬけの空だった。
全身の脈が一気に波打った。
いったい、どこへ行ってしまったのか。いや、立ってどこかへ行けるくらい元気になったということなのか。
通りがかりの看護師に声をかける。
「橋田さんなら、さっき屋上へ上がっていきましたよ。」
瑞希は、礼もそこそこに走り出した。
屋上へ、何をしにいったというのか。
大体、看護師はそれを止めないのか？
二月の寒空は、もうラベンダーに染まっている。冷たい刺すような空気が、染みだらけのコンクリートの上を覆いつくしている。そ

んな中、手すりのそば一つの黒い影に気付いた。
と、その影のかかとがふわりと宙に舞った、気がした。
「橋田さん！！」
思わず叫んで走り出していた。
愛姫が驚いて振り向くより早く、瑞希は背中から抱きついていた。
「馬鹿なことを！」
「瑞希さん・・・？」
愛姫は、瑞希が突然現れたことより、この行動のほうが不可解だった。しかし、すぐに瑞希の杞憂を察した。瑞希の腕がゆるむと、愛姫は言った。
「私が自殺しようとしていると思いました？」
「・・・。」
瑞希の頬はまだ上気している。
「まぎらわしかったのは謝ります。ただ、景色をよく見たかっただけなんです。」
「・・・そうでしたか。」
「ごめんなさい。余計な心配をさせてしまいましたね。」
「いえ、俺のほうこそ早とちりをして・・。」
「死んでもどうにもならないとおっしゃったのは瑞希さんでしょう？」
「それは、そうですが。」
「もし私が自殺なんてしたら、それこそ瑞希さんの一生に消せない影を作ってしまいますものね。・・・それは、さすがにできません。」
点滴の管をつけたままの愛姫をベンチに座らせ、瑞希はその前に立った。
愛姫が瑞希を見上げると、その向こう側に霞ヶ関の街が広がっている。
「瑞希さん。ひとつだけ、お願いをしてもいいですか。」
「何ですか。」

「明羅さんと可八のこと、認めてください。」
愛姫の唇が青茶色にかさついている。熱がある証拠だ。瑞希は自分のトレンチコートを愛姫にかけてやった。
人の温もりは時として心地悪さを感じるものだが、瑞希のそれは、素直に愛姫の身体に染みた。
瑞希は遠い目で語った。
「認めるも何も、すべてが終わった今は、何か言う気力はなくなりました。兄に、殺人犯の娘などと結婚して欲しくないのは今でも同じです。藤木さんを義姉と呼ぶことは憚られます。でも、今の俺には、二人の結婚を反対する資格がなくなってしまっているんです。」
愛姫の瞳が、姿を現したばかりの月の色を映し出している。
「それは、・・・・」
命をひとつ、消してしまったから。
殺人を犯してしまったから。
殺人犯の娘より、ずっと下の立場になったから。いや、自らは何の罪を犯していない可八とは、比べるすべもない。もう、可八を嘲る資格など、あるわけがない。
瑞希の言いたいことが解り、愛姫は口を閉ざした。わかっていることを、わざわざ言わせる必要などない。
今、愛姫の中にある感情と、瑞希の持つ感情は、重なっている。罪の共有というより、悲しみや後悔や色々と混ざり合った言い表せない感情そのものを共有している。
「戻りましょう。・・・ここは寒い。風邪をひいたら大変ですから。」
促されて立ち上がろうとした愛姫に、瑞希は手を差し出そうとした。が、瞬間躊躇し、結局手を引っ込めた。
触れてはいけない気がした。
それは、一生。
愛姫を病室へ送った後、瑞希はあてもなく街をさまよった。
家へ戻ろうという気にならない。

家庭のぬくもりを、今は欲していない。
この気持ちはどうしても拭い去れないし、簡単に拭い去ってはならない。
苦しめばいい。
罪の意識を抱いて、抱いて、一生苦しめばいい。
死んでしまった者に対して、そんなことで償いになるとは思えないが、忘れないことは必要だと思う。
もし何年かして、愛姫が誰か他の男と幸せをつかもうとしていたら、力一杯の祝福をする。だが、自分は誰とも一緒にはならない。愛姫の気持ちが癒えたとしても、それで全ては終わらない。　もう、誰との間にも子どもはもうけない。臥薪嘗胆という言葉のとおり、一生薪の上で寝、肝を嘗めて罪を思い出し、思い出し、生きていく。どんなに優しい人が温かな手を差し出してくれても、それに背を向けようと思う。
（そんなことで、何も、許されないが・・・。）
愛姫に言ったとおりの自己満足なのかもしれない。だが、そうせずにはいられない。
家に戻ると、明羅がコーヒーを入れてくれた。それによって、ささくれた心少し癒える気がて、胸に染み入った。
「ひとつ、聞いてもいいか。」
「・・何。」
「橋田さんが入院した病院で、お前、橋田さんの婚約者ってことになっているらしいな。」
いつかは聞かれると思っていた。
「・・口が軽いね、兄貴の婚約者は。」
「聞かれたんだよ、『知っているか。』とね。」
「婚約者なんてでたらめだよ。ただ、病院に運んだとき色々説明するのが面倒だったから、でまかせを言っただけだ。」
「そんな・・！橋田さんの立場を考えたか？他に好きな人がいて、その人の耳にでも入ったら上手くいくものも壊れるだろう！」

そんなふうに考えてはいなかった。第一、愛姫の想い人は明羅だ。とっくに失恋してしまっている。何も知らない兄は気楽だと思い、腹立たしかった。長年苦労して世話をしてきた年下の女に想い人をとられてしまうなんて、愛姫はどれほどのショックだったろう。プライドをことごとく崩されたに違いない。その思いを同居人に決して気取られないように耐えた強さを、誰も知らない。

「そんなこと・・・兄貴が心配することじゃないよ。兄貴は俺より大事な婚約者の心配だけしていろよ。」

そういい残し、席を立った。せっかくのコーヒーを半分残して。

兄を不憫に思ったが、戻る気にはなれなかった。

愛姫の熱い想いをまったく感じていなかった兄が恨めしかった。少しでも察していたなら、可八とどうにかなる時だって、少しは気遣いがあってもよかったのではないか。

愛姫は想いをひた隠しにしていたのかもしれない。感情を押し殺すタイプなのかもしれない。それで、何度も泣いてきたのかもしれない。ずっと一人かもしれないと言っていた。いくらしっかりしていても、恋愛にはひどく奥手なのかもしれない。

（でも、ずっと一人だなんて言わないで欲しい。）

誰かに思い切り愛されて、幸せになったっていいと思う。世間の不道徳な女がいくらでも結婚しているのだから、愛姫がその幸せを味わえないなど、不条理だ。

いつか、誰かの隣で微笑む愛姫には、白いドレスが似合うだろう。普段はダークカラーばかり着ていて、黒が最も愛姫の顔を美しく見せるのを知っているが、明るい色の服も、別の魅力を見せるに違いない。

そこまで考えて、瑞希は思わず口元を手で押さえた。

自分でもわからない感情が、脳裏をフッとかすめたからだ。

しかし、それを認識すると何かいけないような気がして、瑞希は固く瞳を閉じ、それを押さえこんだ。

第２３話

瑞希は、愛姫を毎日見舞った。
愛姫の顔色は段々良くなっていくが、表情はどうしても暗いままだった。無論、何もかも忘れたような顔をされたら逆に拍子抜けしてしまうが、罪を心に刻みつけようとしているのが感じられて、切ない。
愛姫は、瑞希が毎日来てくれることがこんなにも心を救ってくれるとは思っていなかった。正直、ここまでしてくれるとは思わなかった。例え入院している間だけのことでも、一人の男が自分に気を遣ってくれていることが嬉しかった。
妊娠したことも、流産したことも、瑞希の責任とは思っていない。だから、ここまでしてくれて当たり前だとは思っていない。無論、瑞希がどう思っているかはわからないが。
退院すれば、もう、会う理由はない。
可八と明羅が結婚すれば、瑞希と一生会わなくなるということはなくなるが、普段から顔を合わせることは確実になくなる。
退院の日。
仕事がある瑞希や可八が来られるはずもなく、愛姫は一人、病室をあとにした。
誰もいないマンションにつくと、一気に現実に引き戻された感じがして、力が抜けた。ここには、瑞希のいる生活はない。やがて可八が結婚していなくなり、今度こそ本当に独りになるだけだ。
一人でも平気だと思っていた。孤独が自分を強くすると思っていた。しかし、もし入院先で毎日一人だったら、どうなっていただろう。可八が着替えを届けに毎日来てくれても、気持ちは深みにはまったままだったのではないか。
瑞希だから。
瑞希がいたから、今の自分はこんなに立ち直っているのだ。

瑞希がどう感じているかはわからないが、確かに瑞希は自分の苦しみを半分以上、背負ってくれたことになるのかもしれない。
と、そのとき。突然玄関のチャイムが鳴り響いた。
「お届けものです。」
渡されたのは、ピンクがかった肌色の花びらを持つ薔薇の花束だった。薔薇なのに、優雅で豊かな紅茶の香りがする。
驚く愛姫に、配達人は小さなカードをわたし、去っていった。
カードにメッセージはなく、瑞希の名前だけが記されていた。
思った以上に達筆で、堂々として、しっかりとした文字を書く。
眼を閉じると、涙がこぼれた。
嬉しさより、胸を締め付ける切なさが溢れてくる。
どうして瑞希は、自分の一番好きなものを贈ってくれるのだろう。
見舞いの品も、自分の好みなど知るはずがないのに、いつも好物ばかり持ってきてくれていた。
開いた目の先に、滲んだ花びらが揺れ、薔薇の香りが鼻をくすぐった。
目頭にあてたカードからは、冷たいダージリンの香りが漂う。
瑞希の香り。
愛姫が一番好きな香りを、瑞希は持っている。
瑞希がどんなに女性からもてるか聞いている。聞かなくても、わかる。どうすれば女性を喜ばせることができるか、知り尽くしているのかもしれない。愛姫も、そんな女性の一人だから、それに乗っかってしまっているのかもしれない。
でも、いい。
男性から初めて花束をもらった。退院のお祝いであろうと、そんなことはどうでもいい。
だが、これが本当に最後だろう。瑞希の心をもらえるのは。
愛姫は、溢れ出そうな気持ちを抑えようと胸を押さえた。
瑞希にだけは、惹かれてはいけない。
何も叶わないことがわかっているから。

想った時点で失恋になるから。
瑞希の優しさは、償いとか同情とかそういうもので、それ以上では決してない。
わかっているのに。
（弱気になっているから、優しさにすがりつきたいだけ。それだけよ・・・。）
声を押し殺してしか泣けないようになっていた。大声を出して泣けたらもっと楽なのかもしれないと思っても、声は出ない。
本当は、瑞希といたい。瑞希のやさしさを、ずっとずっともらっていたい。あの腕に、すがっていたい。
でも、それは決してかなわない。
引く手数多の瑞希が、自分を選ぶはずなど無い。
そう言い聞かせねば、夢を見てしまう。覚めたときに、一番つらい夢を。

明羅の最後の取材は、春の訪れを告げるような陽光のさす日に行われた。
おなじみの取材室も、もうこれきりになる。だが、明羅とは最後にならない。可八がいる限り、一生、縁は切れない。
明羅への思いは、もう完全に断ち切れていた。近くで見つめても、心は穏やか過ぎるほどだ。
「最後の締めくくりは、橋田さんと、藤木さんの関係で閉めたいんです。橋田さんにとって、藤木さんは、一体どういう存在か。取材の当初は『他人だ』と言い切っていましたが、今は、どうでしょうか。」
この半年で、色々なものが変わってしまった。その変化をも踏まえての答えを知りたいというのか。
「難しいですわね。」
「以前と変わりませんか。」
「いいえ。もっと、複雑になりましたわ。可八が、わたしの人生に

なくてはならないってことは、わかりました。可八が結婚したら、完全に本当に独りになると実感して、寂しい気持ちになりましたから。でも・・・だからといって、どう表現したらいいかわかりません。」

明羅はメモ用紙から視線を上げ、話題を変えた。

「ご病気は、すっかり良くなったんですか。」

その話題は、嫌でも瑞希を思い出させる。

「・・ええ、おかげさまで。」

「瑞希は、あまり話してくれなくて。」

「過労だなんて、情けないことで。でも、瑞希さんには本当にお世話になりました。」

明羅は、瑞希が毎日見舞っていたことを知らない。ただ、病院へ運んで、次の日も病院にいたことを、可八から聞いただけだ。

「瑞希は、何か、ご迷惑をおかけしたのではありませんか。」

愛姫は思わず、ドキリとした。流産のことを、知っているのか？

いや、そんなはずはない。

瑞希は、絶対にしゃべらないし、気取られるようなこともしないはずだ。

「いいえ、・・・何も。」

固唾を飲み込む。

「病院の人たちに、あなたの婚約者・・とか、勝手に名乗ったようですね。」

明羅は、これを言いたかったのか。ほっとする。

「別に、かまいません。あんなハンサムな婚約者と、うらやましがられましたわ。」

「・・・なら、いいんですが。」

あれから、瑞希とは会っていない。花束のお礼は、手紙で済ませた。瑞希からの返事はない。

「橋田さんは・・・ご存知だったんですか。瑞希が、仕事を首になったり、婚約を解消したことを。」

何と答えればいいだろう。どこまで嘘をつき、どこまで話してもいいだろう。
「可八のことで、話をしたことがあるので、なりゆきで、・・聞きました。」
「酷な役目を、押し付けてしまいましたね。」
「いいえ。でも、今は瑞希さんのお気持ち、少し変わったのではありませんか。」
「別れるなと、言われました。今更別れられたら、自分の犠牲が意味なくなるからと。」
「・・・。」
「弟より、恋人をとったのだからと、冷たく言われました。」
苦笑する明羅に、愛姫は首をふった。
「比べることはできないと、あなたはおっしゃっていましたよね。」
「いつかはわかってくれる、なんて甘えた考えをやっと捨てました。瑞希にとったら、一生を壊されたことに他ならないのですから。」
「瑞希さんは上昇志向の強い方です。きっと、別の成功を見つけられるのではありませんか。」
「そうかもしれません。でも、それと僕の結婚のこととは、やはり別でしょう。」
「どうすれば瑞希さんの心が緩むのかはわかりません。でも、それは少なくとも明羅さんと可八が不幸せになることではないはずです。瑞希さんは、本当にお兄様が大切なんです。だから、結婚もあれほどに反対されたんだと思っています。その瑞希さんが、明羅さんの不幸せだけは、決して望まないはずです。」
明羅は頷いた。
「瑞希が、仕事を首になった直後に私を責めなかったことが、一番切ないんです。ずっと、一人で耐えていたのかと思うと、・・・いたたまれない。」
その時期の瑞希を見てしまった愛姫には何と答えていいかわからなかった。明羅は続けた。

「どうやって立ち直ったのかはわかりません。いや、苦難の時期に気付かなかった愚かな兄には、今立ち直ったかどうかも定かにわかるわけではないんです。ただ、少し、落ち着いたように見えるだけで。」
「でも、お互いを思いやっていることには変わりがないのですから、きっと、いつかは・・。」
思えば、瑞希とは半端に別れてしまった気がする。大事なことを途中で放ってきていないだろうか。
子どもはいなくなった。
明羅と可八は結婚する。
瑞希は新しい道を歩いていく。
なのに、半端な気がするのはなぜか。
二人には何も始まっていないのだから、終わりもない。だから、半端なこともないはずなのに。
瑞希にこだわりたいのは、心があるから。消えない炎が揺らいでいるから。叶うわけがないと思いながら、どこかで淡い期待を抱いているから。
あの瑞希と一夜だけでも共にしたとは。その上、瑞希の子を妊娠していたとは。
こめかみを押さえ、愛姫は自分の考えを打ち消すように唇を噛んだ。
しばらくの沈黙の後、明羅は腕時計を眺め、
「ずいぶん遅くなってしまいましたね。もしよろしければ、夕食をご馳走させていただけませんか。」
「え・・・？」
思わず見上げた先の明羅は、もう取材器具を片付け始めていた。
「一応、最後の取材が終わったわけですから。ささやかですが、お礼をさせてください。」
「・・・でも、」
「最後の原稿を書き上げるまでに、またいくつか電話で質問させて

はいただきますが、けじめとして。駄目ですか。」
ずっと欲しかった誘いが、今更来るとは。
半年前、欲しくて欲しくて、どれほど可八に嫉妬したことか。
しかし今は、冷静にその誘いを受けられる。
「では、ありがたくご一緒させていただきます。」
「よかった。じゃあ、帰る準備をしてきますから、先にロビーで待っていてください。」
可八に電話をした。後ろめたい気持ちはない。明羅の心はどんなことをしても、可八にしかないし、愛姫自身にも明羅に対する思いはないからだ。
「ごめんね、準備していたでしょう?」
「いいえ、日持ちするものですから、大丈夫ですよ。」
可八には、自信があるのだろうか。明羅の思いが、自分から決して動かないということを。もしなかったとしたら、愛姫が諭してしまう。明羅がどんなに可八だけを見ているかを。
案内されたのは、銀座の裏通りにあるフレンチレストランだった。ほの暗い地下へ続く石の階段を下りていくと、その先には思いがけず広々とした明るい空間が広がっている。
「お連れ様が先にお待ちです。」
そう言われて一瞬首をかしげたが、案内された座席に近づいた愛姫は、足を止めてしまいそうなほど、驚いた。

第２４話

それは、瑞希も同じだった。何故三人分のセッティングがされているのかと思ったが、どうせ可八が来るのだろうと思って、沈んだ気分で待っていたのだ。

ところが。

「初めての顔合わせだろう？橋田さんを、きちんと引き合わせたことがなかったものな。」

愛姫の体は硬直した。どう座っても丸テーブルでは瑞希の隣になる。どう挨拶したらいいのか。薔薇のことを、明羅は知るまい・・。

「お体の方は、もうよろしいのですか。」

そう声をかけてきた左隣の瑞希を、正視できない。こんなに突然に、会いたい人に会わされても、どうしていいかわからない。こんな服で良かったか、アクセサリーはこれでよかったのか、口紅はとれていないか、そんなことばかり気になる。化粧をとった入院姿を、すでに見られているのだから、今更という感じもする。第一、変だ。あんなに好きだった明羅といる間には、こんなに見てくれを意識していなかったというのに。

「もう、大丈夫です。その節は、・・・お世話になりました。」

瑞希には、愛姫が自分を避けているようにしか思えなかった。愛姫に対し、自分はひどいことしかしていない。たかだか一週間お見舞いにいったくらいで許されるものではないし、一生、背負うべき罪を忘れてはいない。

愛姫は、そっと瑞希を見つめた。

横顔のラインが、切ないくらい整っている。

「少し、お痩せになったのではありませんか。」

愛姫の言葉に反応したのは明羅だった。

「そうなんです。瑞希は、あまり食べなくなったんですよ。お酒もやめてしまったし。」

愛姫ははっとした。だが、瑞希は軽く笑って見せた。
「俺も年だから。少し好みが変わっただけだよ。」
「そうなのか？精神的な問題とかでは・・？」
「俺はそんなデリケートな柄じゃないよ。気にしないでくれ。」
愛姫は、入院中に瑞希が繰り返し言った言葉を思い出した。
―　一生、罪を背負って生きていきます。できる限りの節制をし、少しでも償えるように生きていきます　―
（それを・・・。）
努めて明るく振舞う瑞希の様子が、怪しいと思った。愛姫は、自分が毎日思い出すことが、子どものことより瑞希自身のことだったと思うと、身を摘まされるような心持がした。
自分を責める気持ちを、失っている。瑞希の存在があまりにも自分の重荷を軽くしてくれたから、それで楽になりすぎているのだろう。
明羅は軽い気持ちで二人を会わせたのかもしれない。だが、愛姫にとってはあまりに重い再会だった。瑞希に対して、申し訳ない気持ちが募る。
明羅のリードで会話は続く。しかし、どんなに時間が経っても、瞳で少し微笑むのが精一杯だ。そして、瑞希を少しずつしか見ることができない。まともに目を合わせることは到底できそうもない。せっかくのフルコースの味も、全然わからない。
メインが終わりに近づく頃、突然明羅がテーブルの下に目をやった。
瑞希との空白をグラスの水を口に含み、ごまかす。が、明羅はそのまま席をたってしまった。
「すみません、橋田さん。すぐ社へ戻らなければならなくなりました。こちらからお誘いしておいて申し訳ないのですが、これで失礼させていただきます。」
突然のことで何とも言えずにいると、明羅は瑞希に二、三耳打ちして足早に去っていった。

瑞希と二人きりでは困惑する。どきどきする。何を話せばいいのか。話したいことはある。だが、この場で話すようなことではない。
「橋田さん。」
はっと顔をあげると、目の前にはいつの間にかデザートの皿がきている。
「兄の分、召し上がりませんか。」
愛姫は軽く首を振った。
「私はもう、十分ですから。瑞希さん、どうぞ。」
「いえ、俺は・・・。」
「ずっと、そうしていらしたんですか。」
愛姫の目が、明羅の前では見せなかった陰りをみせた。瑞希は、唇をひきしめた。
「私は、普通でした。不謹慎なほど、普通に生活してしまっていました。今日瑞希さんにお会いして、それを痛感しました。」
「普通でいいんですよ。あなたがこれ以上苦しむことはない。俺は苦しまねばならない。そのためには、自分で傷を刻み付けるしかないんです。」
「私は、瑞希さんが毎日お見舞いにいらしてくださって、自分でも不思議なくらい気持ちが楽になっていました。それは、瑞希さんが必要以上に苦しんでくださったからだと思っています。ですから、もう、ご自分を痛めつけないで下さい。」
「そんなことはできません。橋田さんは、今普通でも、たびたび思い出して苦い汁を飲むはずです。その限りは、俺も、忘れない。」
「ご自分の幸せを、すべて捨てるなんてことはありませんね？」
「捨てていますよ。捨てます。」
愛姫は眉をひそめた。
「一生、ですか。」
「もちろんです。」
「そんなこと、やめてください。お願いですから、やめて。」
「俺自身の問題ですから。俺の今までを反省するためにも、やめら

れません。」
瑞希はそう言ってデザートのシャンパンゼリーを無造作に口に入れた。機械的な動作が、食事を無機質なものにしている。
ずっと、そうだったのか。
ずっと。
苦しむために生きているのか。
苦しむための肉体をつくるために、食事をするのか。
瑞希は、自分がこれからどういう人生を歩むべきかと考えたとき、絶対に愛姫を好きになることだけはできないことだと確信していた。何があろうと、好きになる資格がないどころか、許されないことだと思う。愛姫を前にしてこんなに緊張するのは、意識しているからだ。だが、その「意識」の向いている先に気付きたくない。
もう、こんなにも愛してしまっているなどと、気付いてはならない。
店を出ると、春らしい暖かな風が頬を通り過ぎた。有楽町まで、無言で歩き出す。瑞希の少し後ろを、愛姫は付かず離れずついていく。九時すぎの銀座は、もう落ち着いている。駅が近づき、居酒屋周辺のにぎやかな通りにさしかかった。そこで愛姫は、瑞希に言った。普段なら言えないことだったが、今は別だ。
「瑞希さん。」
振り向いた瑞希を、見上げる。
「もう少し、お付き合いいただけませんか。」
「・・・いいですよ。」
皇居のお堀沿いの大通りは人通りがほとんどない。二人はゆっくりと東京駅方面へ歩き出した。水面に揺れる街灯の明かりと車のライト、そして信号の緑がこんなに鮮やかに闇夜に映える。
「さっきの、続きですか。」
瑞希の言葉に、頷く。
「私、今日瑞希さんをみて、自分を恥ずかしく思いました。平気な顔して生きていた自分を、許せなくなりました。」

「でも、あなたの心が癒えたとは思えませんよ。」
「いいえ。私、自分が思っていた以上にいい加減な人間だったんです。図太い神経でいたんです。瑞希さんを巻き込んで、大騒ぎするほどのことなんてなかったんです。」
時折、皇居へ向かう橋がある。その一つにさしかかり、瑞希は欄干にひじをかけた。
「俺は、もしあの時あなたが冷静で、堕ろして当たり前のような顔をしていたら、とっくに見放していましたよ。見舞いなんて一度きりだっただろうし、自分を苦しめようなんて思わなかったはずです。」
「だったら、そうしていればよかった。やっぱり、あなたに気付かれないうちに堕ろしていればよかった。そうすれば、瑞希さんをいたずらに苦しめることなんてなかったんですから！」
瑞希は、静かに愛姫を見下ろした。
「ためらい・・・ましたか。」
「・・・いいえ、怖かっただけだと思います。色々思うところはありました。妊娠なんて、私の人生で今限りだと思いました。他人に知られるのを恐れて・・・。ただの一度きりです。入院して目が覚めたとき。もし、まだ子どもが生きていたら、もう、殺せないと思った・・・その、一度だけです、産もうと思ったのは。結局、自分が可愛かっただけです。こんな女ですから、・・・見捨ててください。」
「本当の『こんな女』は、そういうこと言わないですよ。」
「嫌なんです、瑞希さんが不幸になるのなんて。せっかく生きているのに、進んで不幸になるなんて。」
「俺の罪は深い。あなたが知らないこともある。その付けを、全部あなたに負わせてしまったことが許せない。」
「私は、もう立ち直っています。それは、瑞希さんのおかげです。瑞希さんが、一杯背負ってくださったから。」
「俺は、何もしてあげられていませんよ。」

「毎日、病院にいらしてくださった。私、本当に嬉しかったんです。一人部屋にしてくださったのも、毎日買ってきてくださるお菓子も、薔薇の花束も、・・・瑞希さんは、私が欲しいものばかり下さった。どうして私が欲しいものばかりくれるのかって思うくらい。」
「・・・そんなことぐらいで、いいわけがない。」
「そんなことぐらいではありません。あの夜でさえ、私がずっと欲しかったものですもの！」
「そんなふうに、」
「そう思っています！だから、瑞希さんは私の望みをかなえただけですから。だから、また、幸せを見つけてください。そのために私ができることがあれば、何でもします。」
瑞希は、車のテールランプに照らされた愛姫の頬が濡れているのに気付いた。
「あなたを痛めつけた俺が、どうして幸せになれますか？」
「私は幸せです。だから、瑞希さんも幸せになってもいいでしょう？そんな痩せた姿になるほど苦しんでるなんて、悲しすぎる。私なんかが何を言っても駄目でしょうけど、私では何の役にもたたないでしょうけど、そんなに、ご自分を痛めつけないで・・・！」
崩れるようにうなだれた愛姫に、何と言えばいいのかわからず、瑞希は唇を噛んだ。これ以上は、ただの堂々巡りになるのがわかる。
こんな形で愛姫を苦しめる気はなかった。これでは愛姫が入院していたときと立場が逆だ。愛姫のことを想うと、食事をする気になれなかった。愛姫が入院していたときは愛姫を元気付けることで一生懸命になっていたが、それが過ぎて、初めて自分を見つめなおすことになった。
今までの自分の人生が、胸を張れないようなものだと痛感した。愛姫が兄を好きだということを思い出すと、その差を歴然と見せ付けられた気さえする。そのいい加減な自分を、労わるようなせりふを言わないで欲しい。愛姫は、自分のことを知らなさすぎる。だから、やさしいことを言えるのだ。

「俺は、橋田さんにそんな風に言ってもらう資格、ないですよ。」
「資格があるないの問題ではありません。」
「橋田さんが軽蔑してやまない種類の男です。女を出世の道具としか思っていないし、平気で捨てるし、平気で抱いてた。女なんて、物さえ与えておけばいくらでも言いなりになると思って馬鹿にしていた。結婚だって、ステイタスの一部くらいにしか考えていなかった。それを壊されたからといって、本当は兄を責めることなんて、初めからできなかったんですよ。ただ、変な意味では努力していたから、それを台無しにされたことが悔しかっただけだったんです。それこそ、あなたに慰めてもらうほどの痛みなんて感じちゃいけないようなもんだったんです。」
「でも、瑞希さんが明羅さんを思いやって一人で苦しんでいたことは・・・真実です。男の方があんなに切ない表情をしていたのを初めて見ました。その痛みだけで、十分です。」
水面から冷たい風が上がってきた。
何か愛姫が傷つくようなセリフで、この場を閉めてしまえばいいだろうか。だが、これ以上愛姫を傷つけまいと誓った限りそれはできない。
「橋田さんが・・・幸せになったら、少し考えます。それで、いいですか。」
「私はもう、幸せです。私が欲しいものを、瑞希さんがみんな下さったから。」
「それで癒えましたか？あなたの傷が、すべて！癒えるわけがない。」
「瑞希さんの人生は、私の人生に左右されていいものではありません。そうでなくても、瑞希さんは今までの人生で築きあげたものをすべて失ってしまったではありませんか？もし過去に後悔があるのでしたら、またすべてを一から積み上げていかなければならない今なら、すべて清算することができるでしょう？」
「汚い過去ですよ。あなたのような人に、とても言えないような。」

「だって瑞希さんは全部失ってしまったんですよ？婚約者も、仕事も。それで十分報いを受けています。」
「あなたへの罪は？俺、全然報いを受けていない。」
「私と一緒に苦しんで下さった。はじめ、瑞希さんはもっと冷酷に私をつきはなすと思っていました。そうしたら、私はきっと瑞希さんの幸せを願うなんて心の広いことができなかったと思います。でも、今は心から。私の幸せよりも、ずっと、あなたの幸せを・・・。」
　思わず出た本音に、愛姫は思わず言葉をつまらせた。そして、瑞希もそれを感じて、戸惑った。愛姫から、そんな言葉をもらえるとは思っていなかった。だからその分、脈が高鳴った。　今まで、決して感じたことのない思いが全身をかけぬける。
「今の俺にとって、幸せは、ただひとつしかありません。でも、それは決してかなわない。」
「なぜ・・・。」
　言ってしまおうかと思った。
　こんなシチュエーションで、あんなセリフを奏でられたら、堪えられるものも堪えきれなくなる。
「可八のことがあるからですか。可八が・・・瑞希さんの幸せの障害になってしまうからですか。」
「・・・いえ、違います。」
「では、なぜ・・。瑞希さんなら、かなわないことはないと思います。」
「そんなふうに言わないで下さい。俺には、この世でひとつだけ、どうしても願ってはいけないことがあるんです。」
　それは、愛姫も考えていたことだ。この世で唯一つ、願ってはいけないこと。決してかなえられないこと・・・。
　愛姫の瞳が、明るく見える。
　瑞希は、視線をゆっくりとそらし、欄干から離れた。
「そろそろ行きましょう。もう、遅いですから。」

東京駅までの静かな道が、瑞希の悲しい沈黙を増徴しているようで、切ない。
愛姫にはわからない。瑞希が、何をそんなに禁じえているのか。
瑞希にとって、この世でひとつだけ、願ってはいけないこととは・・・？
瑞希の思いを、愛姫には想像できない。想像したら、自分の都合のいい方向にしか動けなくなる。
「寒くありませんか。」
少し振り向いた瑞希に、愛姫は
「大丈夫です。」
と答えた。風に乗って、かすかにダージリンの香りがした。
瑞希は、愛姫の好きなものばかり持っている。それは、偶然なのだろうか。それとも、運命なのだろうか。
瑞希が自分のものになるとは思っていない。
そして瑞希も、愛姫が自分のものになるとは思っていない。
広い広い通りのつきあたりに、東京駅の時計が薄緑にぼんやりと浮かんでいる。
「では、俺は大手町から地下鉄に乗りますので。」
「はい。・・・明羅さんに、ご馳走様と伝えてください。」
「わかりました。」
次に会うのはいつなのか。
こんなふうに二人で話す機会など、もう、皆無なのか。その行方は二人しだいなのに、積極的に動くことを、二人ともができないでいる。
あの夜があるから。
今の感情は、あの夜があるから。
でも、近づけないのもあの夜があるから。
「おやすみなさい。」
小走りに去る背に、紺色のスーツが翻った。
（なぜ・・・。）

どうして、好きになってしまっただろう。
明羅の後姿を、こんなふうに見送った日を覚えてる。だが、その弟をまた、違った思いで見つめている。
片思いを、いつも呑み込んできた。だから、愛姫はそれ以外の方法をしらない。恋とか愛とかいう甘い言葉は、飾り物のお菓子でしかない。本当の思いは、言葉になどならない。どんなに難しい漢字を用いても、表現などできない。好きなほど避けようとする本能を、破くこともできない。もっと無防備な少女の頃に経験しておくべきことをしなかったから、愛姫の恋愛観は中学生にも劣るほどなのかもしれない。
可八と離れ、本当に独りになったとき、自分の本当の人生が始まる。
そのとき、どうすればいいだろう。何を、望むだろう。可八なしの人生とは、いったい何なのだろう。煩わしくて疎ましかった存在がいなくなることを本当に望んでなどいただろうか。いて当たり前の存在を、いなくなったときのことなど、本気で考えてなどいただろうか。
瑞希は、どうするだろう。
可八と同居せずにあの家を出るなら、長年誰よりも強い絆で結ばれてきた兄と離れるとき、何を思うのだろう。
見上げた空は、満月だった。
(満月の夜は、願い事をするんだっけ・・。)
占いの雑誌をむさぼるように読んだ頃を懐かしく思う。
(私は年を経るごとに、失ってばかりいるのではないだろうか・・?)
今、欲しいものはない。
だが、もし叶うなら。
もし、この一生涯でただひとつ、願いをかなえてもらえるのだとしたら。
願いごとを、迷わない。

第２５話

「転勤！？」
それは、突然のことだった。
可八との式を一カ月後に控えた五月。明羅は瑞希に、離島への転勤を告げた。
「それって、左遷・・？」
「そうじゃない。五年という期限付きだし、戻ってきたらそれなりの地位も与えられる。」
「だけど、島なんて・・・。」
「調度いいじゃないか。瑞希も他に住むところを探さなくていいんだし。」
「そういう問題じゃないよ。理由は？兄貴がどうして今の時期に、異動しなきゃならい？！」
食いつくような瑞希に、明羅は冷静な目で、それをたしなめた。
「理由なんて関係ない。あるとすれば、俺が取材中に、取材対象に手を出したからだ。とにかく、俺は転勤する。可八を連れて。それだけだ。」
瑞希は、震える唇を一度ひきしめ、聞きなおした。
「そのこと、藤木さんに言ったのか。」
「・・・言った。」
「・・・橋田さんには？」
「まだだ。だが、挨拶はしなければならないと思っている。可八の保護者代わりの人だからな。」
「藤木さん、島の暮らしをわかっているのか。」
「俺が、不自由な目にはあわせない。」
「・・・まあ、自分のせいだという自覚があれば、文句は言わないだろうけど？」
その瞬間。

瑞希の胸倉を明羅の手がつきあげた。
「そのセリフ・・・！可八に言ったら承知しないぞ・・・！」
兄のこんな目を、初めて見た。それは、兄ではなく、男の目だった。
瑞希には、わからない。これほどの犠牲を振りまいてまで一緒になる価値が、可八のどこにあるというのか。
殺人犯の娘だ。
例え瑞希に罪があっても、可八のそれは変わらない。瑞希は罪を背負おうと懸命だ。
では、可八は？
例え本人に直接の責任がなくても、明羅や瑞希、そして愛姫の苦しみをただ傍観していていいというのか？第一、可八は周りの不幸を知っているのか。
明羅を左遷させ、瑞希の将来を奪い、そして愛姫を苦しませて。愛姫の苦しみは、瑞希自身のせいかもしれない。だが、すべての元凶は可八のはずだ。
責めずにいられない。
可八の存在自体がひきおこす不幸を、ただ見ているだけなんて、我慢ができない。
「あの女は、一人だけ、いつも安全な場所にいないか？今までは橋田さんに守られ、次は兄貴に守られ！それで彼女は何をした？何をしてくれているんだよ！周りを不幸にしているだけじゃないか！」
明羅の手が、瑞希から離れた。
「瑞希のことは、悪いと思っている。」
「兄貴のことは？橋田さんのことは？」
「これ以上苦しめというのか？殺人犯の娘と罵られて生きてきて、ずっと日陰にいて、これ以上何を苦しめというんだ？俺たちは、少なくともそんな目にはあっていない。だったら、自分の苦しみは、自分で背負えばいい。自分で背負えるものは、自分で背負えばいいだろう？」

「不条理だ！何で俺たちまでとばっちりを受けなきゃならない！どうしてそれを、黙って耐えなきゃならない？俺の罪は、俺が償う。でも、他人の犯した罪まで、背負う義務はないはずだ！」
「可八だって、罪など犯していない。だが、ずっと重荷を背負ってきている。」
「殺人犯の娘だ！その血を受け継いでいる。だからその汚れた血を再発させないためにも、苦しんで当たり前だ！」
「いつもそう言う！血？そんなもの、橋田さんに育てられた可八には、もはや問題にならないものだ。」
「兄貴の記事・・・！橋田さんの家庭だって、見事に壊されている。橋田さんの母親なんか気が狂って自殺までしているんだぞ！それが罪ではないのか？関係ない俺だって！それは罪ではないのか？」
「じゃあ、可八にどうしろというんだ？」
「罪を感じているのなら、一人で生きていくべきなんだ。自分の罪で周りを不幸にしないうちに、他人に関わって生きていくことを諦めて一人でいろってことだよ！」
「瑞希！お前にはそんな冷たい心しかないのか？」
「当たり前だろう？仕事は首、婚約は解消、例えその辛さが癒えたって、失ったものは二度ととりかえせないんだからな！」
マンションから飛び出した。
少しでも明羅と顔をあわせたくなかった。明羅が一番つらいとわかっていて、言わずにいられなかった。言うまいと思っていたことを、口にしてしまった。
可八の辛さや悲しみを直接知らないから、我慢ならないことを言ってしまえたのかもしれない。しかし、わかっていたとはいえ、兄までもその火の粉をかぶるとは。
わかっていたこととはいえ、やはり納得などできない。
時計を見ると、まだ八時すぎだった。
行く当てもない瑞希は、何となしに地下鉄に乗り、内幸町で降りていた。

もういるわけがないと思いながら、愛姫の事務所の前まで来ていた。
瑞希には、友達がいない。
同僚とも仕事を首になったらそれきりだし、兄がいなければ、話し相手もいない。
ビルの七階には、まだ明かりがついていた。
あの光の奥に、愛姫はまだいるのかもしれない。そう思って、電柱に体を預けて、待つことにした。別にいなくてもいい。あの明かりが消えて、それでも愛姫がでてこなければ、それまでのことだ。
愛姫に会ってどうしようというわけではない。ただ、行くあてが他にないだけ・・。
愛姫は、まだ働いていた。雑用が積もってどうしようもなくなっていたからだ。他の所員も、ちらほら残っている。
と、何となしにビルの外を眺めた経理の若い女性が、声をあげた。
「あの人、ずっとこっち見てるわ。」
「え？」
別の女性が同じように外の様子を伺っているようだ。愛姫は、書類をファイルにとじるための穴を空けながら、（変質者か？）と思いながらその会話を聞いていた。
「ね？十五分くらい前もああしていたのよ。」
「うちの事務所に恨みがある人じゃないでしょうね？」
「さあ。・・・でも、すごいハンサムじゃない？」
「・・・本当だ。」
愛姫は、その声に、自分もデスクから外の様子を見やった。
（瑞希さん・・・！）
驚いて机のものがいくつか床に散らばった。
「ねえ、あと少ししてまだいるようだったら、一応警察に電話しようか。」
「そうね、職務質問くらいしてもらったほうがいいわよね。」
その言葉にあわてたのは愛姫だった。瑞希が何のつもりでここに

来ているのかは知らない。だが、怪しまれて警察になどつれては行かせられない。
愛姫はあわてて残りの仕事をかばんに詰め、事務所から駆け出した。
ビルの狭い自動ドアを抜けると、瑞希の姿が鮮明に見えた。
瑞希がそれに気付き、頭を下げるやいなや、愛姫はその腕を力いっぱいつかんで、事務所前の通りから瑞希を引っ張り出した。事務所の彼女たちが見たら、完全に怪しまれるだろうが、警察に通報されるより何十倍もましだ。
大通りに出て、愛姫は初めて瑞希をきちんと見た。
「瑞希さん、あんなところでずっと事務所を見上げていたら、怪しまれます。警察に通報されるところだったんですよ？」
愛姫の突然の不可解な行動をやっと理解できて、瑞希は苦笑した。
「そうでしたか。確かに怪しいですよね。」
「・・・どう、なさったんです？」
改めて、瑞希を意識する。そう、思いがけず瑞希に会えた。あんなに会いたかった瑞希に。　瑞希の目が、切なく微笑んだ。
「すみません。兄と、喧嘩をしまして。」
「明羅さんと？原因は、可八のことですね。」
「まあ。」
「すみません。いつまでも、・・・解決はしませんね。」
「橋田さんに謝ってもらおうと思ってきたんじゃないんです。ただ、・・・ほかに、いく当てもなくて。俺、こういうとき頼りにする友人もいないんです。」
瑞希の悲しい本音に、愛姫は優しく同調した。
「・・私もそうです。でも、私は自分が悪いんです。他人をあざけったり、蔑ろにばかりしてきたから。」
「・・・俺も、そうですよ。学校を卒業して気付きました。本当のつきあいをした友人は、いなかったことに。自分がどんなに身勝手に他人とつきあっていたかどうか。」

「わかります。私も、そうでした。気付いてから、初めて自分から年賀状や手紙を書いてみたりして。」
「そう、そうなんです。」
瑞希の表情が和らぎ、愛姫はほっとした。瑞希が思いつめた表情でいたのは初めて見たときにわかっている。
「ノンアルコールのカクテルなら、つきあっていただけますか。」
「・・もちろんです。」
新橋の高級ホテルのバーは、弁護士という肩書きのある愛姫にでさえ敷居が高い。しかし、瑞希という相手がいれば、堂々と入ることができる。
二歩前を歩くスーツの肩のラインがきれいすぎる。こうして見上げる先があることに、感謝する。
テーブル席に座り、瑞希はシンデレラを二つ注文した。瑞希は、まだアルコールを絶っているのか。
「別にカフェでもよかったんですけど、・・・今日は、バーの気分だったんです。」
「私も、バーの雰囲気は好きです。初めからアルコールは苦手でしたけど、何度か友人と来たことがありますから。」
「そうでしたか。意外ですね。」
「そうですか？けっこう不良なんですよ。」
「それが本当なら、安心します。橋田さんは、どこか遠い人のような気がするから。」
フルーツの香りが漂うフルートグラスが二つ、漆塗りのテーブルに置かれた。重いグラスの透明なふちに、唇をつける。
「何ていうのか・・・。天上の人が、地上に降りてきたような。」
愛姫はクスリと笑った。
「面白いことをおっしゃるのね。」
「でも、ぴったりの表現だと思いますよ。」
「私は、特別なものなど何一つ持っていません。平凡で、色々と中途半端な人間です。」

「それは・・・謙遜ですよ。」
愛姫は再び首を振り、再びグラスに口をつけた。瑞希は明羅が言ったとおり、アルコールを口にしない。それは、今だけのことでないのだろう。
と、そのときだった。
「瑞希？」
艶やかな女の声が後ろから聞こえてきた。
瑞希の視線の先に、黒いサテンのドレスの美女がいた。
その後ろには若いホストのような軽いみかけの男がいる。
瑞希の眉間があきらかにゆがんだ。
「久しぶりね。こんなところで会うなんて。」
女は、これ見よがしに愛姫を舐めるように見下ろし、そして鼻の先で笑った。
「ずいぶん素敵な趣味になったものね。」
それが褒め言葉でないことくらい、愛姫にもわかる。瑞希の目が、怖いくらいに釣りあがった。
「そんな下らない男をひきつれてる女に言われたくない。」
「別れた女には非情っていうの、本当なのね。結婚しても女を利用しつくす男だとは思っていたけど。」
「・・・これ以上口を利く気はない。早くどこかへ行けよ。」
低い、暗い声だった。
女は再び愛姫を見下し、腕組みをして去っていった。何かきつい香りが残る。これが高級香水というものの匂いなのか。
「すみません・・・。」
瑞希はうつむき加減で宙をにらみつけている。
愛姫は、瑞希がどんな女性とつきあっていたのかを思い知った。自分にはないものを持っている女性がいる。彩られた爪先や、いろいろなものに縁取られた作られた顔や、一日でつま先がどうにかなりそうな靴。美しい人は確実に存在し、瑞希はそういう女性とばかりつきあってきたのだ。自分のような地味な女など、女のうちに入

らないのかもしれない。
だから、あんなに無防備に自分を抱けたのだ。女じゃないから。
平気で。
「本当に、すみません。あんな女とでも付き合えた自分を、今は心のそこから軽蔑しているんです。橋田さんにも、・・・侮辱されても仕方ないと思います。」
「・・そんな風には思いません。とても、綺麗な方でしたわ。こういう場所がよく似合う・・・。同じ人間で生まれてきたのに、こんなにも差があるものなのですね。でも、瑞希さんはああいうゴージャスな女性でも釣り合いがとれますわね。」
「・・・そうですね。俺には、ああいう見てくればかり磨いて満足してる安っぽい女が似合うでしょうね。」
「いえ、そうではなくて、」
瑞希は、あんな女とつきあっていたことを愛姫に知られたことがたまらなく恥ずかしかった。だが、それを愛姫が知る由も無い。
過去を思い、後悔するたびに思う。どんなに愛姫に近づきたいと思っているか。どんなに愛姫に相応しくなりたいと思っているか。
軟派な男だと思われたくない。いい加減な男だと思われたくない。信頼できない男だと思われたくない。
例え一生報われない想いだとしても。
「瑞希さんなら、どんな女性でも振り向かせられないということはないのでしょうね。それは、とてもうらやましいことです。」
「そうでしょうか。」
「だって、私のように一生一人かもしれないなんてことを恐れて生きてきる人間もいるんですよ?」
瑞希は唇を噛んだ。
「あなたのような人を選ばない、兄貴のような男こそ愚かだと思いますよ。」
「可八は、私のように人を蔑んだりしませんから。守ってあげたくなるような直向さも持っているし。」

「俺には、そんなものどうでもいいことですけどね。」
「・・・そうですわね。」
それは、どういう意味なのか。
利用価値やお金で女を選んでいた瑞希には、やはり性格の是非など関係ないのだろうという意味だったのか。
瑞希が言いたかったのは、人を蔑まないとか直向さとかそんなものがあろうとなかろうと、愛姫を好きである以上、どうでもいいことだということなのに。
グラスの中が空になった。
瑞希は黙って席を立ち、ホテルから外に出た。愛姫が、その後をついてくる。
気まずい雰囲気だった。
告げなければこのままだと思った。誤解されたままいたら、これっきりかもしれないと思う。今の愛姫には、瑞希の気持ちなど少しも伝わっていない。
では、告げればいいのか。
あんな目にあわせておきながら、図々しくも愛しているなどといえばいいのか。
「おうちへ、帰れそうですか。」
そうだ、兄と喧嘩をして飛び出してきたことを忘れていた。時計は十時を回っている。
「もう少し、兄が眠るまでは街を彷徨います。すみませんでした、こんなことで付き合わせてしまって。」
「そんな。バーなんて久しぶりでいい夜をすごさせていただきました。」
「あんな不愉快な思いをさせてしまったんです。そんなふうに言っていただく資格はありません。」
「わたしは、気にしていません。」
瑞希は愛姫の瞳をのぞきこむように見た。それは、どういう意味なのか。瑞希に興味のない愛姫には、どんな女が現れようと、関係

ないということなのか。
　せっかく誘い出したのに、愛姫に好かれるようなことが何一つできなかった。逆に、嫌われるようなことをしたのではないか。
「あの、」
瑞希は、もう少しチャンスが欲しいと思った。この時間を、もう少し引き延ばしたかった。愛姫と、もう少し一緒にいたいと思った。
「もし時間が許すのなら、・・・もう少し、一緒にいていただけませんか。」
　愛姫は、どきりとして、唇を開いた。瑞希がどういうつもりでそんなことを言うのかわからない。しかし、それは嬉しい誘いだ。愛姫のただひとつの切ない願い。それが良い方向へ回りだしていないだろうか。
　二人は、この間の夜と同じように、皇居のお堀沿いの歩道をゆっくりと歩き出した。
　瑞希は、話をきりだした。
「兄が転勤すること、ご存知ですか。」
　愛姫は、驚いて瑞希の横顔を見つめた。
「いいえ。・・・まったく。」
「離島です。藤木さんとの結婚と同時に。」
「では、一ヶ月後に？」
「そうです。」
愛姫は、眉根を寄せた。
「可八の・・・せいですね。左遷ですね。」
「兄は、そのことを藤木さんに知らせたら承知しないとすごまれました。」
「それで・・・喧嘩を？」
「ええ・・・。」
　橋の欄干がどうしてもちょうどいい。歩きながら話せないことがある。
「言うつもりのないことまで、言ってしまったから。」

「可八と結婚する以上、逃れられないとは思っていました。私がそれを申し上げたとき、明羅さんはきっぱりおっしゃった。それは、障害ではないと。」
欄干に両肘をついた瑞希が、愛姫を見下ろした。
「覚悟を、とっくに決めていらっしゃると思って、もう、何もいえなくなりました。」
「・・・でしょうね。俺も、何度も何度も言いました。でも、それをものともしなかった。」
水面に街灯の白い光が反射して揺れている。
「俺の罪を思えば、藤木さんには何も言えないと思っていたんです。でも、実際はそうもいかなかった。俺の罪は、俺が背負います。でも、藤木さんのことで、兄が業を背負わねばならないのは許せない。橋田さんが苦しむのも、俺が苦しむのも、許せない。俺には、藤木さんがわからないから、藤木さんが一人、いつも守られているような気しかしない。今まではずっと橋田さんが背負い、そしてこれからは兄が背負う。藤木さんは、何も背負っていないのではないか・・・。そう思うと、言わずにいられなかった。」
「母が死んだとき、私は可八を一生許さないと思いました。可八に罪はないと知りながら、そうせずにはいられなかった。可八を一人の人間と認めるようになったのは、つい最近のことです。理屈では、ないんです。頭でわかっていても、仕方のないことがあります。瑞希さんが悪いことはありません。」
「橋田さんは大人だ。俺のことだって、どうして許してくれるのか、わからない。」
愛姫は、瑞希を見る目をゆっくりとそらせた。
「私は、ものわかりのいい大人ではないですよ。」
「兄と藤木さんのことだって、・・・どんなに心を痛められたか、想像できます。なのにあなたは、それを許すという。」
「人の感情は、理性でコントロールしきれるものではありません。明羅さんのあれほどの強い思いを、どうして認められないでしょう

？私には、入り込む隙などまったくなかったのですから。」
「でも、俺は・・・。」
「瑞希さんは家族ですもの。そうそう認められないのは当たり前です。現に色々火の粉をかぶっていらっしゃるし。私が可八の肉親代わりというのなら、私も瑞希さんに償いをしなければならない立場にあります。」
「俺は、橋田さんに何かしてもらおうなんて、思っていません。第一、俺にそんなこと思う資格はない。」
「瑞希さんなら、また新しい幸せや成功をご自分の手でつかまえられると思っています。でも、可八がその障害になることが、今後またあるかもしれない。そのとき私に何ができるのかといわれれば、・・・ないのかもしれませんが。」
「何もしなくていいんですよ。」
「でも、また大事な縁談を壊してしまうかもしれない。」
「・・・それは、ないですよ。」
「どうして・・・？」
愛姫の大きな瞳が、瑞希の心を飲み込みそうだった。
告げてしまおうか。
このまま一生、誓いどおり、一人でいるか。
「結婚は・・・しませんから。」
「そんな寂しいことをおっしゃらないで。私のことは、気になさらないでください。いいんです、瑞希さんは、瑞希さんの幸せをみつけてくだされば。」
「俺の幸せは、叶わないというより、かなえられてはいけないものです。」
「先日も、瑞希さんはそうおっしゃった。そんなに、幸せを捨てねばなりませんか。」
じれったい。
愛姫が自分の気持ちを知れば、もう何も言えなくなるだろうか。
だが、それはどうしようもないほどの禁句ではないか。

愛姫が言ってくれたら。
自分を、こんな自分でも、思いをかけてくれると言ってくれたなら。
多分、もう、迷わない。
しかし、愛姫が自分を拒絶したら、こんなふうにあうことさえ叶わなくなる。そして、一生後悔を飲み続けることになる。その余波は、愛姫にも及ぶだろう。
と、アスファルトが水に濡れた独特の匂いが鼻をついた。雨が降るサインだ。
帰ろうと思うより早く、大粒の雨粒がばらばらと落ちてきた。壕沿いの柳の細い枝では、雨を防げそうに無い。
瑞希は素早く上着を脱ぐと、愛姫の頭にかぶせた。
「無いよりはましでしょう？さあ！」
もう額から雨がしたたってきている。
激しい初夏の雨だ。
瑞希に腕を引かれ、愛姫はパンプスの中で水音をたてて走った。通り雨ならいいが、こんなに大雨では瑞希のスーツも、シャツも、駄目になってしまう。いつもは空車の光を連ねているタクシーも、こんな時には陰もない。
お堀沿いの人気の無い整然とした歩道をただひた走る。大通りの向かい側ならオフィスの影に身を寄せることもできるが、次の信号まではだいぶある。道がまっすぐな上、深夜のためか、実際より長い距離に思える。服が肌にはりついてしまっている。大通りを走る車の水飛沫が、時折足元にかかる。とりあえず雨宿りをするために、橋桁の屋根つきの見張り台に身を隠した。
全身ここまで濡れてしまっては、どうにもならない。瑞希の上着も、水を吸って重くなってしまっている。愛姫の革鞄の中の薄っぺらいハンカチでは、顔を拭うので精一杯だ。
しかし、ないよりはましと、愛姫は瑞希にそれを差し出した。
「どうぞ、よろしければ、お顔だけでも拭ってください。」

瑞希は、濡れた前髪を振った。
「いえ、橋田さんがつかってください。」
「私は、瑞希さんのスーツをお借りしたので、大丈夫ですから。お嫌で・・なければ。」
「嫌だなんて、そんな・・・。」
薄桃色のハンカチを受け取り、瑞希は額と、頬だけを軽く押さえた。
愛姫のスーツの上着は、原型のハリを失い、体にへばりついている。瑞希は、濡れた髪が化粧の落ちた頬に張り付いている愛姫に、今までに見たことの無い色気を感じた。昼間の雰囲気とはまるで違う、野生的な眼に魅かれる。
綺麗だと思う。
誰が何といおうと、愛姫は美人だ。
こんな姿を見せられては、理性を失いそうになる。このままその濡れた体を思い切り抱きしめたくなる。
そして、愛姫も。
髪が濡れたことで瑞希の輪郭がさらに凛々しく際立つ。瑞希の白いシャツからは肌が透けている。どきどきする。月並みな表現だが、どうしても、それがぴったりくる。ひきしまった肩から腕の筋肉に、本能的な魅力を感じずにいられない。
十一時三十分をすぎている。
そろそろ駅に向かわないと、電車に乗れなくなる。
しかし。
瑞希は、このままでいたいと思った。一晩、こうして雨がやむのを待ってもいい。
愛姫も、いつまでも瑞希とこうしていてもいいと思った。そろそろ帰らなければとわかっていても、動こうと思えない。
こうしていたい。一生。
瑞希といたい。
愛姫といたい。

帰ろうと、言い出せない。
寒くなってきた。だが、この時間が終わってしまうのは惜しくてたまらない。
愛姫に伝わるだろうか。
瑞希に伝わるだろうか。
この思いが。
と、そのときだった。
沈黙を破るように、携帯電話の着信音が鳴り響いた。
それは、瑞希のものだった。
だが、瑞希はそれをとろうとしない。
思わず、愛姫は瑞希に言っていた。
「電話・・・、よろしいんですか。」
「・・・ええ。」
「明羅さんからかもしれないから・・ですか。」
「・・・いいえ。」
はっきりいわなければ、一生愛姫にはわからないだろう。わかってはいけないのだと言い聞かせている。だが、このまま一生耐えることなどできるだろうか。それが罪の償いだとしても、・・・いや、それが償いといえるのか。
よくわからない。
この状況で、もう、平静を保てなくなっている。理論的になど考えられない。
長い呼び出し音が消えた。
瑞希は、愛姫をまっすぐに見つめた。
愛姫は、その眼差しに心を射られるようで、おもわず目をそらせた。
「あなたと、こうしていたいんです。」
「・・・。」
「一生でも、このままでいたいから。」
愛姫の身体が、震えた。

何と返せばいいのだろう。
瑞希の言葉を、鵜呑みにしてもいいのだろうか。第一、これは、夢ではないのだろうか。
黙っていたら、拒絶だと思われてしまう。
そうではない。愛姫も、瑞希と、ずっとこうしていたい。
だが、声が出ない。無理に息を吐き出しても、奇声しかあがらない気がする。
瑞希は、後悔した。
やはり、いうべきではなかった。
こんなに気まずい雰囲気になるのを、予想できないわけではなかっただろうに。
しかし、わかって欲しかった。
他の女と幸せになれなどと、言って欲しくなかった。こんなにも愛姫を思っていることを、わかって欲しかった。
その甘えが、愛姫を苦しめると知っていたのに。
瑞希は、唇の端を噛み締めた。
「すみませんでした。答えは、わかっているのでいりません。あなたをあれほどの目にあわせておきながら、図々しいとは思っています。でも、わかって欲しかった。俺は、一生誰とも結婚するともりはないし、そういう幸せを求めるつもりもありません。償いという言葉をあなたが嫌うのなら、その理由は、ただ、俺が好きなのがあなただからです。あなただけは、好きになってはいけないと知りながら・・・ただ・・・。」
愛姫も自分を思ってくれているかもしれないという奢りがあったから、言ってしまったのだろう。しかし、もう、どうしていいかわからない。
遠くで、雷が鳴っている。
雨は、とても止みそうにない。
愛姫は、ゆっくりと深く息を吸い、瑞希の濡れた上着を握り締め、言った。

「どうして、・・・答えがわかっているなんておっしゃるんですか。」
「俺は、あなたに好かれるようなことを何もできていないから。逆に、嫌われるようなことだけ、している。」
「私だって、瑞希さんに好かれるようなことを何もしていない。でも、私には瑞希さんを嫌う理由はありません。あったら、こうして、一緒にいようなどと思いません。」
「嫌われていないのは、最高の救いです。それで、十分です。」
「どうして、そんなふうに一人で納得してしまうんです？」
車さえ通らなくなった、何斜線もの大通りぞいの夜のオフィス街には、もう、雨が打つ音しか聞こえない。
「こうしていたいのは、・・・一生、こうしていられたらと思うのは、私も同じなのに・・・！」
手が震えているのは、寒さからだろうか。それとも、この幸せを全身が感じているからなのだろうか。
あの夜を、始まりとしてもいいのだろうか。
亡くした子どもを二人そろって想い生きていってもいいのだろうか。
雨の音が、熱情を呼び覚ます。
瑞希のシャツに透けた肌が愛姫の身体の奥を熱くする。
愛姫の濡れた黒髪が瑞希を駆り立てる。
禁区を越えてもいい。
どんな罰を受けてもいい。
例え今、雷に打たれたとしても、後悔はしない。
瑞希の腕が愛姫の髪に伸び、愛姫の手が瑞希の引き締まった腕に触れた。
目を閉じれば、霧に溶けてしまいそうな夜だった。

第２６話

わずかな雨の途切れをつかまえ、駅まで走って家へ帰った。
地下鉄の窓に映る自分の顔を見れない。瑞希は、時間が経てば絶つほど後悔しそうで怖かった。初めて女を愛し、それが成就したというのに、この切なさはどうだ。いっそ嫌われたほうがどれほど楽だったろう。心が熱くなるのと比例して、苦さが増していく。
瑞希は、愛姫の唇の手前でその手を引いた。
自分の誓いを忘れたのかと、叱責する声がどこかで聞こえたからだ。
愛姫だけは好きになってはならないと、知っていたはずではないのか。
だが、愛姫が自分を同じくらい思っていてくれるのなら、事情は違ってこないだろうか。
どれほど、抱きしめたいと思ったか。
あのまま一晩雨宿りをしていたら、絶対に二度目の過ちを犯してしまうと思った。
だから、後ろ髪引かれる思いで、その手を振り払ったのだ。
ずぶ濡れの状態でマンションに戻ると、玄関先には明羅が立っていた。
「こんな遅くまで、どこへ行っていた？」
疲れた声だ。可八との結婚が一筋縄にはいかないことでダメージを受けているのだろう。
「・・・兄貴が心配するようなことはしていないよ。」
明羅は瑞希の脇に立ち、少し口を閉じた。
「酒・・・飲んでいたわけではないんだな。」
「・・・・。」
「そこまでする理由は何だ？」
明羅の目が鋭く光った。

「女の影がないのは、婚約を解消したからだとしても、食べるのも、眠るのも、今までと違うのはなぜだ？何がある？」
「別に。・・・兄貴は、自分のことだけ考えていろよ。島の暮らしは考えているほど甘くないぜ。十分な注意をしておいたほうがいい。明日下見だろ？早く寝ろよ。」
瑞希の肩を、明羅がつかんだ。
「自分を痛めつけなければならないことがあったのか？」
噛んだ唇が冷たい。額にへばりついた前髪が目に入りそうだったが、瑞希はそのまま明羅を凝視した。
例え兄が何といおうと、愛姫とのことを話せはしない。
甘い夢のような夜に熱くなった心を後悔せねばならない理由は、誰に話すわけにもいかない。
愛姫が、堕胎の事実を絶対に誰にも話さないように。
無言で明羅を振り払い、そのままシャワーをあびに浴室に入った。
熱く激しい水飛沫を全身に打ちつけ、瑞希は目を閉じた。
愛姫の指先を思い出す。
自分の腕に触れた部分が、まだその感触を覚えている。
初めて知った。触れたい女に触れたときの心の動きを。胸の奥からつきあげるこの感情を、表現する言葉など存在しない。

次の日の昼。島へ行く身支度がほぼ終わった可八のところへ明羅から電話がかかってきた。　リビングでぼんやりとジュースを飲んでいた愛姫は、可八の話をそばで聞きかじり、何となくその内容を察した。
「そういうことなら、仕方ありませんから、どうぞ、瑞希さんを・・・。」
そんな会話中の可八の肩をたたき、愛姫は軽く頷いた。可八は保留のボタンを押し、言った。
「瑞希さんがひどい熱で、自宅で絶対安静と診断されたそうです。叔母様にあたる方は海外に出張中で他に看病する人がいないので、

今回の下見は延期しようと・・・。」
「でも、引越しの荷物は明日届くのでしょう?契約とかも済ますって言ってたわよね。」
「ええ、でも私だけでは多分話にならないし、契約はできませんから。」
「それで何とかなるものなの?」
「・・・。」
愛姫は軽く唇を噛み、少し躊躇はしたが、思い切って受話器を取った。
「橋田です。可八から事情は聞きました。私でよろしければ、瑞希さんの看病をさせてください。それで、明羅さんは可八と下見へ行ってください。」
『いや、それは・・・。』
「私では、駄目ですか。」
『とんでもない、そうではなく、こんなことを頼むなんて申し訳なくてできません。』
「なぜです?」
『橋田さんにお願いする義理がありません。』
「私が可八の身内同然とおっしゃるなら、明羅さんも瑞希さんも、私の親戚になるのではありませんか。叔母様がいらっしゃらないのでしたら、次は私の番です。」
まったく下心がないといえば、嘘になる。瑞希に会いたい。瑞希の苦しみを、少しでも癒したい。その思いが醜いといわれても、愛姫はそれを貫くつもりだ。
夕方。可八を迎えに来た明羅から、マンションの鍵を受け取った。
「ひとつ、伺いたいことがあります。」
明羅はそう言い、可八を部屋に残して愛姫を外のカフェに誘った。可八のいないところで話をしたいという。
注文したコーヒーが来るのを待たずに、明羅は話をきりだした。
「瑞希には、橋田さんが看病してくださることを話しておきました。

でも・・・それを拒絶しました。」
胸の奥がちくりとした。瑞希の思惑がどんなものであろうと、拒絶という一言が痛い。
「ゆうべ、瑞希はかなり遅く、びしょ濡れで帰ってきました。しかも上着を着ずに。」
それはそうだ。上着は愛姫が持っている。
「可八と少し話をしました。橋田さんも、夕べ遅く、雨に打たれてお帰りになったそうですね。」
「・・・。」
「失礼を承知で伺いますが、もしかして、夕べ瑞希と一緒・・・でしたか。」
頷くべきか、笑い飛ばすべきか。脳裏では物凄い速さで思惑が計算される。だが、この僅かな沈黙はすでに肯定の証だ。
「兄としてお恥ずかしいことですが、瑞希は橋田さんのような女性にはとても薦められる男ではありません。」
「・・・私と瑞希さんは、そういう間柄ではありません。」
冷静な嘘が、口をついて出た。いや、夕べのことがまだ夢としか思えないからか。
「そう・・・ですか。」
明羅の戸惑いが感じられる。
「迷う時間はないはずです。どうぞ、お任せください。誰も頼れないのならともかく、今は私という親類がいるのですから。」
「もちろん、橋田さんが看病してくださるのは願ってもないことです。・・・お願いします。」
瑞希とは決定的に違う明羅の切れ長の目を正視しても、今は動揺しない。
まっすぐ向かったマンションは、考古学者だった両親の遺産というだけあって大したものだ。来るのは・・・二度目になる。
最新のシリンダーキーを差込んで、胸の奥が少し痛んだ。この家に初めてきた夜を、どうしても思い出すからだ。しかも、二度とも

明羅のいないときに。
（でも、今日は看病なんだから、事情が事情なんだから。）
そう言い聞かせて、扉をあけた。
「・・・・！」
瞬間、目にしたのは廊下に崩れるようにうずくまる瑞希の姿だった。瑞希の腫れた目が愛姫をとらえ、そして言った。
「このまま、・・・帰ってください。」
「・・・・・どうして・・。」
ゆっくり壁につかまって立ち上がった瑞希の腕が、愛姫の腕をつかんだ。
「この家に、あなたを入れられない。」
「でも、」
「俺は一人で大丈夫です。だから、」
そこまで言って激しく咳き込んだ隙に、愛姫は瑞希の肩を支えた。ヒーターのように熱い。手のひらが汗をかきそうだ。
「ベッドへ戻ってください。絶対安静は、一人では叶いませんよ。」
「駄目です。・・・何のためにここで待っていたと思う？あなたに、この廊下を踏ませたくないからだ。」
近くで見上げた瑞希の青い顔を見て、愛姫は瑞希が何を気にしているかわかった気がした。　瑞希が「犯した」と思っているその現場に愛姫を立たせたくないということだろう。明羅がいった「拒絶」は、そのための発言だったのだろうか。病人とは思えない力で、瑞希は愛姫を玄関に向かって押しやった。
「俺は、苦しくていい。このくらいで、何の償いにもならないだろうが、これでいい。一人でいいんですよ。」
「何かあったら私はどうすればいいんです？あなたが一人で倒れて、動けなくなっていたりしたら、」
「いいんですよ、それで。」
軽く咳き込んで、瑞希は愛姫に背を向けた。
「鍵を閉めたいので、早く帰ってください。」

瑞希の強い拒絶が愛姫の足をそれ以上進ませなかった。
仕方の無いことだろうか。だが、この非常時にそんなことで帰ってしまっていいのだろうか。だが、瑞希は問答することさえ辛いはずだ。それに、これ以上さからっても、決着はつかないだろう。
「・・・わかりました。帰ります。」
振り向かない瑞希の背が、力ない。
愛姫は目を伏せ、玄関を後にした。
扉の閉まる音を聞いた途端、突然涙がこぼれた。
瑞希が好きだ。
瑞希がどんな思いであれ、拒絶されたことが切ない。
自分の思いをきちんと伝えられなかったことが情けない。いつもそうだ。好かれようと思うほど、表現がうまくいかずに失敗する。
もし。
もし今再び扉が開かれたなら、瑞希の病気を忘れて抱きついてしまうかもしれない。
瑞希の思いを、一生自分がもらえるとは思っていない。ただ、瑞希が自分に負い目を感じている間は、意のままになるのだろう。
しかし、そんなことに何の価値もない。ただ、瑞希を苦しめるだけだ。
自分の欲望だけが満たされるという片天秤は、必ずいつか破壊する。

第27話

愛姫に看病してもらえるという贅沢な幸せを振り払うことは、今の瑞希にできる精一杯の意地だった。何も考えたくない重い頭を枕に埋め、瑞希は固く目を閉じた。

愛姫に風邪がうつってなどいないだろうか。

愛姫に苦しんで欲しくない。

（言うべきではなかった。どうあっても、やっぱり告げてはいけなかった。）

―　ずっと一緒にいたいと思うのは、私も同じなのに　―

どう表現していいかわからないくらい嬉しかった。何の障害もなければ、そのままハッピーエンドだというのに、あまりの隔たりに未来を描くことさえできない。

罪を犯したために、一生「償い」は消えない。一生を愛姫に身も心も捧げる覚悟でありながら、「結婚」という選択肢はない。

ベッドに体を投げ出し、激しい呼吸に喘いだ。

愛している。

理由などない。愛姫の存在そのものに惹かれて、存在そのものを愛している。

ずっとそばにいて欲しい。だが、愛しているからこそさせられないこともある。

愛する資格などないのに、心を告げてしまったから罰があたったのではないか。

今、愛姫がどんなに悲しんでいるか、瑞希には想像できてはいない。二度と悲しませまいと誓いながら、その行動は愛姫を苦しめている。愛姫が瑞希を愛してしまった以上、瑞希の苦しみが愛姫の苦しみにもなることを理解さえしていない。瑞希は、いつか愛姫が心変わりをして、もっと誠実な男と結ばれると思っている。そのとき感じる苦しみこそ、自分が受けるべき罰だと思っている。それが、

今まで真剣に女とつきあったことのない瑞希の考えの限界だった。

可八と明羅の結婚式を一週間後に控え、互いの家族同士による会食が開かれた。新宿のホテルのレストランの一室を借り切っている。

明羅と瑞希の叔母、美紗緒に初めて会った愛姫は、その上品さと若々しさに目を奪われた。独身貴族の精神科医と聞いていたが、なるほど、隙が無い大人の風格がある。

「可八さんからかねがねお噂は伺っていました。お会いできるのを楽しみにしていましたのよ。」

瑞希の叔母であるということが、愛姫を緊張させた。

「こちらこそ。お会いできて嬉しく思います。」

「二人の結婚のことでは、瑞希君があなたに随分ご無理を申し上げたとか。私からもお詫びしますわ。」

「いいえ、瑞希さんのおっしゃることは、よくわかりますから。私は気にしておりません。」

「・・・そう。」

どんなに盲目な恋をしても、相手によってはそれを引く冷静さ、冷酷さを持っている。

惹かれていても、その未来がないことを悟れば、自ずと見つめる先が違ってくるはずだ。

ずっと、そう思っていた。

だが、今の愛姫にそれを言いきる自信がない。

瑞希は、障害のない男ではない。

瑞希の過去を初めから知っていながら惹かれた。瑞希と過ちを犯しながら、惹かれた。思ってはいけない相手と言い聞かせていたのに、止まらなくなった。

もし、瑞希が殺人犯の息子なら、どうだろう。忘れられるか。これほどの思いを押し殺して生きていけるか。瑞希のどんな求めをも拒絶することができるか。

できるとは、言えない。

可八や明羅の気持ちが、瑞希との恋愛の中で、初めて実感できた。
ほどなくして、明羅と瑞希が一緒に部屋に入って来た。そして、最後が愛姫の父だった。
円卓のテーブルには明羅と可八が並び、その脇に親族が並んで座った。愛姫の父と美紗緒が並び、愛姫は瑞希と最も離れた位置に着いた。瑞希の視線は暗く、落としがちだ。
シャンパンの乾杯で始まった食事会は、式の話から世間話まで色々だったが、瑞希と愛姫が口を開くことは殆どなかった。促されて、返事をするぐらいだ。父は美紗緒が知的で美しいのが嬉しいように見え、それが愛姫の機嫌を損ねてもいた。
何を食べたのか覚えていない。
ただ、向かいの瑞希が相変わらず機械的な食べ方だったのが、切なかった。
食後のコーヒーが終わると、瑞希は意を決したように可八のところへ歩み寄った。
「少し、話がしたいんです。つきあっていただけませんか。」
突然の申し出に、可八は驚きのあまり声がでないようだった。隣の明羅を見て、瑞希は「兄貴が心配するようなことは絶対ないから。」と言った。
ホテルの一階にはカジュアルなカフェがある。瑞希は可八をつれて、そこへ入り、明羅と愛姫はロビーで二人を待つことになった。
明羅を想っていた頃はなかなか二人きりになれなかったのに、それを超えてからはこうしてたびたび機会がある。運命とは、こういうものだ。
「先日、弟は結局看病を断ったそうですね。」
「ええ。お役に立てなくて申し訳ありませんでした。」
「こちらこそ、大変失礼なことをして、すまないと思っています。すごくプライドが高い男なので、臥せっているところを他人に見られるのが嫌だったのではないかと思います。本当に、申し訳ありませんでした。」

同じようなことを、電話ではすでに話している。明羅の困惑が痛々しかったが、本当の理由は、瑞希も愛姫も口にはできない。
その頃、瑞希はティーラウンジで可八とテーブルを挟み、手をついていた。
「兄との結婚に先立ち、やはり、今までのことを謝らなければと思いました。」
そして、瑞希が頭を下げようとしたのを、可八は制した。
「瑞希さんが、謝る必要などありません。いいんです。どうぞ、私を憎んでください。大切なお兄様を奪ったふしだらな女だと思っていてください。」
「俺が、あなたを厳しく攻め立てたために、自殺しようとしたともきいています。そんな俺が許されるとは思っていません。」
「私が死のうと思ったのは一度きりではありませんし、ましてや瑞希さんのせいでは決してありません。私自身の問題です。それに、瑞希さんのおっしゃったことは正しいです。殺人犯の娘は、それらしく生きていかなければならない。罪を犯したなら、それを償う生き方を選ばなければならないんです。」
「しかし、あなた自身は罪を犯していない。」
「その血が問題だとおっしゃったのは瑞希さんです。私も、そう思っています。父の犯した業を、父亡き今は、私が背負うしかないんです。」
「お父様は、罪を悔いて・・・命を絶ったそうですね。」
「ええ。でも、それは罪の償いにはなりません。命が無くなったときが罪の終わりではないからです。」
「ご両親を失って一番被害を受けたのは藤木さん自身です。それを、」
「その償いを、誰もしてはくれません。父が私にすべきだったのかもしれませんが、生きていること自体が私の人生の障害になると思って死んでしまったのでしょうね。でも、それこそが父なりの私への償いだったのだと思います。ただ、償いとは被害者だけに行えば

いいとは思わないんです。人としての罪だから、人として・・何というか、この世のすべてに、償うべきではないかと。」
「人としての、償い・・・？」
「偉そうな言い方ですけど、そんな風に思うようになりました。本当はずっと、被害者意識ばかり持っていたんです。でも、私を育ててくださった愛姫さんの方が、ずっと被害者です。私のせいで愛姫さんのお母さんは自殺してしまった。父の殺人がきっかけで、何の関係も無い方達まで不幸にしてしまった。罪深いことです。十分に、罪を償う立場にあります。」
瑞希は、可八の言葉で自分の罪を改めて思い返した。
罪のない子を殺してしまう引き金を引いた。一人の女性を傷つけてしまった。可八の言うとおり、愛姫だけでなく、人としての償いが科せられるだろう。
テーブルのコーヒーがゆっくりと冷めてゆく。だが、可八は伏せ目がちにソーサーの縁を指先でなぞるだけだった。
「こんな業を背負った私と結婚する人は、多かれ少なかれその影響を受けずにはいられません。だから、結婚なんてとんでもないと思っていました。幸せになんてなってはいけない、私の人生の重荷で相手に迷惑をかけてはいけないと。」
瑞希は息を詰め可八の言葉の続きを待った。今、自分が直面している問題を、可八はどう結論付けたのか。
「明羅さんが、一緒に罪を償っていこうとおっしゃって下さっても、それを受け入れることができないでいました。でも、自分を不幸せにすることが償いなのかと考えたとき、そうではない、と思ったんです。」
「・・・それで？」
「明羅さんと結婚することで、明羅さんが受けるダメージを凌ぐ幸せを私が作り出すことができたら・・・。つまり、明羅さんを私が命がけで幸せにすることができたら、何もしないより、ずっと償いといえるのではないかと。」

可八の瞳には、愛姫と同じ意思が宿っている。
「私は、どんなことをしてでも明羅さんを幸せにします。それができなかったら、私は死にます。」
「そんな！」
「それぐらいの覚悟を持っているということです。離婚なんていう傷を、明羅さんにつけたくありませんし。」
「・・・その覚悟、兄に言いましたか。」
「そんなこと・・・、言えません。重荷にしかならないですもの。ただ、瑞希さんにだけは言っておかないと。瑞希さんを、私は不幸にしてしまったのですから。それを、許されるとは思っていません。」
「それは、もう、いいですよ。」
「そうは行きません。私の父の罪、愛姫さんへの罪、そのお母様への罪、瑞希さんへの罪、私は生涯背負っていきます。それは、私の義務というより、私の生まれながらの人生そのものだからです。私は罪を償い、明羅さんを幸せにするために生まれてきたんです。私は幸せになるために生まれたのではありません。なのに、もう十分すぎるほどの幸せをもらってしまいました。愛姫さんに会えて、・・明羅さんと結婚できるなんて。」
「結婚してこその償い・・・。」
「ずるい言い方ですね。でも、愛姫さんを早く私から自由にしてあげたくもあって。本当は、もっと早く独り立ちすべきでした。でも愛姫さんと離れがたくて。本当に、感謝してもしきれないぐらい。ただ、愛姫さんは私では幸せになれないのです。愛姫さんが求めているのが、すべてを大きく受け止めてくれる男性だと、気付いたからです。」
瑞希は、息を呑んだ。
「私を求めてなどいないからです。それが、明羅さんとの、ちがいです。」
「例え罪を償う立場にあっても、求められればそれに応じてもいい

ということですか。」
「いいかどうかはわかりません。ただ、私は・・・そういう結論を出したというだけです。」
可八には、瑞希がなぜそんな質問をしたのかはわからないだろう。逆に、攻められているのではないかと思うかもしれない。
可八の言葉が、瑞希の心の霧を晴らすだけの説得力を持っているとはいえなかった。ただ、一抹の光を見たとは思った。
愛姫を幸せにしたいという気持ち。
可八の決意。相手に人生の半分を背負わせることの重さを乗り越えようという意思。それが容易でないことへの覚悟。
可八は切なく微笑んだ。
「瑞希さんには、恨んでいて欲しいんです。私が私の罪を忘れないように。いつも心にナイフを突きつけていられるように。明羅さんのそばにいられる幸せで、私の業を忘れないように。」
それは、瑞希も同じだ。
亡くした子をいつも心に留めておき、愛姫を貶めた自分を叱責するように、いつも見張っていて欲しい。
カフェを出ると、明羅と愛姫がロビーに立って迎えた。明羅は、可八ともう少し話をするからと言って、二人で去っていった。
気まずく残され、しかし、瑞希は言った。
「先日は、すみませんでした。」
「・・いえ・・・。」
看病を断って以来、今まで話をしていなかった。愛姫が唇を引き締めると、瑞希は頭を下げた。
「では、今日はこれで失礼します。」
愛姫の顔を見ることができなかった。
愛姫も、言葉が出なかった。
瑞希は、可八の言葉を何度も反芻しながら、地下鉄のホームへ向かった。
愛姫と生きていけるか。

可八ほどの覚悟をもてるか。
可八が瑞希を監視役とするなら、瑞希の監視は愛姫自身だ。その監視役と一生、生きていけるか。見つめるほどに思い出す罪に、自分を責め続けながら生きていけるか。
償いの相手と、本当にわだかまりなく生きていけるか。
それは、愛しているかという問いでは決して解決するものではない。もし愛姫が将来、そのことで自分を強く責める日が来ても、それを受け止めて尚共に生きていけるのか。
問題あるごとに思い出し、責めて、責められて、それでも共に生きていけるか。
地下鉄を降り、地上へ向かう階段の頂上から、夏の風が吹き下りた。前髪から頬へと拭われ、瑞希はその目を見開いた。
いける。
生きてゆく。
愛姫と。
苦しむだろう。
苦しませることもあるだろう。
だが、それを乗り越えたい。
愛姫と生きていくことで、より自分に厳しく、真剣に生きてゆける。
そう決意したとき、瑞希の足は自然と駆け出していた。弾む気持ちを、心の中に押し込めておくことができない。
兄の婚約者の保護者代わりという立場のままでしか愛姫と接していなかったら、こんな気持ちにはならなかった。
感謝している。
愛姫との出会いに。
不謹慎な言い方かもしれないが、流産した子どもこそが二人の仲人とも思える。
だが、人一人を犠牲にして結ばれることに価値があるのか？
それより、そんなことが許されるものなのか？

それは、罪ではないのか？
瑞希の足取りが、横断歩道の途中で緩んだ。
上を向いた気持ちが、また、下を向く。
愛し合ってさえいればいいなんて、子どもの言い訳だと怒鳴ったのは、自分ではなかったか。
兄の気持ちが、可八の気持ちが、今さら骨に染みる。
信号が変わり、車のクラクションが瑞希を急き立てた。
（彼女への気持ちは変わらない。でも、）
引き返すことはできない。ただ、前へ進むしかない。動き出す車に急き立てられるように、瑞希は再び走り出した。

第２８話

可八がウェディングドレスを手作りしている。柔らかな生成りのシフォンは、優しい雰囲気を持つ可八にはよく似合うだろう。
「式の後は、少し手直しすればワンピースになるんですよ？便利なキットが売ってるもんですよね。」
ソーダ水の入ったグラスを手渡し、愛姫はかすかに微笑んだ。
「手作りのドレスなんて、素敵ね。」
「だって、借りるだけでもすごく高いんですよ？一日しか着ないのに。これなら貸衣装代の五分の一ですから。」
「しっかりしてる。」
「愛姫さんが教えてくれたんですよ。・・・いろんなこと。」
可八は、立ったままの愛姫を大きな目で見上げた。
「感謝しています。本当に、心から。」
可八の言葉は、愛姫の良心を咎めさせる。
「そんなこと・・・言ってもらう資格はないわ。」
「いいえ。愛姫さんがいなかったら、私は絶対に死んでいました。それか、どこか街の片隅で荒んだ暮らしをしていたはずです。」
「それを言うなら、私の父に感謝するのね。あなたを引き取ったのはあの男だから。」
「もちろん、おじ様には感謝してます。でも、実際に育ててくださったのは愛姫さんです。」
「私は、可八をひどい目にあわせてる。」
「それ以上に、愛姫さんは私に色々なことをして下さいました。それに、私のせいで愛姫さんがどんなに苦労なさったか。」
「そんなことない。・・・苦労したというなら、可八の方でしょう？」
「いいえ。」
可八は力強い瞳で愛姫を見つめた。

「今、私は最高に幸せです。ですから愛姫さんに感謝します。でも、負うべき罪は忘れません。それが私の償いです。私の義務です。」
ゆるぎない自信から出た言葉だ。
明羅からの愛が絶対的なものであるという自信が可八をここまで強くし、愛姫に何のわだかまりもないような感謝の気持ちをもたせているのだろう。
明羅ほどの男でなければ、可八の相手など務まらないのかもしれない。明羅だから、任せられる。どんな苦境でも乗り越える力を、信じることができる。
しかし、今、可八をねたまないで祝福できるのは、瑞希という存在がいるからだ。例え気紛れでも自分と一生を共にしたいという言葉を情熱的に語ってくれる男ができたからだ。そうでなければ、最後まで毒々しい厭らしさを表面だけ取り繕って、可八を見送ることになったろう。そんな自分がたまらない。
他人の幸せを心から祝福できない自分が嫌だ。
友達を見下ろす位置にいないと満足できない自分。
自分以上の力を持つ友達をライバルとしか見れない自分。
だから友達がいない。
心からの親友など、夢のまた夢だ。
可八を蔑むことで、精神のバランスを保ってきた。可八を、体のいい玩具のように扱ってきた。
「本当に罪深いのは私。許されない罪を犯してきたのは私の方よ！なのに可八はそれを責めない。駄目よ、もっと責めなきゃ。痛い言葉で私をついてよ！そうでもしてくれないと、私の気は治まらない！」
すると可八は、落ち着いた眼差しで愛姫を見上げた。
「私が言葉で責めた方が、遠慮なく私を憎むことができるからですか。」
びくっ、とした。
初めて聞く、可八の言い返し。

その言葉の冷たさが、愛姫の全身を震わせる。
「そのほうが、楽でしょうね。責める私自身も、自虐の念にかられますし。」
「可八・・・。」
「でも私は、もともと愛姫さんを責める気はないですから。悪いのは私で、愛姫さんは被害者ですから。ただ、私が瑞希さんに言ったことを思い出してしまって。」
「なんて、言ったの。」
「瑞希さん、私に謝ったんですよ。でも私は、私が自分の罪を忘れないように一生責め続けてくれ、と瑞希さんにお願いしたんです。」
可八の遅れ髪が、乱れて頬にかかる。
「私は、私の罪を忘れない。でも私は、その罪が私の責任ではないと、いつも心のどこかで思っているんです。云われの無いことを誰かに責められることで、自分を悲劇のヒロインに仕立てて、自分を可哀想がっていたいっていう欲望があったんです。瑞希さんを、悪者にして。」
可八の手元に絡んだシフォンが、今は硝子細工のように見える。
可八は、鈍くなどない。お人好しなどではない。そんなことに、今更気付いた。
瑞希が思うより、愛姫が考えていたより、可八はずっと頑強だ。
自殺しようとしたのも、可八が弱いからではない。明羅を想う確固たる強い意志があったからだ。
（私が憂うことなど、もう、何もなかったのだ。）
本当は、もうとっくに互いに自立していたのかもしれない。
愛姫のあげたエプロンの向日葵が色褪せるように、二人の距離は徐々に遠くなっていっていたのだ。
仕上がったドレスをハンガーにかけ、可八は愛姫の前で手をついた。
「お世話になりました。私のような者を、二十年以上も見捨てないで育ててくださって、ありがとうございました。」

感動とか涙とか、そういうものは二人には無縁だった。冷めた場面が繰り広げられているのを、他人事のように見ている。
しかし、愛姫にはわかったことがある。
可八はまさに自分自身ではないのか。あの考え方、物言い、まさに自分の性格生き写しではないのか。
自虐的なセリフを言いながら、自分の悪いところをちゃんと正視できる人間なのだとアピールして満足している厭らしさ。
それは、愛姫そのものではないか！？
こんなに不愉快なのは、自分を見てしまったから。そうだ、本当の正視とはこういうことなのだ。そしてそれは、逃げ出したいほど居心地の悪いものなのだ。
式を明日に控え、愛姫は本当の取り残されを実感した。
可八の結婚は、終わりではない。
愛姫の人生の本当の始まりだ。そしてそれは、可八のせいでない罪の償いの始まりなのだ。
最後の夜を感傷的にすごすつもりだったのに、そんな気分はどこかへ吹き飛んだ。
可八こそ、自分を見下しているのかもしれない。様々な災いを全部他人のせいにして悲劇のヒロイン面している馬鹿な独り者と、鼻の先で嘲っているのかもしれない。
梅雨の前ぶれを、湿った空気が匂わせていた。

式当日。
広い教会にもかかわらず、そこには身内の姿だけだった。
愛姫は、明羅が可八のことを本当はどこまでわかっているのだろう、と考えた。愛姫でさえ今さら気付いた可八の本性。愛姫だって同じものを持っているのに、可八が持っていることだけを嫌悪している。
可八が差し出したピンクのブーケを、愛姫はにこりともせずに受け取った。

「次は愛姫さんが幸せになってくださいね。」
そんなセリフが白々しい。愛姫が可八の立場だったら、どういう気持ちでブーケを渡すか想像できてしまうからだ。
「可八を引き取って、よかっただろう？」
愛姫の父が、隣でそう言った。
「もし一人だったら、お前は傲慢で挫折を知らないお嬢様そのものだったろうからな。」
「・・・可八がいなければ、かわりにお母さんがいたわよ。可八はその代わりになどなりえない。」
「こんなめでたい日にも、お前は・・・。」
「それとこれとは別だからよ。私は、何も終わったと思っていない。むしろ、これからだわ。」
そう言った瞬間、少し離れたところに立つ瑞希と目があった。
こんな自分を知らないで恋をした瑞希を、気の毒に思った。
きれいな肩のシルエットがこちらへ近づいてくる。
「記念撮影だそうですよ。さあ。」
今日の写真を、この先見ることはないだろう。
可八が夕べあんなセリフさえ言わなければ、今頃二人で抱き合って涙できたかもしれないのに、今の愛姫には何の感慨もない。
披露宴代わりの会食が終わると、明羅と可八は着換えてそのまま島へと出発した。
この先どんなことがあろうと、可八は図太く生きていく。きっと、愛姫よりずっと強く、たくましく。
一人、マンションに着いた愛姫は、もうこの先可八がここで出迎えることはないのだと実感した。
（別に・・だから何よ。一人暮らしの人間がこの世に何人いると思っているの。当たり前じゃない。）
リビングの電気をつけ、クーラーを入れる。
冷蔵庫を開け、僅かに残っていたキャロットジュースを飲み干した。

テレビの電源をつけ、ニュースにチャンネルを合わせる。
一人になりたかったではないか。
誰に気兼ねすることなく、生活したいと思っていたではないか。
それがこうして叶ったのだ。
ふと、可八のくれたブーケを思い出した。
可八と別れた後、瑞希の叔母と切花を分けようと思ったら、美紗緒は笑った。
「確かに私は独身だけど、もう縁はないから。でも、橋田さんはこれからの方でしょう？大事に全部、お持ち帰りなさい。」
穏やかな声が切なかった。
この先ずっと独りだったとして、美紗緒くらいの年になったらあんなふうに穏やかに笑えるようになれるだろうか。
―　次は愛姫さんが幸せに　―
（何よ、私が幸せを掴み損ねたみたいに！）
可八はおなかの中で自分を笑っていたのではないだろうか。先に結婚して愛姫に見送りをさせて、ざまあみろと思っていたのではないか。散々見下されていたが、今こそ勝ったと思っていたのではないだろうか。
（ふざけんなよ！）
床に投げつけたブーケから、花びらが舞う間もなく無残に散らばった。
息が上がっている。
肩が激しく上下する。
今日が結婚式だったなんて。
こんなにめでたい日だったなんて信じられない。
悲しくなんかないのに、頬を涙が伝う。
ソファに顔を埋めて、愛姫は瑞希を思った。もし今、優しく慰めてくれる人がいたら、間違いなくすがる。抱いて、行き場の無い感情をぶつけたいと思うだろう。
あの夜の瑞希が、そうだったのだ。

可八に明羅を取られたなどという単純な悲しみではない今、瑞希の気持ちがよくわかる。

（それを、やっぱり責められない。責められるものじゃない。あの行為自体は罪じゃない。罪は、私が子どもを殺したこと・・！）

嗚咽して泣いた。独りでも大声では泣けないが、子どものように泣きじゃくった。

愛姫は、三十三歳になっていた。

第２９話

望月瑞希は教員採用試験に当たり前のように合格した。だが、瑞希もそれなりに努力したし、この三ヵ月は愛姫とも会っていなかった。

瑞希は、まず定職に就かねば愛姫とつきあう資格などないと思っていたからだ。

１０月。合格のお祝いが二人の再会だった。

しかし、相変わらず瑞希は酒を口にしない。そして、食事を楽しむこともない。それが愛姫を自責の念へと追い込む。瑞希と結婚し、瑞希が一生こういう食事をする限り、愛姫は毎日罪の意識から逃れられないだろう。瑞希の償いは、愛姫自身の償いにもなるのだ。

食後の紅茶を口にしながら、愛姫はふとつぶやいた。

「考えてみると、私は瑞希さんのことあまりよく知らない気がする。」

「・・答えて済むことなら、なんでも聞いてください。」

「じゃあ、たとえば趣味とか、夢とか。」

「趣味は夜の街をドライブすること、夢は橋田さんと結婚することです。」

思わず呼吸が止まった。

瑞希が、趣味を語るのと同じ口調でさらりと結婚を口にしたのが気にかかった。

「どうかしましたか。」

「いえ、・・・本気なのかと・・。」

「愛姫さんは、本気ではないんですか。」

瑞希の声が穏やかでない。怒っている。当たり前だ。

「本気です。でも、」

瑞希の顔が下を向いた。

「お茶を飲んでしまってください。続きはここでは話せないですか

ら。」
愛姫は紅茶を残し、水で口を濯いだ。
丸の内は、都市開発ですっかり変わった。休日はゴーストタウンと化すエグゼクティブの街だったのに、今では子どもやティーンまでごったがえす。平日の夜でさえそうだ。
二人は東京駅から離れ、和田倉噴水公園まで歩いてきた。ただ、そこまで瑞希は口を利かず、そして早足だった。
高いヒールの愛姫の足裏は一日の疲れで悲鳴をあげている。が、瑞希にそれはわからない。瑞希は、女性はハイヒールを当たり前に履きこなせるものだと思っているのだろう。
橋の欄干にひじをつき、上体をかがめた瑞希のシルエットは月明かりに映える。その向こうにはパレスホテルの看板だけが浮かび上がる。大通りの向かいには明治時代の面影を残す石造りの建物が、スチールとガラスのビルの谷間でひっそりと息づいている。
「俺はいい加減な生き方をしてきたから、そうそう簡単にあなたに信じてもらえるとは思っていません。でも、本気ですから。本当に。」
見つめた先にまっすぐな瑞希の瞳がある。
欠点だらけの自分の顔をまじまじと見られたくなくて、いつも視線を逸らしてきた。しかし、今は違う。
指の先が震えても、視線だけは逸らさない。
瑞希の表情は真剣すぎるほどで痛い。
男の人の表情をこんなに色々と見たことなど今までにあっただろうか。同僚や友人が決して見せることのなかった感情の起伏を、瑞希から教えられる。
すべてを失って絶望したときの顔。
無理やり病院を出ようとした愛姫を必死で諌めようとする顔。
ずっとこのままでいたいと言った雨に濡れた顔。
そして今。
真剣すぎる眼差しで愛姫を見つめる顔。

自分もこんなにも本気だとわかってくれているだろうか。今の自分の表情は、瑞希をこんなにも強く思っていると、ちゃんと伝えてくれているだろうか。
本当ならこんな沈黙の後には唇を重ねるのだろうが、瑞希はそれをしなかった。
愛姫に指一本触れずに、瑞希は離れた。決意と失意が交差する。愛姫といるときも、いないときも。
時間が解決などしない。時間に解決などさせてはいけない。瑞希が償わねばならない罪。
瑞希の躊躇が愛姫には歯がゆい。
「瑞希さんの態度は、・・・わたしと結婚しようと思っているとはとても思えないんです。」
言っている唇が震えている。
瑞希が肩越しに振り返る。長い前髪で、表情が読めない。
「・・・態度？」
瑞希の頬に陰が見える。
愛姫は思わず唇を引き締める。握った拳がつらい。
「どういう態度なら、結婚しようと思っていることの証明になるんですか。」
瑞希の瞳に滲む悲しみの色が、愛姫を恐怖に貶める。
瑞希がどんな思いで愛姫に触れないか愛姫なりに考えてはいる。では、愛姫は？愛姫だって瑞希に触れていない。でも、瑞希にわかって欲しいと思っている。この、強い思いを。だから、一方的に瑞希のことを責めるのはおかしい。
突如、瑞希は愛姫の腕をつかみ、足早に歩き出した。足がもつれても止まれない、脅迫めいた強さがある。
さっきまで噴水の向こうに見えていたパレスホテルの看板が、今は近すぎて見えなくなっている。
ドキリとするよりも早く、体中の血が脳天に向かって流れ出すのがわかった。その後、瑞希がどうしたのか、どういう道を辿って部

屋に着いたのかまったく覚えていない。
部屋の扉が閉められると、瑞希の手は愛姫のバッグを奪い取り、そのまま身体を抱き上げた。
ベッドに投げ出された衝撃で目をつむる。次に開いた瞬間に見たのは、瑞希の間近の顔だった。
正視できない。こんな男の顔が、何を考えているのかわからない。
思わず顔をそらせて、目をぎゅっとつむり、身体を硬くした。
すると、ずっと上のほうで、静かなため息が聞こえた。
「俺を、受け入れられないでしょう？」
目を、見開く。
「あなたが、そう簡単に俺を許せるとは思っていない。あなたがどう言おうと、今の反応でよくわかったでしょう。」
乱れた髪を額にへばりつかせたまま、愛姫は上半身を肘でもちあげた。
「そんな・・・。今のはただ、驚いたからだけで・・・。突然で、どうしていいかわからなくて。普通、誰だってああいう反応になると思います。」
「そうですか。俺がつきあってきた女達は、あなたがいう『普通』とは違うでしょうからね。」
どうしてこんなことになったのかわからない。だが、頭に上った血が、だんだん冷めていくのだけはわかる。
ベッドから降り立つが、足に力が入らない。放り出されたパンプスが、背を向けた瑞希の傍に転がっている。
「私が瑞希さんを受け入れられないことを私に実感させるために、そのためだけに、部屋をとったんですか。」
「・・・・そうです。」
「では、もし私が拒まなかったら、どうするつもりだったんです？」
「・・・拒まないはずがない。」
「そんなこと・・・！」
「俺が怖くないはずはない。あなたがどうして俺と一緒にいたいな

んて言ってくれるのかいまだにわからない。あんな目にあわせた男を、そう簡単に受け入れられるわけがないんだ。」
「私は、そんなに純心ではありません。私だって瑞希さんがどうして私を選んでくださったのかわからない。だから、その理由が知りたい。あなたの気持ちがどれほどのものなのか知りたいんです。」
「・・・あなたといるときも、離れているときも、あなたを好きだとずっと思っていますよ。もちろん、今も。言葉にしなければだめですか。態度で示さないとだめですか。」
「人の気持ちなんて、思っているだけでは通じないと言われてきました。私だって、いつもいつも瑞希さんを思っています。でも、それが瑞希さんにちゃんと伝わっているか不安です。わかって欲しい場合、どうすればいいですか。」
瑞希が再び近づいてくる。
「言葉にしたら陳腐になる。だからといって抱かなければ通じないなんて、違う、と思う。どんなに贈り物をしても、心の代わりにはならない。ただひとつ言えるなら、俺は、結婚できるまで絶対にあなたに手を出さない。それが既に過ちを犯してしまった俺のけじめです。あなたに本気だからこそ、それを守ります。それで、少しは伝わりますか。」
「わかります・・・本当は、そんなこと十分わかっているんです。瑞希さんがどういう気持ちでいるか。でも、私は自信が欲しいんです。そうでないと、不安で・・・。」
こんな台詞が言える女だったと驚いたのは愛姫自身だ。だいたいにおいて、瑞希に愛されているとわかっていなければこんな台詞、滑稽すぎて言えるわけがないのに。
次の瞬間、瑞希の手が愛姫の腕を引き寄せ、二人は限りなく近くで見つめあった。
「覚えておいてください。俺は、あなたを抱いていいのなら、例え死ぬ間際でも抱ける。あなたが俺より先に死んでしまったら、毎晩あなたの墓で眠る。古い詩のように。」

愛姫は瑞希の白いシャツに、わずかに触れる程度に頬を寄せた。目を閉じると、ダージリンの香りが鼻をくすぐる。
「ごめんなさい・・。」
他人から見れば、ままごとの様な恋愛ごっこなのかもしれない。しかし、恋愛初体験の愛姫には、これが精一杯だった。
消えない罪を二人で分かち合う限り、おそらく何度も傷つけあう。それは覚悟せねばならない。

１１時過ぎにマンションに着いた瑞希は、玄関を開けるなり、リビングに明かりがついていることに驚いた。
だが、すぐにその正体が明かされ、思わず微笑んでいた。
「兄貴・・・！」
明羅が出張ついでに寄ったという。そう、鍵は渡したままでいた。
「遅かったな。まさか、仕事ではあるまい？」
「兄貴こそ。新婚のくせに、泊りがけ出張なんて。」
「仕方ないだろう？日帰りはちょっときついからな。それに可八は強い。俺がいなくても、一人でやっていける。」
瑞希は、コーヒーを注いだマグカップを宙に浮かせたまま立ち止まった。
「意外だな。兄貴は俺にこう言ったはずだぜ。可八には支えてやる存在が必要だ、みたいなことを。」
ソファに身体を投げ出し、明羅は鼻先で笑った。
「そういうこともあったな。でも、ジャーナリストの妻なんて、強くなければ困る。いつどういう目に遭うかわからないんだからな。」
瑞希は少し口元をすぼめて明羅の向かいに座った。
「結構そっけないセリフだな。」
「本当のことだ。俺だって、いつどうなってもいいように、この世に未練なんて持ちたくはないし。」
「・・・どういう意味？」
「そのままだよ。この世に未練があったら、最前線に取材になんて

行けなくなる。それでは困る。だから仲間には独り身の奴は多い。でもそれでは出世はできない。」
瑞希は目の前が歪むのを感じた。兄は何を言っているのだ。弟を犠牲にしてまで純愛を貫いたはずの男の台詞とは思えない。まるで計算づくで結婚したかのようだ。
「それは、可八さんを好きで結婚したわけじゃないってこと？」
「・・・好きだよ。ただ、強い未練を感じてしまうほどでは・・・ない。」
思わず、全身が痙攣のように震えた。瑞希は怒鳴った。
「なんだよ、それ！？兄貴たちの結婚の裏では、俺も橋田さんもすごい苦しんだんだぞ。それを何だよ、いい加減だったみたいなこと言って！」
「いい加減なわけではない。色々考えた末の結果だし、これで良かったと思っている。瑞希の結婚が駄目になるのも覚悟していたことだ。瑞希にあんな骨肉の争いがある家門の渦中に身を置いて欲しくなかった。お前のような善人には耐えられるわけがない世界だし、そのせいで変わって欲しくなかった。」
「じゃあ、わざとだったというのか？俺の結婚を壊すためにあの女と一緒になったというのか？」
「そうではない。結果としてそうなるだろうとは思っていただけだ。」
「何だよ、それ？今更、わけわかんねぇこと言うなよ！橋田さんだって、兄貴のことずっと好きだったのに可八さんにとられて、苦しんでいたんだぞ？そういう気持ち、なんだと思っているんだよ！？」
明羅の表情は変わらず、瑞希を凝視する。
「だから、橋田さんを選ばなかっただろう？ああいう人は未練になる。ああいう深い心の人を悲しませるわけにはいかない。」
瞬きを忘れた瑞希の目は、乾いて痛くなる。
「それって、本当は橋田さんのほうが好きだけど、だからこそ大して好きではない藤木さんのほうを選んだってことかよ？」

「いや、橋田さんみたいな人は初めから本能が除外している。好きにはならない。」
今まで感じたことのないような怒りや憎しみが、瑞希の全身をかけぬけた。さっきまで愛姫と甘い夜をすごしてきたのに、すべてが闇夜で凍りつく。
明羅はたたみかけるように言った。
「俺は、瑞希が言うような『胸を張って生きていける』種の男ではないんだよ。瑞希のほうこそ、ずっと傷つきやすくて良心を持っている。橋田さんもそうだ。橋田さんは可八を守ってやらねばならい存在だと思っていたようだが、本当は違う。可八はずっと強かで、己を大事にしている。心配などいらない。」
今まで、兄を尊敬してやまなかった。妬ましいほどその生き方を羨んでいた。それが、今はとてつもなく嫌らしい男に見える。だが、兄の本性を信じたくない気持ちが、ストレートな嫌悪をけん制している。
「何で今更そんな話をするんだよ。そんな、誰もいい気持ちのしないような裏話、ずっと黙っていればいいじゃないか。」
にらみつけたフローリングの色が滲む。
「・・・そうだな。」
「大体、可八さんはそういう兄貴の気持ちを知っているのか？」
「・・・多分な。」
「そんなんでうまくいくのかよ？」
「面白いこと言うな。壊したがっていたのはお前なのに。」
「・・・真相がどうであろうと、二人の結婚の裏で起こった真実は変わらないんだ。その犠牲を無駄にしないためにも絶対に別れて欲しくない。」
明羅はそんな瑞希の複雑な表情から目をそらした。
「・・・じゃあ、出て行くよ。」
「えっ？」
「俺とは一緒にいたくないだろう。」

「何言ってんだよ、自分の家だろ。無駄遣いすんなよ。・・・兄貴は、兄貴だ。それは一生変わらない。」
明羅の目が、昔の眼差しに、一瞬、戻った気がした。
瑞希にとって明羅は憧れで、尊敬の的だった。なのに、なぜ今頃になってあんなことを言うのだ。本当は、あそこまで純愛を貫いた兄を羨ましくさえ思っていたのに。愛姫の愛した明羅のまっすぐな生き様を見習い、まじめに生きていこうと努力している最中だというのに。
甘い夜の余韻に酔っていたかった。しかし、いつも突き落とされる。浮いた心は、必ず奈落を見る。
兄を、もう今までのような目で見ることは決してできないだろう。
芝居であってくれないか。
夢であってくれないか。
いや。
これが兄なのだ。ダークな部分を持つ、自分の兄なのだ。
次の朝起きたとき、明羅はもういなかった。
―　ありがとう。世話になった。―
小さな紙切れに走り書きのメモを残して。
噛んだ唇は、肉の味がする。
（黙っていなくなることないじゃないか。）
お互いに気まずい思いをするなら、あんなことを言わなければよかったのだ。だが、言わずにはいられなかった。可八との結婚生活で抱えている重荷を吐き出さずにいられなかったのだ。
（もっと、優しくしてやればよかった。）
兄は兄だと言いながら、邪険にしてしまった。しかし、どうしようもない嫌悪感を抑え切れなかったのだ。
兄のいた形跡が一つもない。
兄は兄なのに。
ただ一人の、この間まで自分を育ててくれた兄なのに。

第３０話

愛姫には、自信が芽生えつつあった。一人の男性に愛されているという確たる自信が。

「橋田先生って、最近きれいになりましたよね。」

ランチを事務所の女性たちととっている時のことだった。彼女たちは愛姫より若い。恋愛話や男の話のとき、愛姫はどちらかというと外れ者のような立場だったから、あまりランチを一緒にとることもなかった。そのため、急な言葉に思わず咳き込みそうになった。

「どうしたの、いきなり？」

「やっぱり、恋人のおかげですよね。」

何で知っているのか？誰にも言ってないのに。

「いや、恋人というほどでは・・・ないんだけど。」

「また、そんなことおっしゃって。この間丸ビルを二人で歩いてるの見ちゃいましたもん。何ヶ月か前、事務所の外でずっと立ってた人ですよね。」

「そうそう。橋田先生が腕つかんで一緒に歩いていくの、見ちゃいましたもん。」

「ねぇ」、と言って彼女たちは騒ぎ立てた。

「すっごいハンサムなんですよね。ずうっと橋田先生のこと寒空の中立って待ってたなんて、愛情ですよねぇ。」

愛姫は苦笑してしまった。もしこの先別れるようなことがあったら、申し開きもできずに、今度は嘲笑の的になるだけではないのか。

「あの人は、可八の旦那さんの弟なの。親類っていうの？」

「赤の他人には変わりありませんよ。今度紹介してくださいよ。」

愛姫は曖昧に返事を濁し、仕事に戻った。彼女たちは新鮮な話題を常に探している。どうせ明日には忘れているのだ。

しかし、その四方山話は思わぬところに火をつけてしまった。

事務所の所長は、愛姫の父の友人だ。

所長に悪気はなく、単なる世間話程度だったらしいが、愛姫の父は静かに激怒していた。ある夜、電話で強引に自分のマンションへ愛姫を呼び出した。

父は瑞希との交際を頭ごなしに反対した。

「明羅君と可八との話が出たとき、私は身辺調査をしている。瑞希君のことも調べた。ここに調査結果がある。よく読むことだ。」

テーブルに投げ出された分厚い書類を愛姫は一瞥して、父を睨んだ。

「何を今更父親面しているの？私は、あなたの言うことなんてきくつもりはないわ。」

「お前は橋田家の跡取りだ。それなりの男と結婚してもらわねばならない。第一、瑞希君は一年前に婚約を解消したばかりで、もう次の女を見つけるなどといういい加減な男だ。地位と金と女に貪欲な、とんでもない輩だ。男慣れしていないお前を落とすことなど、朝飯前なんだろう。早めに目を覚ますことだ。」

「・・・私は、男に騙されるほど愚かではないし、いつも冷静よ。瑞希さんの過去も大体察しはついているし、本人の口からも聞いているわ。」

それを聞いた父の目が嘲笑した。

「可八と二人だけの世界で生きてきたお前らしい甘いセリフだな。瑞希君がお前を選ぶのは、その地位と金が目当てだ。それ以外の何者でもない。ああいう色男は女なんて意のままにしてきたのだろうから、女自身に興味なんてないものだ。」

瑞希自身が、そう語っていた。父の言うとおりだ。だから、父の言うことを正しくないとは思っていない。ただ、一番大事なときに子育てを放棄した父に、父親面してとやかく言われることが許せないだけだ。

「結婚など、絶対に許さないからな。」

瑞希のほうが傷が癒えずにいるのに、結婚など、遠すぎて見えない未来だ。

「あなたの言うとおりにはならない。それだけは絶対よ。私は橋田という家をどうとも思っていない。お望みなら、すぐ母方の籍にしたっていいのよ。」
「私がお前に相応しい男を紹介する。」
「そんな親の息がかかったような男なんてお断りよ。それこそ「法曹界の橋田」の権威狙いのとんでもない男なんじゃないの？」
愛姫は父の出した書類をつかみ、踵を返した。
「私の人生は私の思ったとおりにする。あなたを父とは思っていない以上、どんな言葉も聞くつもりは無い。でも、逆らうわけではないから。私だって、そう簡単に瑞希さんと結婚できるとは思っていないし、私のほうから手を離すかもしれない。私には分別がある。それは自負しているの。絶対の自信があるわ。私は、私を信じているのよ。だからこの書類もちゃんと見るわ。現実を放棄して、夢を見ているわけではないからよ。」
偉そうな口をきいているとわかっている。でも、本当のことだ。
風を切って歩く自分の目が、どんなにまっすぐ前を向いているが知っている。
父の言うことなど、今更取るに足らない。
しかし。
突如、愛姫の上腕に鳥肌が走った。
父が瑞希の身辺調査をしたのは、愛姫が瑞希と知り合う前後だろう。だが、今、また再び調べ直さないとも限らない。愛姫の手にある書類は瑞希の過去だ。
だが、愛姫と知り合ってからのことを調べ始めたら？
探偵が病院へ行ったら？
病院の守秘義務はどこまで信頼できるものなのか？
知られたくない。
知られたら絶対に結婚を許されないだろう。だが、それとは別に、親に知られたくない。
妊娠し、流産したことを。

絶対に。
絶対に！
瑞希が愛姫を想うたびに罪の意識に苛まれるように、愛姫の心から罪が消えることは無いのだ。そしてそれが二人を結びつけ、愛ではなく、呪縛として縛り付ける。
祈るしかない。
父が調査のし直しなどしないように。医師たちが秘密を守ってくれるように。
自分を信じている。
分別があると思っている。
瑞希との夜を、後悔はしていない。だが、父には絶対に知られたくないし、言えもしない。　それが後ろめたい秘密というのだ。

愛姫の父は、瑞希のマンションに直接乗り込んだ。それは１２月。クリスマスイルミネーションと馴染みのメロディが耳から離れなくなった頃のことだった。
兄がらみでしか会ったことのない初老の男を、ただただ驚きの眼差しで見ることしかできない。しかし、自己紹介など必要がない間柄であることは確かだ。
「愛姫とつきあっているというのは本当かね？」
玄関先で突然言われ、瑞希は何と返事をしようか戸惑った。
「黙っているということは、本当なんだな。言いたいことはただひとつ。すぐ、別れてくれ。」
「え・・・？」
「君の過去は調べ済みだ。いい加減な男に、愛姫を任せることはできない。愛姫は何と言おうと、私の一人娘で、橋田家の跡取りであることは変わりない。君とは結婚させられない。つきあうことも、認められない。」
瑞希は唇をキッとひきしめ、そして言った。
「お断りします。」

「何？」
「確かに私はいい加減でした。兄と違って、誰にでも胸を張れるような生き方をしてきてはいませんでした。でも、今は違います。愛姫さんに少しでも相応しくなろうと、」
「笑わせるな、いい年をして！君がどうなろうと、私は君を認められないのだよ。法曹界の人間でなければ、結婚を認める気はない。愛姫が何を言おうと、それを真に受けるな。いいか、大事な愛姫に手を出したら許さない。それを覚えておくことだ。」
冷たい戒めを残し、愛姫の父は去っていった。
玄関から足が離れない。
どれほど時間が経ったろう。頭が冷えていくにつれ、瑞希は今の自分が、かつての可八と同じだということに気付いた。
絶対的な力で別れを強いられる。愛姫の父は、まさにかつての自分だ。
あの頃の瑞希は、兄に言ってることは絶対正しいと思っていた。兄を、いつかは目覚めさせられると思っていた。
愛姫の父の言ってることが間違っているとは思わない。だが、その理屈を覆すほどの強い気持ちがある。感情論、と鼻先であしらわれそうだ。だが、愛姫が自分を拒絶しない限りは、諦めることなどできない。いや、思いは一生変わらない。別れるときは、身を引くという形でしかありえない。
首を締め付ける濃紺のネクタイをゆるめると、ソファに身体を投げ出し、腰を埋めた。
愛姫との関係を、そうそう簡単に認めてもらえるなんて思ってはいなかったはずだ。しかし、こうして現実をつきつけられると絶望する。
愛姫は、知っているだろうか。自分の父が、このいい加減な過去を持つ男を決して結婚相手として認めることがないということを。
愛姫との夜についてはまだ知られていないようだ。知っていたら、「手を出したら許さない」などと言わず、有無をいわさず殴られて

いただろう。
こんな、額の前髪だけでなく、脳みそごとかきむしりたくなるような夜を、もう、幾度経験しただろう。兄の結婚話のころから、それは繰り返された。あれから、平穏な日などなかった。兄が結婚してからも、愛姫への罪で毎日苦しむ。
愛姫の父が、自分を許すときなどくるのか。
許してくれなかったら？
愛姫が、無理やり別の男と結婚することになっても、ただ、見ているのか？
できるわけがない。
愛姫が心からの幸せを感じているのなら、諦めはする。しかし、やりきれないだろう。
どんなに過去を後悔しても、やりなおせない。
償い、とは何か。
償える罪など、あるのか。
過去に遡ることが不可能なのに、犯してしまった過ちを繕うことなど可能なのか。
可八の父は獄中で自殺した。でも、死んだ妻は絶対に帰らない。
反省しようと、後悔しようと、死ぬほどの苦しみを味わおうと、起こってしまった過去を取り消せることなど絶対にできないのに、「償い」とは何か？
昔、偉い人が言ったらしい。罪を犯した人に、「ならば償えばいい」と。
それで被害者が救われれば、いいかもしれない。だが救われなければ、どんな苦行も「償い」とはいえないのではないか。
もし、愛姫が瑞希を強姦の罪で訴えていたとして、懲役刑になったって、愛姫の身体は元には戻らないし、傷ついた心だって癒えるかわからない。
瑞希は、愛姫との連絡を絶った。
すべての自信を失くしていた。

償う術を見失ったのに、愛姫を幸せになどできるわけがない。
そんな気持ちのまま会うことは、許されない気がしていた。

第３１話

年が明け、何日か経った頃。買い物から帰った瑞希は、玄関の外の人影に驚いた。
それは、白いコートを着た可八だった。
可八は瑞希を見ると、深く頭を下げた。
「明羅さんから頼まれたものを取りに来ました。」
「だいぶ、待ちましたか？寒かったでしょう。」
「いえ。大丈夫です。」
リビングのガスストーブを点け、お湯をわかす。可八は手土産に、東京駅構内で売られている有名店の洋菓子を用意していた。
紅茶を入れると、可八はだまって頭を下げ、すぐにカップに口をつけた。
「いつ、東京に着いたんです？」
「おととい・・・です。」
「じゃあ、昨日は橋田さんのところへ？」
「・・・ええ、まあ。」
この曖昧な返事は何だろう。即答でないところが、怪しい。
「兄から頼まれたものって何ですか。俺、部屋に行って取ってきますよ。」
「・・・あ、じゃあ、これを。」
可八は小さな紙切れのメモを瑞希に手渡した。
明羅の字だ。
喧嘩をしたまま、顔も見ずに帰ってしまった兄。あんなに、大好きだったのに。
明羅の部屋は、時折掃除機をかける程度で、あとは手付かずのままだ。カーテンの色でさえ、変わらない。
瑞希は頼まれた品を紙袋に入れ、リビングに戻った。
が、そこでは可八が蒼い顔でソファに頬をうずめていた。

「・・・可八さん！？」
可八は、瑞希を見ると体勢をゆっくりと立て直した。
「すみません。・・ちょっと。」
「具合、悪いんですか。」
「いえ、もう大丈夫です。」
「橋田さんに迎えに来てもらいましょうか？」
「いいえ。愛姫さんは、今、事務所の方たちと旅行に行ってるんです。」
「・・・でも、昨日は橋田さんと一緒だったんでしょう？」
可八の口が閉ざされた。瑞希は、可八が嘘をついていることを悟った。
「昨日、本当はどちらに？」
「・・・・。」
可八の唇は白くなるくらい固く結ばれた。
一体、何を隠しているのだろう？
「・・・まさか、兄を裏切るようなことを・・・？」
「そんな！・・・違います。」
可八の苦しそうな表情は、具合の悪さだけではないだろう。
瑞希は、ふと愛姫を思い出した。妊娠して体調を崩していながら、大丈夫だと言い張っていた愛姫。なぜか、今の可八と重なる。
瑞希は可八を放っておけず、明羅の部屋から薄い掛け布団を運んできた。
「ソファに横になってください。少し休んで、それでも駄目なら、今日は兄の部屋に泊まればいい。」
「そんなご迷惑はかけられません。私、今晩の船に乗ります。」
「船って、体力いるんですよ。もう切符を買っていたとしても、やめたほうがいい。」
「でも・・・。」
「あなたは兄の妻で、俺の義姉にあたるんですから、遠慮は無用です。」

可八にとって瑞希は、あまり好ましい人間ではないだろう。いくら瑞希が謝っても、それまでの冷たい態度が帳消しになったとは思えない。
だが、可八は柔らかな布団に身体を埋め、やがて目を閉じた。
リビングの暖房に気を遣いながらも、可八の眠りを妨げないよう、瑞希は自室へ戻った。
何でこんなに可八にやさしくできるのか、わからない。可八は愛姫に深く関わりのある人だ。だから愛姫同様、大切にしなければと思うのかもしれない。
しかし、可八はどうしたのだろう。愛姫が旅行中と知りながら明羅が可八を東京へやったのだとすれば、どういうつもりなのか。いくら明羅でも、必要なものを取りにいかせるためだけに可八を送り込むだろうか？そんなこと、瑞希に直接宅配便を頼めばいいことだ。それとも、この間の言い合いが原因で、瑞希を避けているのか・・・？
様々な思惑が頭に浮かんでは消える。が、わからない。
日も暮れ、瑞希がリビングへ行ってみると、可八はまだ眠ったままだった。額が青白い。やはり、具合が悪いのだ。
瑞希は、明羅のところへ電話をかけた。リビングの電話だと可八を起こしてしまうかもしれないため、自室から携帯電話を使った。
「すごく具合が悪そうだから、兄貴の部屋に泊まらせようと思う。」
『わかった。・・・頼むよ。』
「大体、なんで彼女は東京に来たんだよ？橋田さんは旅行中でいないんだろ？まさか、兄貴のものを取りにわざわざ来たわけじゃないだろうが。」
『病院へ、行かせるためだ。』
「・・・病院？やっぱり、どっか悪いのか。」
『そういうわけではないが。』
「じゃあ、何だよ。」
『・・・瑞希は、知らなくていい。』

「なんだよ、それ。こうして関わった以上、教えてくれたっていいだろう？」
『とにかく、病気ではないから。心配しなくていい。可八を、頼む。』
明羅はそう言い、一方的に電話を切ってしまった。
（何だってんだよ、わけわかんねぇ。）
台所に立ち、なるべく音を立てないように食事の支度を始めた。
鳥と野菜のスープが煮立った頃、可八が目を覚ました。
「おかゆくらいなら、食べられますか。」
瑞希が温かいお手拭を渡しながらたずねると、可八は疲れた顔で微笑んだ。
「ありがとうございます。いただきます。」
白粥をすする可八を眺めながら、瑞希は明羅の言葉を思い出していた。病院へ行ったという。でも、病気ではないという・・・。
（・・・ああ、そういうことか。）
瑞希は、スープの皿を可八に渡し、言った。
「もしかして、妊娠してますか。」
可八の表情は強張った。しかし、すぐに首をふった。
「いいえ、してません。」
「さっき、兄に電話したんですよ。そしたら、病院へ行くために東京に来たとか。」
「・・・そうですけど。」
「でも、病気ではないって、兄が・・・。」
すると可八はうつむき、そして言った。
「明羅さんが瑞希さんに言わない限り、私の口からは言えません。」
「だって、病院へいく必要があったのは、あなたでしょう？」
「そうですけれど・・・。」
夫婦の間には、たとえ実の弟だろうと、義理の弟だろうと、知られたくないことがあるのだろうか。
次の朝、瑞希は愛姫の携帯に電話をしてみた。

愛姫の父に交際を反対されて以来のことだ。
愛姫は夕べ遅くに旅行から帰宅していて、家にいた。
可八のことを知ると、すぐ、瑞希の家にやってきた。
可八はリビングで愛姫に再会した途端、立ち上がった。
「私、帰ります。」
「可八？」
「もう、ここに用はないからです。」
可八は、瑞希の方を向いた。
「お世話になりました。いろいろ、ご迷惑おかけしてすみません。」
強い意志の色が、可八の瞳に宿っている。
愛姫は息を呑んだ。一体、何があったというのか。
愛姫の困惑の色を読み取った瑞希はその場から離れ、しばらく二人きりにすることにした。　可八に何かがあったことは確かだ。兄の態度といい、夫婦関係にヒビでも入ってしまったのか。
リビングから出たものの、瑞希はどうしても気になって仕方がなかった。他人事ではない、自分の兄が関係しているに違いないからだ。
瑞希は廊下から中の様子を伺うように、扉にぴったりと身体をつけ、聞き耳を立てた。
暫らくは沈黙だけが続いていたが、やがて、ぼそぼそと会話らしき息遣いが聞こえてきた。　だが、もどかしいほど何も聞き取れない。
瑞希は、ほんの少し扉を開けて、中を覗いた。
と、そのときだった。
「何ですって？」
愛姫の声が鋭く響いた。
「一体、どういうことなの！？子どもを堕ろしたって・・！」
「！！」
瑞希の呼吸が止まった。
可八が何かを言っているが、聞き取れない。

じれったいと思うより早く、瑞希の身体は動いていた。
「可八さん・・！」
瑞希の声に、驚いた愛姫が振り返る。
「瑞希さん？」
「どういうことですか。子ども・・・堕ろしたって・・・！」
この話題に過敏になるのは、瑞希も愛姫も同じだ。
瑞希は、ふと、明羅が言っていたことを思い出した。
―　いつどうなってもいいように、この世に未練なんて持ちたくはない　―
（まさか・・・。）
だが、可八の答えは瑞希の予想通りだった。
愛姫の額が青ざめていくのがわかる。
可八は言った。
「私が、ちゃんと薬を飲んでいなかったのが悪かったんです。子どもはいらないって、初めから言われてたのに。」
「そんな・・！子どもがいらないなんていうのは明羅さんの勝手な都合じゃないの？だったら、気をつけるべきは明羅さんの方でしょう！」
「いいえ。それは、違います。」
瑞希は下唇を噛み締めた。
愛姫は子どもを堕ろしたわけではない。人工流産だった。だが、どちらにしろ生を受けられない子どもを宿したことを一生の罪として償っていこうとしている自分達の目の前で、自ら、しかも、何の障害があるわけではない健全なはずの夫婦が進んで堕胎するということが信じられない。しかも、それが自分の尊敬して止まなかった実の兄だということが、瑞希には受け入れられない。
「橋田さん。俺、兄に会いに行きます。」
「瑞希さん・・？」
「今からなら、午後の飛行機に間に合う。」
すると、可八の身体が弾かれたように瑞希の足にしがみついた。

「やめてください！」
「・・可八さん？」
「やめてください。こんな話、瑞希さんにも愛姫さんにもするつもりはなかったんです。話したことがばれたら、私、明羅さんに嫌われてしまう！」
愛姫は、可八の背を支えた。
「いいえ、可八。明羅さんは一体可八を何だと思っているの？この世に未練を持ちたくないのなら、初めから結婚なんてすべきではない人なのよ。可八の人生を何だと思っているの？結婚したのよ、子供ができて当たり前でしょう！」
「いいんです。私は、瑞希さんや愛姫さんがずっと言っていたように、業を背負って生きていくべき人間なんです。私と結婚して、明羅さんの何かがプラスになるのなら、それでいいんです。私は、明羅さんの人生の下敷きでいいんです。私は、明羅さんが好きなんです。好きな人のそばにいられれば、後は、何が起ころうと、かまわないんです。これ以上望むなんて、殺人犯の娘には贅沢なんですから！」
そうだ。
瑞希は可八に、殺人犯の娘らしくあれと言った。
愛姫は可八を、犯罪者の娘の分際で、と何度も罵った。
今、自分達は可八に同情して明羅を責めているが、かつての自分達と明羅とに、どれほどの差があるというのだろう。
「でも、俺・・。兄を許せない。」
「いいえ。私の血が後世に受け継がれるべきではないとおっしゃったのは瑞希さんです。
よかったではありませんか？ご兄弟の意見がぴったり合って。」
可八の言葉には嘲笑が含まれていて、瑞希は何も言えなくなった。
散々、可八を罵ってきたのだ。罪を背負って不幸に生きろと言い続けてきたのだ。それが現実になったところで、憐れむ資格などない。

可八は荷をまとめた。
「この話は、忘れてください。本当に、言うつもりはなかったんです。愛姫さんにも、会うつもりはありませんでした。だって、会う理由がありませんから。・・瑞希さん、お世話かけてすみませんでした。失礼します。」
「可八！」
玄関先で、愛姫は可八を呼び止めた。
「今日は、私のところに泊まっていきなさい。まだ、身体がつらいはずよ。」
しかし、可八は振り向かずに言い放った。
「私は、愛姫さんにとって他人ですよ。そんなこと、していただく理由がありません。」
「何を言っているの？そんなこと、」
「愛姫さんが言ったんですよ！他人だ、って！どうして御自分が言ったことを私が言うと否定するんですか！？」
足早に去っていく可八を、瑞希も、愛姫も、止めることができなかった。
可八の言葉がガラスの破片のように二人の心につきささっていた。
可八を虐げていたことを、こんな形で返されるとは。
暫らくの沈黙の後、愛姫は言った。
「明羅さんにとって本当に大事なのは、瑞希さんだけなんですね・・。」
「え・・・。」
「この世に未練を持ちたくないから、瑞希さんから離れたんですよ。それで、未練に繋がらない女を、傍に置いたんですよ。」
「兄は・・可八さんを好きだと言いました。」
「でも、未練になるほどではないのでしょう。」
そうだ。明羅は、そう言った。
愛姫はため息をついたが、その目には涙が滲んでいた。
「可八は・・・やっと、幸せになったと思っていたのに。でも、私、

その幸せを素直に祝福できなかった。殺人犯の娘が私より幸せになることが許せなかった。それが現実になったらなったで、こんな感情になる・・。」
「俺も、同じ思いです。同じ・・。」
今、瑞希と愛姫の感情はシンクロしていた。
同じ思いで、二人して泣きたいと思った。
だが、それは許されない、とも思っていた。
力なく玄関に降り立った愛姫は、瑞希に頭を下げた。
「可八がお世話になったこと、・・ありがとうございました。」
「いいえ。・・俺の、義姉ですから。」
瑞希の頬は、知り合ったときよりずっと細くなった気がする。愛姫はこれ以上口を開いたら、本当に泣いてしまいそうで、そのまま背を向けた。
「失礼します。」
冷たい音をたてて、重いドアが閉まった。
瑞希には、このまま愛姫との関係が終わりそうな気がした。
こんなに同じ感情を共有できるのに、互いを慰めあうこともできない。その空しさを抱えて、あと、どれくらいたてば愛姫と手を取り合うことができるというのか。
「両思い」は、この世で一番奇跡に近い偶然だと思っていた。
なのに、明羅と可八の関係は、奇跡ではなかった。半ば、明羅の陰謀だった。
そして、瑞希と愛姫の関係は、先行きの見えない暗闇に入り込んでいる。
明羅の本音を知り、愛姫は、傷ついたに違いない。かつて愛していた男の裏の心を見抜けなかった己を、責めているかもしれない。そして、弟である瑞希のことも、もはや信じられなくなっているかもしれない。
色々考えながら、暖かなリビングに戻ってきた。
テーブルに残されたカップのうち、愛姫に出した紅茶は、少しだ

け減っていた。
それは、あんな状況下でも瑞希に対しての礼を尽くした結果なのだろう。
そのカップの淵を、瑞希はそっと指先でなぞった。
胸の奥がこんなにも締め付けられる。
だが、それ以上に明羅と可八の一件が脳裏をめぐり、心を掻き乱す。
可八という他人が関わったことで、明羅と瑞希の作り上げてきた「家庭」は崩された。今は、明羅自らが瑞希との関係を壊そうとしている。
明羅は、瑞希なら理解するとでも思っているのか？
明羅は、瑞希が可八に同情するはずなどないとでも思っているのか？
―兄に会わねばならない―
瑞希はその夜、決意した。

第３２話

愛姫は家に戻り、明羅へ抗議の電話をかけようと思ったが、躊躇して、結局やめてしまった。可八が「明羅に知られたら嫌われてしまう」と言っていたのも気になったが、最大の理由は、明羅と大喧嘩をするだけのエネルギーがないということだった。

相手のためを思って、また、何かの意思を貫くために戦うには、相当のエネルギーが必要だ。その原動力となるのは情熱や愛情といったものだが、愛姫は可八に対して、その原動力となりうる愛情をもっていなかった。特に人との関わりを不得手としてきた愛姫に、仕事以外のことで他人と争った経験などなかった。それだけに、いざとなると尻込みしたのである。

外気を吸い込んだように冷たい窓ガラスに額を押し付けた。

沈んだ心で窓から眺める景色は、いつも明けることを知らないような、深い宇宙の色をしている。

真面目に生きていれば、どんなに苦しくてもいつかいいことがある。

母の口癖だった。

それが真実かどうか、未だによくわからない。ただ、真面目に生きていない人間にも幸運も快楽も訪れるのだということは知った。それ以上の不幸も訪れているのかもしれないが、それは傍からはわからない。

母は真面目に生きていた。なのに、結局精神を病み、自殺してしまった。

父は真面目ではない。しかし、仕事で成功し、愛人まで囲い、贅沢な暮らしをしている。

（どう生きても、所詮、結果は同じなのではないのだろうか。）

瑞希との恋に浮かれていた日々の後の、この仕打ち。

気分が浮かれれば、次に待っているのは深い落胆だ。

いつも、そうだ。
そう思うと自然の摂理を実感する。景気の波も、人生も、自然にも、必ず浮き沈みがある。
だが、どうしても、今は信じられない摂理がある。
嵐の夜の後は、必ず青い朝になるということ。
わからない。
いつ出られるかわからない真っ暗なトンネルに足を踏み入れているようだ。
これが愛姫に定められた業なのだといわれれば、そうなのかもしれない。
（私はこの先、どうすればいいのだろう。）
可八のこと。瑞希のこと。明羅のこと。そして、父のこと。
今まで考えなくてもよかったことが、時間に加速度のごとく比例してのしかかってきた。

瑞希が明羅に会うために飛行機に乗ったのは、明後日のことだった。
新学期を迎え、講師としての仕事が始まる前に、話を済ませたかった。
視界をさえぎる高い建物の代わりに、目に染みるほどの濃い緑が広がる地に、兄はいた。だが、その日の空は灰色に染められ、風は強く、瑞希の頬を突き刺した。
住所だけを頼りに町を歩きまわり、1時間後に平屋建ての家を探し当てた。
昼過ぎの静かな時間。町自体が休息しているかのようだ。
瑞希を出迎えた可八は驚いて目を見開き、息を呑んだ。
「なぜ・・。」
「兄に、会いに来たんです。いますか？」
可八は唇を震わせ、首を振った。
「何を、お話なさるつもりなんです？」

声を抑えているのは、明羅の存在を気にしているからに違いない。
「俺たち兄弟の問題です。」
「・・・おっしゃらないで、下さいますよね？」
可八の目は涙で潤んでいる。懇願の表情に、瑞希は一瞬躊躇したが、結局言った。
「あなたを責めに来たわけではありません。ですから、兄に会わせてください。」
と、そのとき。
「ー瑞希？」
玄関の奥の部屋から、明羅が現れた。
「どうしたんだ、突然。」
可八は観念したように首を垂れ、しかし、身体を固くしていた。
瑞希は、可八に小さく言った。
「心配しないでください。」
そして、明羅の方を向いた。
「ちょっと、話がしたくて。二人だけで。」
「・・・わかった。」
明羅は可八に何やら囁き、やがて可八は家を出て行った。
「可八さんは、どこへ？」
「近所の公民館だよ。年始めの集まりがあるんだ。2時間は帰ってこない。」
6畳ほどの茶の間。中央に置かれた卓袱台のまわりに配された真新しい座布団に、瑞希は座った。ほどなく、コーヒーの沸く良い香りが鼻をくすぐり始めた。畳の青い匂いと交じり合い、不思議な感じがする。
白い小さめのカップに注がれたブラックコーヒーに口をつけ、瑞希は少し息をついた。これから切り出す話のことを思えば、落ち着くわけもない。
「話って、何だ。」
明羅の低い声に、瑞希は言った。

「・・うん・・。」
「可八が、お前に何か話したのか。」
「・・正確には、橋田さんに話していたのを俺が聞いてしまった。でも、絶対に兄貴には言わないでくれって、頼まれてた。・・さっきもだ。可八さんは怖れているんだよ、兄貴に嫌われることを。」
明羅は視線を落とし、カップの取っ手をつかむ指に力を入れた。
「そうか。」
「俺には、理解できないよ。この世の未練って、一体何なんだよ。可八さんは、兄貴にとって一体何なんだよ。」
「・・その話は、この間、済んだはずだ。」
「済んだ？兄貴が逃げただけだろうが！大体、なんでわざわざ内地で手術を受けさせた？病院なら、この島にだってあるだろう。」
「この小さな島では、すぐに噂になる。俺たちが醜聞にさらされないためだ。」
次の瞬間。
瑞希の拳は、明羅の頬をまっすぐに貫いた。
明羅は少しよろめき、うつむいた。乱れた前髪で、明羅の表情は見えない。
瑞希だって、ここまでするつもりはなかった。だが、思うより身体が先に動いていた。
「信じられないよ！妊娠初期で飛行機だの船に乗ることがどんなに身体に負担をかけるか、知らないわけじゃないだろう？それとも、途中で流産してしまったほうが都合がいいとでも思ったのかよ！？」
明羅は視線を落としたまま、言った。
「どうして、今、瑞希がそんなことを言う？あんなに結婚するなと言っていたのはお前だ。殺人犯の血が受け継がれることを嫌悪していたのは、お前だ。そうだろう？」
「俺は、兄貴が本当に好きな人と、本当に幸せになれるのならと思って、許したんだ。」
すると、明羅はクスリと笑った。

「瑞希は、俺よりずっと純粋なんだな。」
「・・えっ？」
「俺は、恋だの愛だのいうものを信じていない。そんなものは、幻想だ。学生の頃にはそれを悟った。だから、俺の心はどんな女にも動かない。どんなに愛し合って盛り上がって結婚したとしても、やがては冷める。そのとき、後の果てしなく長い人生を一緒に過ごすためには、感情以外の確かな理由が必要なんだ。その条件を満たしていたのが、可八なんだ。可八は橋田さんとは違って芯から強かだ。俺が内乱の激しい地へ赴いても、死んでも、生きていける。」
「可八さんは、兄貴を心から思っている。その心を、利用していることになるんだぞ？」
「面白いことを言うんだな？女を散々利用しつくしてきたお前が。」
「・・・俺が・・！そりゃあ、俺は兄貴みたいに品行方正じゃあなかったさ。だけど、今、俺がここまで来ずにはいられないほど許せなかったのは、子どもを堕ろさせたことだ！人の命を、何だと思っているんだよ？可八さんの気持ちを考えたか？身勝手な『未練』とやらのために、大事なものを犠牲にしているとは考えないのか！？」
明羅の薄い唇が、固く引き締められた。
だが、瑞希の口は堰を切ったように止まることはなかった。
「一人残された可八さんが、平気で大丈夫なんて、兄貴の思い上がりだ。兄貴を失って悲しい思いをさせるために、結婚したようなものじゃないか？可八さんは強かかもしれないけど、それは強かでなければ生きてこられなかったからだ。そうだろう？父親が母親を殺す現場を目撃して、橋田さんの母親が首をくくる現場に居合わせて、その記憶を未だ封印して生きている人だぞ！その人が、死について過敏にならないわけがない！兄貴がいなくなったあと、子どもがいれば救われるのかもしれないのに、それさえも奪ってしまうのか？自分がこの世に未練を残したくないがために！自分の心だろ、そんなものこそ、犠牲にしろよ！」
明羅の黒い瞳が、少し開いた。

「正直、お前ならわかってくれると思っていた。」
「わからないよ。1年前の俺なら・・理解していたのかもしれないけど。」
「瑞希を変えたのは、橋田さんなんだろうな。」
「・・・そうだよ。」
「それを聞いて、安心した。」
優しい目の明羅の表情が、切なく見える。
「俺の未練は瑞希だけだ。瑞希の幸せが確信できれば、それでいいんだ。」
「・・・俺だって同じだ。兄貴に幸せになってほしいし、危険な取材地になんか行ってほしくない。ずっとずっと、長生きして欲しいし、ずっと・・！」
喉が締め付けられる。だが、瑞希は言葉を呑み込むことはできなかった。
「兄貴は、俺の憧れだった。尊敬の的だった。ずっと、兄貴みたいになりたかった。その兄貴が俺を失望させるような真似をしたことが、許せない。人として、やっていいことと悪いことがある。兄貴は、罪を・・・犯したんだ。わかっているのか？」
「瑞希は、ないのか？」
「・・・流産させてしまったことは・・あるよ。」
「相手は、橋田さんなんだろう？」
「・・！」
息が止まるかと思った。いや、実際、数秒止まった。呼吸を忘れた。
だが、沈黙は肯定の証だ。
「橋田さんの入院に、瑞希が一晩ついていて、しかも病院で婚約者などと語っていたというから、ただ事ではないと思っていた。酒もやめ、食べることを楽しまず、自分を痛めつけだしたのもその頃からだったし・・。その理由が、やっとわかった。そして、俺の行為を責める、瑞希の気持ちも。」
「・・・。」

「瑞希は、俺の何倍も誠実で純粋だ。俺は、法に触れなければ罪だとは思っていない。」
「それは違う！堕胎は法に抵触する！それを逃れる例外事項を無責任な人間が都合のいいように解釈して利用しているだけだ！兄貴は経済的に苦しいか！可八さんは子どもを埋めないほど病弱か！可八さんは誰かに強姦されて孕んだか！違うだろう！？俺は、可八さんを責められない。彼女は殺人犯の娘だ。でも俺は、殺人そのものを犯した。直接手を下してはいなくても、全ての引き金をひいたのが俺だからだ。橋田さんが罪を背負って生きていくと言っているし、俺もその半分を背負って生きていく。それが、俺の償いだからだ。可八さんは、自分の存在が兄貴のプラスになるのなら、兄貴の人生の下敷きになってもいいと言った。それによって生きてきた意味があるのなら、償いの一端にでもなるのなら、構わないのだと言った。それなのに、兄貴は、何もしないでいられるのか？消えていった命を、まるで不要なものを捨てたときと同じような感覚で、生きていかれるのか？」
二人の視線が複雑に絡み合った。
「同じ過ちは二度と犯さない。それだけだ。」
「どうして！？男と女は違うんだ！兄貴には何もなくても、女の身体には傷が残るんだ！心にもだ！」
「結婚した以上、可八を大切にはする。それが俺の義務だからだ。」
「それで可八さんを幸せにしているとは言えないだろう？」
「わからないな。どうしてそんなに可八に肩入れする？少し前までは可八に肩入れする俺と衝突していたのに、今度は間逆だ。橋田さんとのことが、そこまでお前の価値観を変えてしまったのか？」
「・・・そうかもしれない。でも、やっぱり子どもを堕ろさせたことが、可八さんに肩入れせざるを得ない理由なのかもしれない。兄貴がどう思おうと、俺は、自らが犯罪者である以上に、犯罪者の弟になったんだ。だから、その分の償いもしていく。」
「やめてくれ！俺のことで、お前を苦しめるつもりはなかった！」

「それぐらいのことを兄貴はしたんだよ！それを認識してくれよ！兄貴の人生は、兄貴だけのものじゃないんだ。俺のものでもあるし、可八さんのものなんだよ！それが血の繋がりであり、家族であるということなんだろうが！」
瑞希は興奮で震えだした唇を必死に噛み締めた。しかし、奥歯が音を立てるほどに止まらない。
だが、言うしかない。
「橋田さんは、可八さんに、離婚すべきだと言っていた。俺もそう思った。でも、可八さんは拒否した。堕胎の事実を口にしたことを兄貴に知られることを怖れて、・・兄貴に嫌われることだけを、怖れていた。兄貴は、可八さんの人生を何だと思っているんだ？殺人犯の娘だから、どんな人生になろうとかまわないとでも思っているのか！」
「そうだ。・・・お前の言うとおりだ。」
明羅は低い声でそう言うと、ゆっくりと立ち上がった。
「わかったら、もう行け。5時半の飛行機がある。これを逃すと明日まで帰れないぞ。」
「・・泊まっていけ、とは言ってくれないんだな。」
「一晩一緒にいてどうなる？理解し合えない。俺の本性と、お前の本性は違う。俺から言わせれば瑞希はロマンチストにすぎない。お前は、初めての恋愛に溺れている。多分、橋田さんもそうだろう。そんな盲目の状態のお前達には、俺と可八のことなどわからない。」
「関係ないよ。事実はただ一つ。兄貴は、殺人者で、俺はその弟でやっぱり殺人者だ。法が裁かなくとも、それは、変わらない。可八さんを殺人犯の娘だと蔑む資格などない。」
「違う。俺は可八とは・・違う。」
「そうだ、違う。彼女は殺人者の娘だが、兄貴は殺人者そのものだ。」
明羅は下唇を噛み、瑞希はそんな兄から視線をはずした。
「帰るよ。・・・俺は、兄貴が大事だ。だから、許せないんだ。」

別れの挨拶をせずに、瑞希は玄関を後にした。
明羅の姿は、少し前の瑞希そのものだった。
血は争えない。自分達の両親も、こんな風だったのだろうか。
（そうだ。俺だって、橋田さんとのことがなければ、ずっと、あんな風だったのだから。）
犯罪を許さない正義が、犯罪者の差別に繋がる。だが、正義を振り翳す以上、自らが清廉潔白である必要があるはずだ。しかし、大抵の人間は皆自分は正しいと思っている。己の罪を罪ではないと思ったり、罪に気付いていないこともある。

一日終わるごとに、また、死ぬ日が一日近づいたことになる。
それを教えてくれた教師のようになりたくて、その道に進んだ。
自分の学んだことを伝承し、自分と同じ過ちを犯して欲しくなくて、教壇に立った。
己の罪に気付かぬことこそ、真の罪であると、今は伝えたい。
当たり前すぎることだからこそ、人は気付かない。
それを、伝えたい。
今は若すぎて理解できないかもしれない。だが、それでいい。ただ、彼らの心の片隅に住み着いて、いつの日にか、その言葉の意味を噛み締める日がくれば、それでいい。
愛姫との仲を認めてもらうために、弁護士を志そうかとも考えはした。しかし、瑞希の目指すものは、そこにはない。大体、そんなことをして愛姫が喜ぶわけがないし、愛姫の父が快く思うとも思えない。

夜を迎え始めた空港には、光の滑走路が現れる。
それは、空への道しるべだ。
飛行機が加速し、地から車輪が離れた瞬間、瑞希は覚醒したように目を見開いた。
紺碧の空に一粒輝く星をめがけて飛び立った先に、何かが待って

いる気がする。

その星は、先の見えない闇夜に光る一つの希望のように思えた。

第３３話

瑞希から明羅に会ったという報告を受けた愛姫は、それからほどなくして、可八に電話をかけた。瑞希は瑞希なりに、明羅と向かい合ったのだ。それを聞いたとき愛姫は、自分だけが安全な場所で安穏としていてはいけないのだと、自らに鞭打った。

「明羅さんに知られたくないのなら、留守をねらって行くわ。都合のいい時間を教えて。」

しかし、可八はそれを拒絶した。

『どうしてです？どうして会わなきゃならないんですか。』

「会いたいの。会って、話をしたいのよ。今までのことも含めて。」

『私は愛姫さんに感謝してはいます。でも、それ以上の関わりを金輪際持つつもりはないんです。』

可八の声は冷たく、愛姫の心を凍らせた。

『私はずっと愛姫さんのお荷物でした。その荷物を請け負ってくれる人が現れたんです。それで、よかったはずではありませんか。今更、何をおっしゃりたいんです？子どもを堕ろしたことが、そんなに憐れですか。同情したいですか？』

「違う！・・・そんなんじゃないわ。じゃあ、言い方を変える。会ってください、私と。」

『愛姫さんが私に・・・頼みごとをなさるんですか。』

「そうよ。」

可八は暫らく黙り込んでいたが、やがて承知した。明羅のいない間に来て、少し話したらすぐに帰る、という約束をして。

３日後。

可八に丁寧に教えられた道順で、愛姫はすぐに家を見つけることが出来た。

「どうぞ。」

無愛想に愛姫を中に招き、可八はお茶を出した。

和室で卓袱台をはさみ、二人は正座で向き合った。
可八は居心地悪そうに、用も無いのに何かを取りにいくそぶりを見せたり、机の縁をなぞったりしていた。
「身体は、・・どう？」
愛姫のいたわりにも、可八はそっけなかった。
「別に・・。普通です。」
「瑞希さんが、来たそうね。それで私も可八に話をしなければと思ったの。」
「お二人とも、私があんなに頼んだのに・・！私の頼みなんか、きく価値なしということですか。」
「いいえ。私も瑞希さんも、あなたの気持ちは痛いほどよくわかった。だから瑞希さんは、明羅さんに会うことを躊躇していたようよ。それでも、やっぱり会わずにはいられなかったのはなぜだと思う？瑞希さんは明羅さんが本当に大事で、私も可八が・・・大事だからよ。」
可八は小さく嘲笑した。
「素敵な理由ですね。」
「いいえ。この決断は、私も瑞希さんもある経験をして、罪を背負ったからなのよ。そうでなければ、多分、こんなことしなかったわ。」
「・・・罪を背負った？」
可八の瞳の色が、少し変わった。
「ええ。」
愛姫は、決して口にするつもりはなかった秘密を、今、打ち明けようと思っていた。瑞希が明羅を諭すために告白したように、愛姫もまた、告げることを決意していた。
「可八が子どもを堕ろしたって聞いたとき、私も瑞希さんも、すごく憤ったでしょう？それは、私が瑞希さんの子どもを・・・流産しているからなの。」
「・・・！」

愛姫は背筋を改めて伸ばし、唇を引き締めた。
「私が入院したとき、瑞希さんが付き添っていたのは、それが理由だからよ。」
「・・・あのとき、お二人はもう、付き合ってらしたんですか？」
「いいえ。ただのなりゆきよ。だから私は初めから堕ろそうと思っていたし、身体を痛めつけることを厭わなかった。なのに・・・駄目だった。いざ病院へ行くことができないのよ。ためらって、ためらって・・・結局、身体がもたなかった。」
「瑞希さんは？瑞希さんは、そのことを知って、どうしたんです？」
「知らなかったのよ。知らせるつもりなんてなかったし。でも、可八と明羅さんの電話の内容から、私が妊娠してることに勘付いたらしくて、私を訪ねてきた。そのとき、私・・・街中で倒れてしまったの。救急車で運ばれたときには、母体が危険だから流産させてもいいかって、医者が言ったそうよ。瑞希さんは、それで頷いたの。」
すべて吐露してしまった開放からか、愛姫の口は饒舌になっていた。
「瑞希さんは、一人の命を絶った責任は自分にあるのだと言うの。でも、身体を労わらなかったのは私なのだから、私が・・いけなかったと思っているの。結局私たちは、互いに殺人を犯したために、その償いをしていかねばならないと決めたのよ。」
「殺人・・・？それは、違いますよ。」
「いいえ、違わないわ。『人』として認識されるかどうかで殺人になるかどうかを判断するのは法や医療の便宜上の話よ。問題は『人』かどうかではなく、命が芽生えたかどうかなはず。だから、堕胎罪があるのよ。それがわかっていながら、私は妊娠の事実に怯えて、自分の身をどう守るか、世間からどう隠すかしか考えていなかった。だから、罰が当たったの・・！」
愛姫は、いつしか下を向いていた。
両肩に首を埋めるようにして、愛姫は拳を握り締めていた。
「瑞希さんも、私も、可八を殺人犯の娘だといって貶(けな)していた。でも、今の私たちにそんな資格はない。だって、殺人犯そのものなん

だもの。」
　だが、可八は首を振った。
「それは、やっぱり違いますよ。愛姫さんや瑞希さんがそういう考えを持つのは立派だと思いますけど、実際に裁かれる罪ではないんですから、誰にも後ろ指さされることはありえない。自分たちの心の中で罪だと思って、償っていって、そんなの、ただの自己満足ですよ。」
　愛姫は一瞬、言葉を失った。その隙をつくように、可八は言い放った。
「だから、私の立場より下になったとか、軽々しく口にしないでください。そんなことが私の慰めになるとでも思ったんですか？それこそ、思い上がりだわ！」
　可八の叫びは、鋭いガラスのようだった。だが、愛姫は続けた。
「それはそうかもしれない。でも、私が可八に言いたかったのは、こんなことじゃない。
私も瑞希さんも願ったのは、私たちの味わったあの苦い思いを、二人に繰り返して欲しくないということなのよ。私は忘れない。私の子どもがいると確信したときの、あの高揚を。身体と精神の変化を。そして、それが無くなったときのせつなさ。自分の一部を無理やり千切られたような、あの感覚を・・！可八だって、そうだったでしょう？だから、私は明羅さんが許せなかった。明羅さんと一緒なら可八が幸せになるはずだって確信していたの。だからずっと、私より幸せな可八を素直に祝福できなかった。でも、今はわからない。明羅さんに可八を託したことが、間違いだったんじゃないかって・・心配になって。」
「・・・余計な心配ですよ。」
　一緒に暮らしていた２０年の間には、決して聞くことのなかった冷たいセリフが、次から次へと愛姫を襲う。一緒にいたときは、いつも愛姫の陰で怯えていて、控えめだった可八。その裏で、愛姫をどう思っていたのか。今、ようやく思い知らされた気がした。

「本当は、何もしないで傍観していようと思った。でも、瑞希さんが明羅さんと話をしたって聞いたとき、私の中にも同じように可八を思う気持ちがあることに気付いたの。確かに私たちは他人よ。他人だからと、見て見ぬふりをしていたほうがずっと楽よ。でも、楽でないことをわかっていてでも動かずにいられないこともある。それが、私の中にある、可八への思いなのよ。」

「いまさら、そんなこと！間違っても愛姫さんを家族だなんて思っちゃいけないと自分にいいきかせて生きてきたんですよ？どんなに愛姫さんが優しくても、頼っちゃいけない、甘えちゃいけないって！それでよかったんですよ。だって犯罪者の娘という私が、愛姫さんの家庭を壊したんです。憎まれて当然だし、それが私が継いだ報いなんですから。愛姫さんは、もう私と関わる必要はないんです。いいえ、関わっちゃいけないんです。」

「可八・・・。」

「幸い、この島では、私の正体はばれていません。平和に暮らせているんです。私は、例え愛姫さんのお父様が亡くなっても、お葬式には行きません。」

可八は愛姫の父をずっと「おじ様」と呼んでいた。しかし今は、それさえ、ない。

「その覚悟で、内地を後にしたつもりです。おじ様は、その名を知られた方。少なからず話題になって、２０年以上前の私の件も持ち上がるはずです。そのとき、私の苗字が変わっていることが知れたら、今度は明羅さんや瑞希さんが日本中の人から後ろ指さされるんですよ。だから、私は息を潜めて生きていくんです。そうしていくしかないんです。」

可八の決意は、愛姫や瑞希の「罪」や「償い」とは明らかに違う。これが、自分自身に科すのではなく、社会から裁かれる「罪」の重さなのだろう。

「明羅さんと瑞希さんが兄弟である以上、私は愛姫さんを完全に断絶することはできないでしょう。でも、それは最低限におさめます。

私たちは他人です。絶対に、家族とか身内にはなりえないし、なるべき情も捨てなければならない。それが、私の務めですから。でも、」
可八は付け加えるように言った。
「本当に、感謝はしてます。愛姫さんや愛姫さんのお父様の幸せを心から願っています。だからこそ、お別れするんです。」
「・・・それが、答えなのね。」
「はい。」
「私があなたを必要だと言うことも、あなたは、拒絶するのね。」
「そうです。」
愛姫は、可八をまっすぐに見つめた。
そこにいるのは、死んだような目をした6歳の少女でもなく、結婚式で手作りのドレスを着て微笑んでいた女性でもなかった。父親の犯した罪を背負って生きていくために、どうすべきかを決意した、殺人者の血を継ぐ娘だった。愛姫との決別は、忌まわしい生い立ちからの脱皮を意味しているのかとも思ったが、決してそうではない。これからの可八は、自分を取り巻く人々が害を被らないように、自分の身分をひた隠し、社会の影で、ひっそりと生きていくのだ。
愛姫は、他人から責められることがなく、社会から裁かれることもない罪を犯した。だから自分自身で罪を自覚し、償おうと決めた。それが瑞希との共通の思いだった。しかし実際のところ、己の罪を骨の髄に刻み付け、己に鞭打って生きる他、償う術がないことに悩んでいる。可八はそれを自己満足と言った。償ったって、失ったものは戻らない。命はもちろん、心の傷も、平穏な日々も、家庭も、財産でさえも完全に元に戻るなんてことはないだろう。加害者が自分の財産も人生も大事な物も命さえも投げ打ったって、取り戻せるものは殆どない。何年刑務所に入ろうと、死刑になろうと、それが被害者側にとって何になるというのか。慰めにくらいにはなるのか。しかしそれを、「償い」と呼べるのだろうか。
愛姫は、可八の件では被害者に当たる。母を自殺に追いやったの

は可八で、幸せな家庭を奪ったのも可八だと思っている。だから、可八が幸せになることが許せなかったし、一生、すべてに遠慮して生きていくべきだと思っていた。それが「償い」というより、当然だと思っていたのだ。

だが、実際に苦しい散々な人生を歩んできた可八を見てきた愛姫は、もう、可八を責める気持ちが薄れていることに気付いた。可八が死ねばいいと思ったこともあるし、小さい頃は、本気で街中に置き去りにしかけたこともある。だが、二人きりで生活していく中で、可八は愛姫にとって欠かせない存在になっていた。「もし、母が生きていたら」と、何度も思った。だが、可八がいなくても、父の浮気が母を殺していたかもしれないし、事故で死んでいたかもしれない。やがて、可八の存在と母の寿命は関係がないのではないかと思えるようになった。今は死んだ母より、生きている可八の命を大事に考えねばと思う。

長い時間をかけて、愛姫の心は少しずつ、少しずつ溶けていった。可八の苦労、行動、世間からの仕打ちなどを目の当たりにしながら、徐々に可八を怨む気持ちが薄れていった。

それだ。

年月をかけて被害者に、怒りや怨み、憎しみを少しでもやわらげてもらうこと。

それが「償い」の持つ意義なのではないか。

奪ったものを返すことができず、過去を変えられない以上、「償い」は未来の何かを変えることしかできない。その「何か」を、「被害者の心」に求めるしかないことがある。犯罪によって被害に遭ったすべての人・・・被害者やその周囲の人々だけでなく、加害者に関わりのある人々も含めたすべてを「被害者」として考えねばならない。そのすべての人々が「償い」という行為によって心が変わるかどうかはわからない。変わるための時間も様々であろうし、やはり一生変わらない人もいるだろう。それでも、少しでも心が和らぐことを信じて、加害者は償っていくしかないのだ。一生報われな

いかもしれないと知りながら、ただひたすらに自分のできることを考え、差別に耐え、すべての幸せと決別し、独りで生きながらえていく。償いの相手の心がわからない以上は、やはり自己満足に終わるのかもしれない。だが、加害者にできることが「己の人生すべてを捨てること」しかないのだとしたら、それをひたすら自分に科すしかないのだろう。

可八は親を失った点では被害者だが、加害者の身内ということで他人に害を与え、加害者になった。その被害者になった愛姫は、可八の償いで心が変わった。完全に、とはいえない。許すことも出来はしない。だが、これ以上可八が苦しむことを、もう、望まない。

「可八は十分に償っているわ。」

不意に、そんな言葉が愛姫の口をついて出た。

可八は、驚いたように愛姫を見た。

「十分よ。もう、十分に可八は苦しんだ。私は、そう思ってる。」

「愛姫さん・・・。」

「本当よ。可八は少なくとも私に対しては、十分すぎるほど償ったわ。だからもう、いいのよ。」

世間は可八が被害者だということなど考えず、加害者の娘としてだけ扱う。そしてそれは、一生、拭い去ることができない。だが、少なくとも愛姫は、これからは可八を被害者として扱おうと思う。

今回、明羅の行為が可八を被害者にした。そのことも、含めて。

愛姫は言った。

「あなたは明羅さんが可八に求めた仕打ちを、怨んでいないの？」

可八は少し口をつぐみ、そして、答えた。

「殺人犯の血は、私で絶たなければ。」

「それも、償いだというの？」

「・・・はい。」

「明羅さんの思惑は、別のところにあっても？」

「ええ。」

可八が堕胎の事実を口にしたとき、明らかに可八の痛みを感じ取

ることができた。可八が何と言おうと、あれは事実だ。だからこそ愛姫も、瑞希も、明羅に対して憤りを感じずにはいられなかったのだ。だが、可八はそれを口にしない。どんな苦しみも、悲しみも、自分が負うべき罪の償いだというのだろう。それが、可八が選んだ生き方なのだ。それが、可八の言う「結婚してこその償い」という意味だったのだ。

別れ際、愛姫は可八に訊いた。

「私の結婚式には、でてくれる？」

可八は微笑んだ。

「相手が、瑞希さんなら。だって、そしたら愛姫さんは私の義妹ですもの。でも、」

「わかってる。・・・その日だけで、いいの。」

愛姫はこのとき初めて、可八と別れることを寂しいと感じた。

可八の結婚式の日、さめざめと泣いたのは、己の孤独と罪に泣いただけだ。でも、今は違う。愛姫の目尻にうっすらと滲んだ雫が、同じように可八の目にも宿っていた。

さよならは言わない。

一度背を向けたら、もう、振り返らない。

二人はようやく、それぞれの道を歩き出したのだ。

1週間後。

瑞希の下に、明羅から電話が入った。

『昨日、橋田さんから手紙をもらった。』

「手紙？」

『ああ。参ったよ。瑞希が俺に言ったことと、まったく同じことが書かれていたんだから。』

「・・・そうか。」

『瑞希は、橋田さんと人生を共有していけるよ。価値観を共有し、同じ方向を向いて生きているのだから。』

「でも、それは結婚できるかどうかとは違う。現に、俺は橋田さん

の父親から交際を反対されている。」
『でも、あきらめはしないだろう？』
「もちろんだ。・・橋田さんが、別の男と結婚しない限り。」
『それくらいの覚悟がない限り、結婚などと軽々しく口にすべきではない。よかったよ。瑞希が、本当に一緒になるべき人と出会えて。』
「・・・兄貴は、違うのか？」
瑞希は、受話器を握りなおした。
「兄貴にとって、本当に一緒になるべき人は、可八さんだったといえるのか？」
『・・いえるよ。』
「でも、計算ずくの結果だろう？」
『そこまでではないよ。いくらなんでも、全く情の湧かない女と一緒にはいられない。』
「だけど・・。」
『俺にも色々考えがあるから、これ以上は何も言わないでおく。ただ、これだけは本当だ。俺は、可八の罪を共に背負う覚悟を持って、一緒になった。そして、俺はいつだって瑞希を思っている。お前の幸せを、誰よりも願っている。』
瑞希は、切なく眉根を寄せた。
兄が何をしようと、やはり気持ちは変わらない。
「わかっているよ。・・わかってる。それは、俺だって同じなんだから。」

瑞希はその日、明羅の置いていった食器をすべて紙にくるみ、食器棚の奥にしまった。その場所は、死んだ両親の食器がある場所だった。
いつか兄がこの家に戻るかもしれない、もしくは、この家で４人で暮らす日がくるかもしれないなどという期待をすべて捨てた。

兄の人生は、瑞希の知らない世界で動いている。犯罪者の娘と、その夫としての人生を歩みだしている。それを共有できる日を、もう、夢には見ない。この世でたった二人の兄弟。しかし二人の世界の終わりは、もう、とうに訪れていたのだ。

（俺は、俺の道をこの足で生きていく。もう、兄を頼ってはいけない。頼ってはならない。兄が守るべきは可八さんであって、俺ではない。俺は、俺の守るべきものを守っていく。）

最終話

2月。
愛姫はその日、初めて瑞希と一緒に母の墓参りをした。
小雪の舞う中、富士山麓の大きな霊園に、二人以外の影はなかった。
母が好きだった白いカサブランカを飾り、線香を供える。
ここへ来るときは、いつも一人だった。父と来ることがないのはもちろん、可八を連れてくることもなかった。可八の封印された記憶を呼び起こしそうで、こわかったからだ。
橋田家代々の墓。ここには、いずれ、父も眠る。その日がくるまでには、母のためにも父には改心していて欲しい。父がここへ入ることは、やむをえないことだからだ。
愛姫は魔法瓶に入れた緑茶をカップに入れ、和菓子と共に墓前に供えた。それから、二つの紙コップにも緑茶を注いだ。
「一緒に、召し上がっていただけますか。」
「・・もちろん。」
「小さい頃から、こういう風習でした。他はどうか、わからないんですけど。」
「俺は、両親の墓参りではただ線香と花を供えるだけですが、こういうのもいいですね。」
緑茶の湯気で身体を温めるようにして、二人は墓の前に立っていた。
この墓参りを申し出たのは瑞希だったが、それは愛姫をこれ以上ないほど喜ばせた。
一人きりでの墓参りは、自分がこの世に一人きり取り残されているようで、いつも寂しかった。
だが、これからはそんな思いをしなくてもいいのだろうか。
愛姫は、備えられていた和菓子を半分にして、瑞希に渡した。

「ここに食べ物を置きっぱなしにしてはならないんです。これは、霊園のルール。」
「・・いただきます。これも、橋田さんのお母様の好物ですか。」
「ええ。・・・でも、本当にそうなのかはわからない。１２歳の私が、母をどれだけ解っていたのか・・。」
「でも、それが橋田さんの記憶なんですよね。」
「・・・。私は母が死んだ後、なるべく母のいい思い出だけを思い返すようにしていた。死んだときの顔を思い返さずにはいられないから、それを打ち消すような思い出を探していた。そのときに思い返した事だけが、記憶として残っているんです。本当は、母はこの花が好きではなかったかもしれない。このお菓子も、たまたま一度口にしたときの事を記憶に留めているだけのことなのかもしれない。」
「・・橋田さんは、この花も、お菓子も、嫌いですか。」
「いいえ。・・好きです。」
「じゃあ、あなたのお母様だって好きですよ。絶対に。」
瑞希の微笑みは、優しかった。
愛姫は、心から思った。
瑞希と、一生を共にしたいと。
それは、理屈ではなく、本能が欲している。
墓から立ち去る際、二人は再び墓の前で手を合わせた。
瑞希は、心の中で、愛姫の母に言った。
愛姫と共に生きることを、許して欲しいと。
愛姫の父からは反対されているが、必ず、愛姫を幸せにするからと。
この世の誰といるよりも、愛姫が幸せだと思えるようにするからと。
自分よりもずっと長い時間手を合わせて目を閉じている瑞希を、愛姫は心から信じられると確信していた。
小雪の中、二人は傘をささずに歩いた。

二人は、手を繋いだり、腕を組んで歩かない。
いつも、ただ、横に並ぶ。
それがいいと思っている。
二人の間の性のわだかまりが無くなったとしても、この距離は変わらない。
これが二人のスタンスだからだ。
もし、愛姫の父が眼の黒いうちは許さないと言うのなら、それでもかまわない。
もう、人生を共に歩む相手は、他に考えられない。
同じ罪を共有し、償っていくという人生。
だから、二人の関係は溺れない。いつも互いの瞳を覗けば、過去の過ちを思い出す。
どんな青い空の下で羽をのばして生きていても、二人の瞳の奥にはいつも紺碧の窓が存在し、あの夜を映し出すのだ。
うっすらと積もった白い雪に、二人の足跡が薄く残された。
ほのかに梅の香りが漂う、春を予感させる氷点下の日だった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0739b/

紺碧の窓

2010年10月8日11時56分発行